

にありと知るが如し、故に信解と名く。下に深信と云ふは、此の信を梵音には(一)捨擲駄と云ふ、是れ事に依り人に依る信なり。長者の言を聞くに、或は常情の表に出づれども、ただ是の人未だ嘗て欺誑せざるを以ての故に、即ち諦受して依行するが如きを亦名けて信とす。上の文の信諸佛菩薩と義は同じ。梵語は本是れ兩名なりしかども、唐音は以て甄別なきが故に、同じく名けて信と言ふのみ。若し人、上の如くの不思議法界を説くを聞かんに、宿殖の善本を以て神情明利なるが故に、即ち能く其の言を忍受して、衆生の心中に決めて此の理ありと知るをば信解と名く。又先世に已に曾て善知識に親近せしが故に、三寶に於て縁深くして、比量籌度す可からざる處なりと雖も、即ち能く懸かに信するが故に深信と曰ふ。勤勇は是れ精進の別名なり。釋論に云はく、譬へば井を穿るに、已に濕泥を見るときは、轉た精進を加へて必ず水を得んことを望むが如く、又火を鑽るに、已に煙を見るときは、倍々また力め勵みて、必ず火を得んことを望むが如しと。故に信解に次ぎて勤勇を明すなり、然る所以は、今此の自然の智慧は要す瑜伽に因る、而も此の瑜伽は必ず大精進力を須るが故に。釋論に云はく、禪定智慧は福を以て願求す可からず、亦能觀を以て能く得るにも非ず、

要す須らく身心精勤し、急著して懈らざれば乃ち成辨すべし、佛の説きたまへるが如く、血実脂髓みな竭盡せしめて、ただ皮骨筋のみあらしむとも精進を捨てざれ。是の如くすれば乃ち定慧を得、是の二事を得れば衆事みな辨すと。故に精進の性を具せる者を須めて方に傳授すべし。復次に精進は是れ一切善法の根本なり。能く先世の福德を發動すること、雨の種を潤して能く必ず生せしむるが如し。勤勇の心なければ、宿殖の業ありと雖も發起するに由なし、乃至今世の利樂すら尙ほ得可からず、何に況や菩提の道をや。是の故に發行の因縁に由りて便ち深信を得。深心を以ての故に、即ち能く勝法を志求し衆生を荷負す。須らく養ふに大悲胎藏を以て、増廣することを得しむべし。故に常に利他を念する性ある者に、方に傳授す可しと云ふなり。復次に阿闍梨瑜伽の中に於て、諸佛菩薩の(一)其れ斯の如くの徳を具せりと稱したまふことを見聞し、或は衆聖の前に在りて、誠を至して懃懇に道要を希求して、多時を経れども初より懈退せず、乃ち利他の事を行ひて衆生を救攝するを以て、本尊哀愍して教授せしむと見る。諸そ是の如くの例、意を以て知る可し。又深行の阿闍梨は六根清淨なるが故に、彼の無量劫以來の障道と成道の因縁とを見て、錯謬あることなし。又普門漫荼羅の根

縁相攝の處に於て、亦悉く之を知るをば乃ち善く弟子を觀すと名くるなり。

經に云はく、「若し弟子是の如くの相貌を具せらば、阿闍梨自ら往きて勸發して是の如く告げて言ふべし」とは、此れに二義あり。一には則ち弟子の疑心を除くが故なり。但し無智は疑悔して永く失をなさんことを恐る、是を以て妄に人に與へず、必ず是れ傳ふ可きには自ら當に求めて授與すべし、來り請ふを俟たず。二には阿闍梨の恡心を除かんが爲の故なり、乃至無間の火聚の中にも流通す可きものあらば、亦當に往赴すべし、況や良縁の求むるに遇ひて而も惠まざらんや。

次に五偈あり、其の勸發の方便を明す。初めの偈に云はく、「佛子此の大乘眞言行道の法を、我れ今正しく開演せん、彼の大乗の器の爲なり」とは、意は言はく、汝佛子まさに知るべし。汝は是れ大乘の器量なるを以ての故に、今此の大乘眞言行、所乗の道の法則儀軌をば、信受するに堪能せり、我れ今當に正しく之を説くべしと。

次の偈に「過去の等正覺及び未來世現在の諸の世尊は饒益衆生に住したまふ、是の如くの諸賢者は眞言妙法を解して、勤勇にして種智を獲、無相の菩提に坐せり」とは、即ち是れ十方三世の諸佛の一切の方便門を開くに、唯だ一道を以て成佛して更に餘道

なし。佛佛同道なるを以ての故に、今また諸佛を引きて證明す。是の事は法華の中に廣く説くが如し。又住饒益と言ふは謂はく、衆生を饒益し安樂する所多きは、即ち是れ如來の住處なり。諸賢者とは即ち是れ如來なり、普賢の願行悉く已に圓極するに由るが故に、以て稱とす。皆此の眞言の妙法を解するに由りて、大勤勇を得、一切智を成就す。偈頌の省ける文に就くが故に種智と云ふなり。諸法の寂滅に坐するは即ち是れ菩提なり、已成今成當成に非ず、法として觀す可きことなく、他に從ひて得るに非ず、まさに何の相かあるべき。此の菩提は説きて以て人に示す可からざるが故に、次の偈に更に外迹を以て之を明す。

偈に云はく、「眞言の勢は無比なり、能く彼の大力の極忿怒の魔軍を摧く釋師子救世なり」とは、意は言はく、定まれる相なしと雖も、而も一切の威力を具へて、能く諸魔を伏し諸の外道を制して、甘露の門を開き大法輪を轉す。一切の人天是の如くの迹を見るが故に、號して釋迦師子救世間者とす。烟を見て火を知るが如し、故に當に信受すべし。次の偈に云はく、「是の故に汝佛子、是の如くの慧方便を以て成就を作すべし、當に薩婆若を獲べし」とは、是れ行人を勸發して彼の果を求めしむるなり。汝今幸に

自ら心を有せり、何ぞ之を證せざらん、ただ當に此の妙慧を以て成就を作すべし。久しからずして自ら當に一切智を成すべし。上の文に、金剛手直ちに毗盧遮那に問ひたてまつる、云何にか一切智を得たまへると。佛も亦直ちに答へたまふ、實の如く自心を知る、是れを一切智と名くと。今此の中の教授の義も亦同じく然り、直ちに無相の菩提を擧げて即ち勸めて修證せしむ。更に行位の差別として以て其の間に錯まちふ可きなし。前の品に廣く諸相を明して、種種の名字莊嚴を作すと雖も、心處を論ずるに至りては意皆是の如し。

經の偈に云はく、「行者悲念の心を以て發起して増廣ならしめよ、彼れ堅住して教を受けなば、當に平地を擇ぶべし」とは、言はく阿闍梨已に弟子を得たれば、次に治地の支分を明すなり。此の中の行者の字を梵本には眞言者と云ふ、偈の中に六字ある可からざるを以ての故に、意を取りて之を刪れり、下の文に頗る此の例あり、復煩はしく説かじ。謂はく、眞言者數々しほく是の如くの善法を以て其の心を發起して、即ち彼れの意樂を漸く増廣なることを得しめよ。彼れ堅住して教を受けて、また移轉せずと知らば、方に爲に漫荼羅を作るべし。或は瑜伽の中に於て、彼れの根縁已に固しと見て然

(一) 蘇悉地等
悉地經擇處品、蘇
婆呼經分別處所
品、聖經經簡擇地
品、守護經陀羅尼
功德儀軌品等な
り。

る後に地を擇ぶべし。金剛頂の大本及び(二)蘇悉地等の經に廣く地相を説けり。然れども其の大意をいはば、今此の世界は自ら餘の淨域の如く坦然平正ならず。但し下の文に説く所の諸の勝處の中に隨ひて、平正端嚴にして圓壇を造る可き處を擇び取りて、すなは輒ち動作し施爲するに妨礙する所なくば、便ち事に充つ可し。復次に今諸壇を造ると何れの處にも皆得、毗盧遮那遍一切處の平正の心地に、方に大悲漫荼羅を作るが如し。但し所説の勝處の中に隨ひて、少分平正にして淨治す可き處あらば、此の中に於て萬徳の漫荼羅を開出せよ、淺深の重數は前に准じて廣く釋すべし。

偈に云はく、「山林に花果多く、意を悦ばしむべき諸の清泉は、諸佛の稱歎したまふ所なり、圓壇の事業を作すべし」とは、諸の勝處の中には最も山林を以て上とす、重巖衆峯端嚴幽寂なりと雖も、若し花果流泉なくば人の樂はざる所なり、則ち衆縁多く闕けて亦住するに堪へざるが故なり。種種の名花甘實あり、兼て清淨なる泉池ありて、情に愛悦せらるる處を須るよ、則ち是れ佛の稱歎したまふ所なり、漫荼羅の事業を作す可し。或は行者、三昧の中に於て、是の如くの勝處を見るに、若し聖尊の稱説する所を聞かば、彼の處に於て之を作さしめよ。下の文も例して爾り。復次に山とは梵には

(1) 娜伽と云ふ、是れ不動の義なり。謂はく、阿闍梨瑜伽の中に此の行人を観るに、四姓の法の中に住して、行ふ所の善事堅心にして不動なり。謂はく師長に敬事し父母に孝養する等なり。八心の花果開萌して、淨法を出生す可き處あるに隨ひて、便ち漫茶羅を建立す可し。復次に淨菩提心は諦理に安住し、堅固不動にして、八方の大風も震揺すること能はず。大悲方便の花果處處に彌布して、常に淨法を流し衆生を利樂す、最も是れ佛の稱歎したまふ所にして、漫茶羅を作るに好き處なり。

次の偈に云はく、「或は河流の處に在りて鷺鴈等莊嚴せば、彼れ慧師を以て悲生漫茶羅を作るべし」とは、若し名山を得ざれば即ち泉水を其の次とす。謂はく、諸の河流の常に斷絶なき處に妙音の好鳥翻けり集りて游泳し、端嚴清潔にして鬱煩を遠離せば、即ち壇を作る可し。鴈とは正翻には非ず、梵本には(3) 娑羅娑鳥と云ふ、狀は鴛鴦の如く、而も大なる聲ありて甚だ清雅なり、此の方には無き所なるが故に會意して言ふのみ。世諦の漫茶羅なりと雖も、亦慧解ある持真言の人を須ちて乃ち能く建立すべし、故にまさに慧解を以て悲生漫茶羅を作るべしと云ふ。復次に水は是れ流れて住らざる義なり。其心滯らずして、常に能く勝進する。之を名けて水とし、福河斷へざる、之

を名けて水とす。先より能く心を諦理に安んずる人は、自ら多く得可からざるを以て、但だ本淨より流出せしめ已りて、正しく是の中に趣くは、即ち無礙の慧を運びて、爲に悲生漫茶羅を建立す可きなり。妙音の衆鳥莊嚴とは、是れ能く善法を宣揚する義なり。亦是れ常に利他を念するが故に、衆生の歸する所にして、咸く歡樂を得れば其の徳を歎するを以て、大名稱あるなり。

偈に云はく、「正覺と緣導師と、聖者聲聞衆と、曾て此の地分に遊びたまひき、佛常に稱譽したまふ所なり」とは、若し山泉の福地は衆聖の曾て遊履したまひし所なり、自ら上の條に屬す。今此の中の意は言はく、上の如くの勝處に非すと雖も、而も是れ諸佛緣覺及び聲聞の弟子等の得道涅槃の處、或は久しく其の中に住するは又其の次なり、西方の如きは八塔及び三乘の聖衆の遺跡甚だ多し、皆是れ大威徳の諸天の常に護持し瞻禮する所なり。猶は般若經所在の處に諸の小鬼の輩、敢て停留せざるが如し、故に法驗成就し易し。佛の稱譽したまふ所とは謂はく、仙人の住する山をば、世尊、中に於て道を得可きこと易しと記説したまふ如き類是れなり。復次に若し人已に菩提心を發せば、即ち是れ諸佛の生地なり亦是れ得道轉法輪般涅槃の處なり、亦是れ久し

く其の中に住して、四威儀を以て廣く衆生を利する處なり。未だ秘藏を聞かずと雖も、ただ三乗の共行の處を得るをも亦吉祥と名く。謂はく、性空にして無相無作なり、我人衆生壽者あることなしと觀察する、此れは是れ二乗の成道入涅槃の處なり。亦是れ種種の本生經に、菩薩の身命を弃捨して波羅蜜を學ぶ處なり。皆中に就きて漫茶羅を作る可し。復次に自ら已に涅槃を得たりと想ひて滅度の想を生ずるは、聲聞、辟支佛の遊ぶ所の地分なり。若し一向に菩提を求むる人を得ずば、即ち此の中を平治して悲生漫茶羅を書作すべし。

(二) 毗訶羅 Vihāra

(一) 限量の小房
戒律には僧房の限
量な定めて、恣に
大なる屋を造りて
住むことを禁ぜり
但し施主より寄附
せらるは此の限
にあらす。

偈に「及び餘の諸の方所の僧坊と阿練若」と云ふは、聖迹を除きて外は、ただ隨方の國土の諸の梵行者の所居なり。僧坊とは梵音には(一)毗訶羅と云ふ、譯して住處とす、即ち是れ福を長ずる住處なり。白衣福を長せんが爲の故に、諸の比丘のために房を造りて、風寒暑濕種種の不饒益の事を庇禦して、持戒禪慧の者に安心して道を行ふことを得しめ、檀越をして施福を受用して、日夜に常に流れて斷絶することなからしむ、故に住處と名く。阿練若をば名けて意樂處とす、謂はく、空寂にして行者の樂ふ所の處、或は獨一にして侶なく、或は二三人にして寺の外に於て(二)限量の小房を造り、或

(一) 共の二乗の
若一般若に大乗の
若一般若に二乗の
若一般若に三乗の
若一般若に四乗の
若一般若に五乗の
若一般若に六乗の
若一般若に七乗の
若一般若に八乗の
若一般若に九乗の
若一般若に十乗の
若一般若に十一乗の
若一般若に十二乗の
若一般若に十三乗の
若一般若に十四乗の
若一般若に十五乗の
若一般若に十六乗の
若一般若に十七乗の
若一般若に十八乗の
若一般若に十九乗の
若一般若に二十乗の

は施主ために造る、或はただ樹下空地に居る皆是れなり。復次に若し菩提心を離れて一切の善法を修するは、謂はゆる廣く檀施を行ひ、無量の律義を受け、種種の禪定を修し、十二分教を受持し、義理を思惟し、慈悲精進にして衆生を化度すれども、衆行に將導なきを以ての故に、皆無聖迹の僧坊と名く。亦然れども凡聖同しく居る、是れ福を生ずる處にして亦其の次なり。(二)共の二乗の般若を除きて、自餘の聲聞緣覺の一切の法門は、大悲を遠離して自ら出要を求むるを以て、皆無聖迹の阿蘭若處と名く。亦即ち其の中に就きて平地を擇治して、漫茶羅を書作す可し。

偈に「華房と高樓閣と勝妙の諸池と苑」と云ふは、若し如上の福地を得ずとも便ち停る可からず、俗間の勝處を擇び取るべし。若し端嚴清淨ならば便ち作法す可し。房は是れ上古よりこのかた衆生慚愧を以ての故に、褻慢を彰著せしめんことを欲せず、亦以て其の身を庇衛して自ら護り他を護る可し。樓閣は是れ西方の重屋の上の高顯平露の處なり。池は謂はく、清淨の池沼なり。多く水生の諸花ありて、人と非人と咸く愛樂する所なり。苑は謂はく園林なり。名香奕草芳木多く、鬱盛蕭然幽靜にして喧煩を屏く可き、皆又其の亞なり、復次に若し行人を見るに、未だ餘の方便道の中に入らずと雖

も、然れども其の體性慚愧を具足して、常に能く自ら護り亦能く他を護り、或は其の心明白にして知り易く、諸の障礙少なからん。乃至罪を犯しては亦能く發露し、人に向ひて自の清淨を求めて隱秘する所なくば、亦傳授す可し。又池は是れ渴水無厭の義なり、謂はく、此の人未だ深法の味を得ずと雖も、而も能く心を虚くして聽受し、渴仰して黙ふことなし。園は是れ多人遊觀する處なり、謂はく、此の人の性悲愍多く好みて慈濟を行ふ。咸く歸仰する所は其の蔭庇に頼る、此れ皆大乘の種性なり、亦匠成す可し。

國譯大毘盧遮那成佛經疏卷第三終

國譯大毗盧遮那成佛經疏卷第四

沙門一行阿闍梨記

入漫荼羅具緣真言品第二の餘

偈に「制底と火神の祠と、牛欄と河潭の中と、諸天の廟と空室と、仙人の得道の處」と云ふは、或は聖迹及び僧の所居に非すと雖も、ただ地分に隨ひて(一)制底キヤイを起てたる處あらば、其の四傍に於て便ち漫荼羅を造作す可し。火神とは是れ淨行梵志の(二)火祠の所なり、尤も清潔とす、故に壇を立つ可し。牛欄とは西方の聚落の牧牛は、共に一處にあり、村を去ること或は十里五里なり。既に多時を積みて牛の屎尿の地に逼かり積れるをば、梵俗に亦以て淨とす。然りと雖も、牛の移り去りたるを須ゆ、若し牧牛現にあらば亦作すにあたらす。河灘とは正翻には當に攢流處と云ふべし、雨水或は多水ありて、此の處に於て會合するを謂ふ、此の側及び中間は頻りに泛漲蕩濺を経て諸の穢惡なし。天廟とは是れ世天に宗事する者の齋祈の室なり、亦多く清閑なり、然れども諸の外道の邪見不信なるあらば、此の處に於て作すべからず。空室とは世人の

(一)制底 佛の堂
塔なり。
(二)火祠 婆羅門
の護摩なり。

造る所の居室を、後時に之を捨てて去れるを謂ふ、諸の慣難なきを以ての故に作法するに堪へたり。仙人得道處とは是れ世間に五通を求むる者の、久しく棲止して成就を得し所の處なり。必ず餘の好處なくば、亦中に於て漫荼羅を造る可し。復次に制底とは是れ建立高勝の義なり、謂はく、此の人常に能く白法を建立して、志屈撓せず、未だ現に聖教を修せずと雖も、當に知るべし先世に福を樹へて内に善根ありと、故に名けて塔とす。又火は能く荒穢を焚滅す、謂はく、此の人の身口意未だ清昇出離すること能はずと雖も、然も内に慧性ありて好みて淨業を行ひ、過あれば能く改む、故に火祠と名く。牛欄ウシノカは是れ行ウチの義、欄は是れ閑防の義なり。謂はく、此の人、質性調柔にして馴御す可きこと易し、兼ねて五情の嗜欲に於て、能く自ら制止して放逸を至さず、故に牛欄と名く。攢流とは三乗の中に於て其の心猶豫して、定めて何れの道に趣くべきかを知らざるを謂ふ、阿闍梨亦まさに法を以て勸諭して言ふべし。此の諸の方便は皆是れ佛教なり、但し汝が最も欣樂する處に隨ひて、一向に學ぶべし、到る所は會同す疑慮すべからずと。若し是れ邪正難信ならば、當に其の迷津を斷ち、其の正路を示すべし。能く兼ね信するを以ての故に、即ち是れ先世に曾て法水其の心を蕩

自在等
大自在
在天、毗紐天、日月、那羅延天、天等なり。

滌することを経たるなり、亦河潭と名く。天祠とは三乗を求めずして、天の樂を志願するを謂ふ。授受して三惡を離れ、正見の天の中に生せしめんと欲するが爲の故に、須らく攝受すべし、是れを天祠と名く。空室とは此の人塵俗にありと雖も、而も性虛寂を好みて、世の囂煩を厭ふを謂ふ。是れ善根將に熟せんとする相なり、女人の胎漸く成就すれば、則ち欲の意自ら輕きが如し、故に教化するに堪へたり。若しは無色の天道を志求するをも、亦空室と名く。仙人得道處とはただ心を發して五通持明仙の道を求め、或は長壽にして世間の種種の悉地を成就せんと願ふを謂ふ、亦彼の情機に隨ひて之を誘接す可し。復次に諸の異學の深く圍陀火祠の法を樂ひ、梵世に生れんと願ふ者ありて、佛の秘藏の中にも亦火天の眞言行法の旨趣甚深なるものありと聞くが故に、即ち此の門より正法に入る。また（二）自在（三）毗紐（四）那羅延（五）日月尊等の種種の世天に奉事する者ありて、若し佛の秘藏の中にも亦彼れ等の諸天の眞言行法、乃至毗盧遮那大我の身ありと聞けば、即ち信受して正法に入る。或は三界の諸天に生れんと志願する者ありて、佛の秘藏の中に具に諸の天乘の眞言行法ありて、能く無量世に於て彼の天の中に生じ、また退墮せずして終に第一義天を成せしむと聞けば、此れに由りて深

心に願樂して正法に入ることを得る者あり。或は世間の五通仙の法を宗習する者ありて、佛の秘藏の中に具に迦葉瞿曇大仙等の種種の眞言、能く不思議神道を獲得し、乃至毗盧遮那の如く住壽長遠ならしむることありと聞けば、彼れ便ち踴躍し志求して正法に入ることを得。是の如く等の種種の門を以ての故に、佛、火神と諸處とに皆漫茶羅を造る可しと説きたまふ。

偈に云はく、「如上の所説と或は意樂する所の處とに、弟子を利益するが故に、當に漫茶羅を畫くべし」とは、乃至諸の勝地を求むるに、皆得ること能はずとも、此の密教をば遂に所傳なからしむ可からず。ただ阿闍梨の心の好樂する所に隨ひて、利益ある地なりと謂はば、即ち漫茶羅を造る可し。若し深釋せば、ただ彼れ少分の善根ありて、正しく希願すと觀ば、皆其の心地を擇びて、治して平正ならしめて、爲に大悲漫茶羅を造る可し。又此の衆生、乃し(一)遮文茶(二)茶喜爾を好樂する者に至るまで、世間の小術も亦此の門に於て之を攝受すべし、能く此の本尊を見ることを得る時、自然に無量の聖衆を見ることを得。問ひて曰はく、上に弟子を擇ぶ中には、要す衆徳を具へて法器となるに堪へたるをば、方に乃ち教授すべしと明せり。而も今擇地の義の中には、

(一) 遮文茶 夜叉の族にて能く呪術を行ふ者なり
(二) 茶喜爾 人中にも此の法を行ふ者あり云ふ
(三) 茶吉爾 狐魅の類なり能く小通を現す

乃至一毫の微善も傳ふることを得ざることなしとは何ぞや。答へて曰はく、是の中に二種の弟子あり。若し傳法の弟子の阿闍梨位を紹ぐに堪ふる者を求むるときは、苟くも其の人に非ざれば、道虚しく行はず。若し結縁の弟子ならば、則ち舉手低頭の善も攝せざる所なし。又深行の阿闍梨は明かに根縁を見るを以ての故に、或は人ありて過去の道機已に熟して法器となるに堪ふれども、而も現世の中に於て泥滓に没在して、わづかに毫髮の善根を餘すあり。故に阿闍梨は即ち此の中の少分の平地を擇びて、秘藏漫茶羅を開出す、何ぞ必ずしも安心諦理の人を待ちて、はじめて佛事を作さんや。故に前の説と相違せざるなり。

經に云はく、「秘密主、彼れ地を簡擇しては、礫石・碎瓦・破器・鬻體・毛髮・糠糶・灰炭・刺骨・朽木等、及び虫蟻・蝮蛇・毒螫の類を除去せよ」とは、次に治地の支分を明す。謂はく前に擇ぶ所の地の中に於て、壇を置くべき處を簡び取りて、深さ一肘以來を掘りて、其の土の中に於て精しく擇ぶに、諸の用ふるにたへざる物及び虫等あらば、皆まさに之を去つべし。若し此れあらば能く衆難を生じて、法に於て障あり。其の石及び沙礫少くして擇ぶ可くば、當に之を運び去つべし。若し沙石衆多にして此處に積聚し、

一肘 一尺六寸

彼處にもまたありて、簡治して淨からしむ可からずば、當に捨棄して更に餘處を求むべし。然れども大石の平正なるは聖教の説あり、上に於て漫茶羅を立つ可し、ただ土中に雜れるものは除去すべきのみ。西方の俗法は多く瓦器の中に於て食す、食し竟れば輒ち之を弃つ、穢れたりと謂ひて復受用せざるなり。是の如くの比及び餘の種種の破壊の器物、並に鬻體・雜骨・種種の爪髮・皮毛・糠糟・穢草・及び諸の灰炭・刺楸・朽木、要を以て之を言はば、是の如く等の種種の用ふるにたへざる物、本の淨き土に非ざるをば皆之を擇び出すべし。若し多くして擇ぶ可からずば、亦捨棄して更に餘處に求むべし、故に等と云ふなり。虫蟻とは吃喫強と云ふ、此の語は通合す、皆是れ微細の小虫なり、皆擇び去つべし。螻蛄とは是れ其の大なるものなり、更に蚯蚓等あり、義を以て准知す可し。毒虫とは謂はく、蛇・蝎・蜈蚣・蜘蛛の類なり、皆方便を作して駆り遣りて去らしむべし。若し多くして除く可からずば、即ち是れ妨難ある處なり、之を弃つ可し。

經に「離如是諸過」と云ふは、此の例衆多なり、意を得ん者、自ら當に事に臨みて甄別すべし。謂はく、地或は傾側し、或は高下不平なり、或は色味聖教に應せず、其の色

一三、亂脫一傳

(二) 阿毗遮魯迦
梵語なり、降伏法
の義。

の中に黄白を以て勝とす、若し純黒ならば則ち取るに堪へず。之を嘗むるに味恬く及び淡くば則ち善し、辛く鹹く溢き等は則ち用ふるに任へず。或は之を掘りて更に坑の内に填てんに、土滿つることを得ずば即ち堪へず、若し更に填てんに盈ちて出でば即ち好し。又一の處所に就きて南方をば則ち下地とす、ただ阿毗遮魯迦を作す可きのみ。復次に阿闍梨既に弟子の心地、中に於て大悲漫茶羅を建立す可きに堪へたりと知らば、即ち當に深定に住して、審諦に分別して之を觀すべし。慧を以て甄擇して、堪任する所なき雜穢の諸垢を去て、然る後に治して堅實ならしめて、爲に莊嚴を作すべし、然らずば則ち宿業の餘氣能く障礙を生せん、礫石とは正法を信せず、我分を堅執し、因果を撥無する如く等の見なり。彫雋し相浸潤す可きこと難きを以ての故に、終に善苗を生ずること能はず、功を加へて陶冶すれども亦所出なし、細執甚だ多く、互に相受けず、故に沙礫に譬ふるなり。碎瓦破器とは五逆を造り、四重禁を犯し、方等經を誘る如き等なり。心器敗壞するを以ての故に堪任する所なし、設ひ法味を加ふれども亦停住せず、諸の善衆の爲に弃捐せらる。先づ當に慧方便の手を以て、爲に是の如くの諸障を擇び去つべし。鬻體とは菩提心を破壊するが如き障なり。昔時曾て人

の法を具へたりしときは衆の支分の中に於て最も上首たりしかども、命根の絶へしに由るが故に、百體墜敗して能く爲す所なし。此の惡習に縁りて、設令重ねて菩提心を發すとも還つてまた障を成し、自ら喜みて退屈せしむるが故に、尤も宜しく洗除して餘氣を盡きしむべし。毛髪とは謂はく、六十心等の善種の入心と共體にして生ず、及び五覺察せば則ち宜しく除剪すべし。未だ出世間の心を得ざる以來は、雜起紛亂して條緒す可きこと難し、故に毛髪と名く。糖糟とは無明妄想の如し。戲論に取着するを以ての故に、ただ名相の皮を得て實相の米を失ふ、故に以て譬とす。灰炭とは小法を樂ひ二乗の心を起すを謂ふ。若し善根此れが爲に焚かるるときは、則ち灰斷に歸して大悲の條葉華菓を生せず、故に以て譬とす。刺骨とはむかし衆生に於て種種の不饒益の行を作し、種種の雜碎の律儀を犯せるを謂ふ。此れは是れ過去の生死の宿對の殘障なり、故に名けて骨とす。朽木とは不欲懈怠の類を謂ふ。蠶を樹て匠成するに堪へず。又梵文に兼ねて株杭の義あり。久遠よりこのかた諸の煩惱に於て偏習する所ありて、餘拮深固にして拔除す可きこと難し。是の如くの諸の過去の業含藏して、心地の中に在るを以ての故に、一心に道を行ふ時、魔事興り易し。故に須らく豫め簡擇

を加ふべし、若し多くして擇ぶ可からずば、則ち此の地を弃捨して別に餘機に就くべし。蟲蟻・蝗蝻・毒螫の類とは種種の現行煩惱に喩ふ。蠅蟻をば癩に喩へ、蝨をば貪に喩へ、毒虫をば瞋に喩ふ。此の類甚だ多し、種種の隨煩惱に譬ふ、諸の微小の物をば無量の惡覺見に譬ふ。此の輩を觀るに皆如來の性あり、尤も宜しく將護して其の命根を絶へしむること勿れ、ただ方便を以て駈遣して、行道を妨ぐるることなく、漫茶羅を穢汗せざらしめんのみ。若し極めて道場を淨めしめんと欲せば、百六十種の上中下の微垢皆擇びて餘なからしむべし、乃至灌頂地の中には、みな淨土に非ざる者をば悉く宜しく之を簡び去つべし、はじめて究竟淨と名くるなり。

經に云はく、「良日晨に遇ひて日を定め、時分宿直諸執みな悉く相應し、食前の時に於て吉祥の相に値ふ」とは、擇地の事に因みて、便ち擇時の支分を明すなり。凡を爲す所の法事は、皆須らく時義と契合すべし。今將に此の地を擇治せんとなす。故に吉日に於て地神を警發す、餘の法事は例して知る可きのみ。良日晨とは謂はく、作法せんには當に自分の月を用ふべし、中に就きて一日・三日・五日・七日・十三日・を皆吉祥とす、漫茶羅を作すに堪へたり。又月の八日・十四日・十五日・は最勝なり、此の日に至りては常

に念誦するにも功を加ふべし。日を定むとは西方の曆法にて小の月を通計せば、何れの日にか當るべき。若し小の月白分の内にあらば、其の月の十五日は即ち黒分に屬す、用ふるに堪へず。又曆法に日月の平行の度を通計せば平朔を作して皆一小一大なるべし。日月平行の中に於て又更に遲速あるによりて、或時は平行を過ぎ、或時は平行に及ばず、所以に朔を定むること或は進退一日、望を定むること或は十四日にあり、或は十六日にあり。大抵月の望正して圓滿の時を名けて自分の十五日とす、月の正半にして弦の如くなる時を亦八日とす。此れを以て之を准約して、日を定むることを得るなり。時分とは西方の曆法は晝夜に各々三十の時あり、一一の時に別に名號あり。晝日の如きは即ち影の長短を量りて之を計る。某の時に事を作せば則ち吉なり、某の時は則ち凶なり、某の時は中平なりと、各各に皆像類あり。宿直と言ふは謂はく二十七宿なり。周天を分ちて十二房と作す、猶ほ此の間の十二次の如し、九足あり、周天に凡そ一百八足なり、宿毎に均しく四足を得たり、即ち是れ月の一日を行く程なり、二十七日を経て、即ち月一周天を行くなり。曆に依りて之を算ふれば、月の所在の宿は即ち是れ此の宿直の日なり。宿に上中下の性あり、剛柔躁靜同じからず、所作の法事

(3) 羅喉 Rāhu
計都 Ketu

も亦宜しく相順すべし。諸執とは執に九種あり、即ち是れ日月火水木金土の七曜と、及び(3)羅喉と(3)計都とを合して九執とす。羅喉は是れ交會の蝕神なり。計都を正翻には旗とす、旗星は謂はく彗星なり。此の二執を除きて外に、其餘の七曜は相次ぎて日に直る、其の性類にも亦善惡あり、梵曆の中に説けるが如し。食前時とは晝夜に各々三時あり、食前には息災を作す可し、暮間には増益を作す可し、夜は降伏の事を作す可し。入漫茶羅灌頂は息災と相應す、故に食前と云ふ。遇善境界とは謂はく、作法の時に或は地上、或は空中に色聲等の種種の異相あり。地上とは謂はく、或は童女の五種の牛味の瓶、或は香水の瓶を執持せるを見、或は所持物の輪印等と同類なるを見、或は是れ世の中に尊ぶ所の上物及び器に、白粳米等を盛りて潔淨盈滿せるを見、或は被る所の服端嚴鮮麗なるを見、或は種種の吉祥相應の音を説くに遇ふ、皆是れ成就の相なり。空中とは謂はく、忽ちに慶雲の瑞氣氤氳の五色なるを視、或は彩虹の鮮明間錯して非時に見ることあり、或は火色飛動して護摩成就の形の如きことを作し、或は日の傍に於て五彩の見るることあり、或は人の形貌の寂に住するが如くなるを作し、或は空中に於て好美妙の音聲あり、謂はく白鶴・孔雀・鴛鴦・鴻鴈の類、清徹和雅にして

(二) 深信白心
心厚く善淨なる心
なり。

三三三 亂脱

人の聞かんと樂ふ所なり。是の如く等は亦皆成就の相なり。世諦に順ふことを須ゆる所以は、勝義の漫荼羅は微妙寂滅なるを以て、(二) 深信白心の人すら尙ほ受信し難し、況や疑慮を懐かんとや。所度の人曾て韋陀の祠典・伎藝・明處を習ひしを以て、若し漫荼羅を造れる時分舛謬するを見て、慮りて不吉祥を致さんことを恐る。便ち疑恠を生じて言はく、我れ聞く惣持の智慧の者は、達せざる所なしと、而も今之を觀るに尙ほ好星善時を擇び得ること能はず、況や餘の深事をやと。此れに由りて師を疑ひ法を疑ふが故に、堅信の力を失ひて反つて重罪を招く、故に須らく彼の情機に順ふべし。三復次に是の如くの執曜は即ち是れ漫荼羅の中の一種の善知識門なり。彼の諸の本尊は即ち能く世間の事業に順ひて、加持方便を作す、阿闍梨善く吉祥の時を擇ぶを以ての故に、彼の眞言の本誓と法爾に相關すれば、爲に加持を作して諸障を離ることを得るなり。

二復次に種種の世諦門は皆是れ法界の標幟なり、謂はゆる良日晨とは、意は菩提心嘉會の晨にあり。深行の阿闍梨、瑜伽の中に住して、度せんと欲する所の者の本初に善根を種るたる時を觀察すべし。久しとやせん、遠しとやせん、因縁誰にか屬する、何

の事に従ひてか起る、行者初發心の時の如きは、或は見佛說法に因り、或は神變を觀、或は種種の悲苦す可き事を見、或は菩薩聲聞緣覺に於て道心を發し、或は華香等を以て如上の福田を供養して、心に歡喜を得て、便ち願を發して佛果を希求す。彼の先因と現縁と相感發するに由るが故に、種種の機悟不同なり。或は是の如くの時の中には、菩提心に寂靜の力あり、或は是の如くの時には増進の力あり、或は是の如くの時には威猛の力あり、種種の悉檀の方便に順ひて之を建立すれば、則ち功唐損ならず、障礙を生ぜず。

定日とは日をば本尊の身に喩へ、月をば修習瑜伽の行に喩ふ。行者定心の月、或時は増明に、或時は微昧なり、或は發行太だ速かに、或は發行太だ遅し、或は中道を過ぎ、或は中道に及ばざるを以て、機悟の時をして亦盈縮あらしむることを致す。若し常理を修照せんには某の緣に至る可く、某の時の中に宜しく建立すべし。然るを緣境遷移することありて、或は未だ時處に到らずして熟し、或は此の時處を過ぎて乃ち熟す。是の如くの變通皆善く知るべし、故に定日と云ふ。

時分とは行者の一一の地の中に就きて、自ら十心あり、此の一一の心に各々因根果

あり、合して三十心とす。此の三十の牟呼嚙多の中に於て、亦審細に甄擇すべし、何の時に煩惱を折伏するに堪へたる、何の時に功德を増益す可き、何の時に中道に宿直とは是れ行人の瑜伽の月の渉る所の縁境なり。一切の縁境の中に於て、皆心性を見ること、列宿の小大像類また差別せりと雖も、圓明ならざることなきが如し。月の二十七宿を行り経るが如きは、経る所の宿、好悪異なるを以ての故に、世間の候月の占をして亦随ひて異ならしむ。箕星は風を好む、月行りて箕に入れば即ち風起り、畢星は雨を好む、月行りて畢に入れば則ち雨降るが如し。菩提の行も亦爾り、縁に遇ひ境に對して勢力異なるを以て、折伏と攝受と及び寂行との所施の方便をして隨ひて轉せしむ。若し阿闍梨能く深く根縁を觀察し、是の事を曉知するをば善く宿直を觀ると名く。

九執とは梵音には(九)乾嚙何と云ふ、是れ執持の義なり。阿闍梨彼れの心力の手に何れの事を持つに堪へたるかを觀て、傳ふる所の密印をば唐捐なるに至らざらしむべし。諸佛の金剛慧印の如きは、ただ金剛心の菩薩のみ乃ち能く之を執る。若し下地の人に

(九) 乾嚙何 Gra-

授與せば、則ち執曜不相應と名く。九執の中に歸きて、日をば本淨の菩提心に喩ふ、即ち是れ毗盧遮那の自體なり、月をば菩提の行に喩ふ、白月の十五日に衆行圓滿するをば成菩提に喩ふ、黒月の十五日に衆行皆盡くるをば般涅槃に喩ふ、中間に時とともに昇降するをば方便の力に喩ふ。當さに知るべし、已に百字明門を攝すと。土曜は中胎藏を持し、水は右方の蓮華の眷屬を持し、金は左方の金剛の眷屬を持し、木は上方の如來の果徳を持し、火は下方の大力の諸明を持す。復次に是の如く五執は、即ち五色の蘇多羅を持す、土を信とし、木を進とし、金を念とし、水を定とし、火を慧とす。其餘の二執、羅睺は覆障をなすことを主り、彗星は不祥を見すことを主る。故に直日にあらず。初日の分は淨心顯現するが如く、中日の分は、衆行を發起するが如く、後日の分は萬德已に圓かにして、功用漸く息むが如く、初夜の分は自證の地に於て、大涅槃に住するが如く、後夜の分は本誓願を念じて加、持力を起すが如し。周りて則ちまた始む、巡轉窮りなし。日の體は是れ一なれども、四洲の時分各々異なり。今此の漫荼羅の意は、菩提心の日を開發せんと欲するが故に、食前の時を取るなり。

■ 亂脫

（二）五眼、肉眼、
天眼、慧眼、法眼、
佛眼なり。

遇善境界とは是の心は無相無境界なり、是れ有爲無爲に非ず、佛の（二）五眼を以て諦観するに、亦其の相貌を見ること能はず。然れども種種の善根發る相ありて、了知することを得可し。若し是れ見諦の阿闍梨ならば、自ら當に現前に通達すべし、若し未見諦ならば當に三昧の中に於て、其の境界を察すべし。或は彼れ六塵を修行する時、六蔽留難すること能はざるを見、或は衆聖のために稱歎せられ、乃至菩提の記を授けられ、或は前の如くの種種の印相、三昧の中に於て現れ、炳著奇特にして常に異なることあらん、因果を以て之に類して意を以て得可し、乃至普門相攝の處、皆亦知る可し。

經に云はく、「先づ一切如來のために禮を作し、是の如くの偈を以て地神を警發すべし」とは、阿闍梨まさに地神を警發せんと欲せば、先づ運心して思惟すべし。毗盧遮那の無盡莊嚴の身、法界に周遍し、十方三世の一切如來も亦また是の如く、一一の無盡莊嚴の身、法界に周遍せり、十住地より乃至初地までの諸菩薩も、分證莊嚴の身、無量無邊にして法界に満ちて、間隙無きこと胡麻の中の油の如しと。當に觀すべし、此の身遍く一切衆聖の前に至りて、清淨の三業を以て、誠を至して禮を作すと。此の

因縁に由りて無量の福を獲、便ち當に無倒の心を以て、彼の弟子に施して、障礙なからしめ、速かに無上菩提を成さしめんと願ふべし。次に當に偈を説きて、地神を警發すべし。釋迦牟尼佛の如きは、初め道場に坐せし時、魔王に謂ひて言はく、汝先世に一の無盡の施を作ししに由るが故に、今自在天主の身を得たり、然るに我は無量劫よりこのかた、是の如くの大施を修すること、あけて數ふ可からず、乃至身肉手足も亦憐む所なし、云何が我と其の優劣を較べんやと。魔の言はく、我が作しし所の福は、汝已に證を爲せり、汝の福業をば誰か當さに證明すべき、若し證なくば、即ち負處に墮ちんと。菩薩その時に右手を申べて地を指して、眞實の言を説きたまはく、我れもと此の地の上に於て、菩薩の道を行ひて、種種に難行苦行せしことは、地神證知せりと。當さに知るべし、此の指は即ち是れ身密の印なりと。その時に無量の地神、地より踊出し、其の半身を現して證明を作し、魔王の軍衆是れに由りて退散せり。今阿闍梨も、弟子に久しからずして如來の位を紹がしめんと欲するが故に、此の印を以て地神を警發す。時に彼の地神大歡喜を生じて是の念を作す、今此の佛子乃ち能く大事の因縁を建立するを以て、我等を將護して、損惱なからしめんがための故に、見に警覺

したまふ、我方便を以て守護して、亦諸の魔業を離れしむべしと。此の衆縁の力を以ての故に、此の地を金剛に同じからしむ。所説の阿利沙の偈を、自然成就の眞言と名く。若し作法せん時は、當さに梵本を誦すべし、今具さに之を録す。七遍誦じて右手の五輪を以て地を按す。

但文汝ナツ天テン親シン護ゴ者シャと云ふ。

薩摩サマ一切イツ勃ボク駄ダ囊ナシ難ナン度ド師シ義ギ譯ヤクして一切諸佛導師と云ふ。

浙セツ喇ラ耶ヤ行コウ也ヤ修シュ行コウ殊シュ勝ショウ行コウと云ふ。

部ブ弭ミ淨ジヤウ地ヂ播ハク囉ラ蜜ミ多タ素ソ者シャ等トウ譯ヤクして淨地波羅蜜と云ふ。

摩マ囉ラ天テン塞サイ年ネン野ヤ他タ如ニ如ニ毫コウ鈇キヤウ難ナン譯ヤクして如破魔軍衆と云ふ。

赦シヤク吃キヤク也ヤ釋シヤク迦カ係ケイ娜ナ以イ那ナ救クウ世セ譯ヤクして釋師子救世と云ふ。

但タ他タ痕カン我ガ魔マ囉ラ若ニ延エン降コウ吃キヤク嚙キヤク墮ト伏ボク譯ヤクして我亦降伏魔と云ふ。

漫マン茶チャ藍ラン餘ユ履リ法ホウ我ガ我ガ譯ヤクして我畫漫茶羅と云ふ。

偈の意は先づ地神に告げて云はく、汝天女、親り此の大地を守護する者なり、已にむかし一切の諸佛の導師に供養し親近して、殊勝の行を修し、諸地を淨治して、諸度を

(一) 實相世尊 本法身云ふ。
(二) 般若波羅蜜 左右兩手に定慧に配す、但し今は強ち右手に限らざるか。
(三) 五力 五指を信達念定慧の五力に配す。

淨滿す。及び餘の種種の功德は摩訶般若の中に法に歷て廣く明すが如し。是を以て等と云ふ。今偈を譯すること五字を以て句とす、具さに存す可からず、然も地波羅蜜の中に亦已に此の衆徳を含めり。次の偈は警發する所以の意を陳べて誠實の言を説く。世尊むかし菩提漫茶羅に在して、天魔の軍衆を降伏したまひし時に、汝大會の中に現れて證明を作せり、是れに由りて世尊を號して釋迦師子とし、能く獨歩無畏にして世間を救護したまふが如く、我も今亦佛の所行に隨ひて、如來の事を紹がんと欲す、是の故に此の漫茶羅を書くなり。我れ未だ如來に一切同じきことを得ずと雖も、然れども毗盧遮那の三密に加持せらるるを以ての故に、亦能く佛身を現作して、普く一切の漫茶羅の大會を集む、是の故に汝今亦まさに現に證明を作して、諸の魔軍衆をして、沮壞すること能はざらしむべし。

復次に地神は是れ女天なり、女は是れ三摩地の義なり、即ち是れ大日世尊一切衆生を護持したまふ三昧なり。(一) 實相世尊昔菩提漫茶羅に在して、無明住地の魔王及び塵、沙の大衆を降伏したまふ時の如き、(二) 般若波羅蜜の手を以て、屢々(三) 五力を舒べて、一切衆生の心地を按す時に、汝の三昧現れて證明を作せり、是の故に無量

の應度の衆生の四種の魔軍、此れに由りて退散せり、是の故に號して寂業師子とす。能く自在神通を以て、世間を救ひたまふ者なり、我も今亦弟子の心地を平治して、大悲漫荼羅を畫作せんと欲す。汝亦當さに爲に證明を作して、四魔の軍衆を伏せしむべし。

復次に字門を以て此の阿利沙アリシヤを釋するに、無量の義を具す。然も其の宗極をもとむるに、正しく他「Ha」字の中にあり。梵音の「ハ」但多は是れ如の義なり、多「Ha」字の長引の中に即ち阿「ハ」の聲を帶ぶ。一切の法は本より不生なるを以ての故に、實相に如かひて増せず減せず。即ち此の義を以て一切の地神を警發す。彼れ偈を誦せん時は、長跪して兩膝を地に着け、智慧の手に由りて、其の五輪を舒べて平掌にして地を按し、方に此の阿利沙の偈を誦すること七度し、之を印して加持すること七遍すべし。此れ即ち是れ眞言と印と相應すと名く。阿闍梨言はく、此の法を作さんと欲する時には、先づ三昧耶と法界と金剛自性とを以て自身を加持せよ、皆供養法の中に説く所の如し。囉Ra字門を用ひて自ら心地及び此の道場の地を淨め已りて、瑜伽の中に於て先づ半月の風輪を起て、訶Ha字を以て之を加持し、次に水輪を起て縛Pa字を以て之を加

但多 Ha

内外地 内地
心地 外地
は壇地なり
一三三 亂脱

持し、次に金剛地輪を起て阿「ハ」字を以て之を加持す。一縁諦觀して相應し、明了にして、善く心及び氣息を調べよ、一氣に阿「ハ」字門を誦じ、相續して間まあらず、力極まらば息みてまた復また之を誦せよ。或は一息、或は三息、乃至覺觸する所ところあらしめよ。是の如くの一縁の方便を以ての故に、即ち三昧に入りて、秘密莊嚴の佛菩薩の大會を速見し、或は自ら内外地の中の諸の過咎を見る。

經に「塗香華等を以て供養す」と云ふは、ただ警發するのみに非ず、又當に種種の香華燈明等を以て、十方の諸佛及び地神を供養すべし。然も此の中の地に三種あり、謂はく囉Ra字門を以て、自の心地と弟子の心地と及び道場の地とを淨除す、皆阿「ハ」字門を以て之を持して金剛と成らしむ。若し秘密の釋の中に就きて供養の義を明すことも、亦復是の如し。若し阿闍梨淨菩提心の種種の功德を以て、一切智智の印に廻向するは、即ち是れ自の法界の中なかの一切諸佛及び持地者を供養するなり。此の功德を以て弟子に廻施して、成佛の因縁を資助するは、即ち是れ弟子の心法界の中なかの一切諸佛及び持地者を供養するなり。若し用ひて此の金剛道場を莊嚴するは、即ち是れ法を以て十方世界の中なかの一切諸佛を供養するなり。供養し已りなばまた一切如來を

持地者 地神
なり

歸命すべきこと、例解して知る可し。
經に「然る後に地を治し、其の次第の如く當に衆徳を具ふべし」と云ふは、謂はく凡そ漫荼羅を造らんと欲せば、先づ須く是の如くの法を作して、方に乃ち地を掘りて擇治すべし。亦三種の地の義を兼ね、淺秘の兩釋あり、乃至經に説く所の次第の如く諸の支分を具す、故に當具衆徳と云ふ。

三時に金剛手、如來の深秘の旨を發明して、未來の弟子の疑惑の心を斷除せんと欲するが爲の故に、「頭面を以て世尊の足を禮して、偈を説きて言はく、佛法は諸相を離れたり、乃至法然の道に順はず」とは、謂はく我れ親り佛に従ひて聞けり、諸法の實相は一切の諸相を遠離せり、法佛の所住は法位に住せり、若しは如來出世にもあれ、若しは不出世にもあれ、常に自ら寂滅にして、思ひ議る可からず、思量分別の能く及ぶ所に非ず、亦因量譬喩の能く表示する所にも非ず、若し法相常爾ならば、諸佛の能く造作する所に非ず、何に況や有爲の諸相能く集成せんやと。何故ぞ天中の天大精進者、今乃ち此の擇地造壇等の有爲の事相及び眞言次第の行法を説き、修學者をして種種の香華供物を辨じ、口には覺觀の言説に隨ひ、身には手印威儀を學び、心には本

諸法實相六
大法身を指して諸
法實相と云ふ。
法位は諸法の
依住する所なるが
故に法位と云ふ。
諸佛はみな淨天
に故に天中天と
は佛中の佛と云ふ
を指す。大日如來
動勇と云ふに同じ
大日如來を指す。

一 大亂脫
二 大亂脫

尊の色貌形位を緣せしめ玉ふや。既に是れ有爲有相なり豈に能く正しく無爲無相法爾の道に順はんや。唯だ願はくは世尊、是の中の深趣を開發して、世間の如言の妄執及び疑謗の情を除きたまへとなり。

「爾時薄伽梵」以下は世尊偈を以て答へたまふなり。初めに「善聽法之相」と云ふは、諸法の實相は義甚深にして見難きを以て、是の故に誠めて善聽せしめたまふなり。夫れ法は常に無性にして衆縁より生ず、即ち是れ八心の相は諸の戲論を起るたり。汝更に何處に於てか、無相無爲の法を求覓せんと欲する。故に次の句に「法離於分別及一切妄想」等と云ふ。若し諸法は本より無相なることは是の如しと了知する時は、即ち心の實相は初より以來常に自ら不生なりと照見す。その時一切の身口意業皆虛空の如くして、盡す可からず、故に「我成正覺究竟如虛空」と云ふ。然も一切の愚童凡夫は實の如く知らざるを以ての故に、邪倒にして妄に種種の境界を執す、謂はゆる時方諸の相貌等なり。「樂欲無明覆」とは常に愛水のために潤され、無明に覆はるるなり。若し我れ方便を捨てて、直ちに衆生の爲に、是の如くの自證の法を説かば、彼等云何が悟解して能く進趣せんや。故に偈の次に設教の意を明して「爲度彼等故隨順方便説」と

云ふ。佛の意は言はく、我れ甚深の法相は直ちに宣説す可からざるを以ての故に、方便力を以て此の漫荼羅の具縁支分に寄せて、初業の者をして心を措くに地あり所作空しからざらしむ。即ち此れを以て佛の加持を蒙り、兼ねて十縁生句を観察することを得るが故に、能く實相を動かずして神通に遊戯し、普く一切の善知識を觀て、一切諸佛の土を莊嚴す。諸の行人に諸行を放捨して無相に住せしめんことを欲せず、又諸行に執着して有相に住せしめず。故に時方所作の業を説くと雖も、而も實には時方なく、作もなく造者も無し、彼の一切諸法はただ實相に住せりと云ふふなり。若し一切有爲の法皆悉く實相に住せば、豈に彼の癡人の或は虚空を逃避せんと欲し、或は虚空を貪着せんと欲するが如くなることを得んや。

復次に阿闍梨此の中に於て、法華經の三車の譬喻を廣く説くべし。彼の長者の諸子幼少無知にして、種種の善言を以て勸誡して、火難を出でしめんと欲すと雖も、終に得ること能はず。長者彼の深心の着する所はただ嬉戯にありと觀て、即ち方便を以て之に告げて言はく、今此の門外に三種の妙車あり、汝等まさに往きて、之を取りて、自ら娛樂す可しと。時に彼の諸子、遊戯の名を聞き、其の願に適ふを以の故に、

情みな勇銳して奔り競ひて出づ。其の等しく寶乘の莊嚴第一なるを獲るに及びては、乃ち彼等の宿心の圓る所に非ざりしが如く、此の漫荼羅の法門も亦復是の如し。如來世間の因縁の事相を以て、不思議法界に擬儀し況喻して、以て群機に逮俯す。若し承攬す可きものは、便ち能く普門より信解して、勇進し修行す、三密の加被を蒙るを以て、自ら心明道を見る時、乃ち種種の名言は、皆是れ如來の密號なりと知るに及びては、亦彼の常情の圓る所に非ず。三月持誦と言ふが如きは、乃ち是れ性淨圓明の中の三轉の方便なり、豈にただ九句の解を作す可けんや。又東方寶幢佛と云ふが如きは、乃ち是れ初發淨菩提の義なり、豈にただ四方の解を作す可けんや。此れを以て之を例するに、諸餘の法門も皆意に領す可し。故に「而實無時方乃至唯住於實相」と云ふなり。

復次に世尊は大悲無限にして、諸の未來世の障重根鈍の衆生の、頓に法界に入るのと能はざるを哀愍したまふが故に、此の深秘藏の中に於て、旋轉惣持に兼ねて淺略の方便を存するを以て、たとひ事相の中に於て思惟修習すれども、亦世間の悉地を成じて、功唐捐ならず、三密冥に資けて終に佛果を成す。故に次の偈に、「復次に秘密主、

當來世の時に於て、劣慧の諸の衆生は癡愛自ら蔽ふを以て、ただ有相に依りて恒に斷常の時方と、所作の業の善不善の諸相とを樂たがひ、盲冥に果を樂たがひ求めて此の道を知解せず。彼等を度せんがための故に、隨順して方便を以て説く」と云ふなり。是の故に傳法の人は、當さに善く根縁を識り、又法門の分劑を知りて、病に應じて藥を授けて、機に差たがはしむることなるべし。若し着相の人のために輒たがく甚深の空義を説かば、則ち怖畏疑惑して其の不信を増さしむ。若し利根深智のものに授くるに、輒たがく淺略の法門を以てすれば、則ち無爲の正道に順はずと思ひて、輕慢を生ず。既に他に於て益なく、又自ら三昧耶を犯す。故に先づ瑜伽に住して彼の本末の因縁を觀すべし。善く了知し已りて、當に此の問答の中の施權顯實の意を觀じて、一切の諸の方便門に散入して之を教授すべし。則ち能く饒益する所多し、故に障難を生せず。

經に云はく、秘密主是の如くの所説の處所の中に、一の地に在るに隨ひて治して堅固ならしめて、未だ地に至らざる瞿摩夷及び瞿摸怛囉を取りて、和合して之を塗れ、次に香水の眞言を以て灑淨せよ」とは、教の所説の如く、凡そ漫荼羅を造らんには、七日の内に於て須らく畢ふべし。最初の日に於て、阿闍梨まさに大日如來の自性に住

して、然る後に地神警發すべし。嚴身の方便は皆供養次第の中に説くが如し。警發し已りなば、不動尊の眞言を用ひて之を加護し、然る後に地を掘りて法の如く擇治す。彼れ先づ中心一肘量を掘りて、擇び畢りて還りてまた之を填つべし。若し盈滿して餘あるをば上地とし、舊の如くなるをば中とし、滿たざるをば下とす。是の如く次第に諸過を除き已りて、掘りし所の土を細かに治して、稍稍之を填てて、潤すに牛液を以てし、築きて堅固ならしめよ、平正なること手掌の如し、次に瞿摩夷瞿摸怛囉をもつて和合して之を塗れ。若し淺略の釋ならば、此れは是れ牛糞及び液なり、彼の方の俗法に以て清淨とするに順はんがための故なり。秘密に就きて之を釋せば、瞿くは是れ行の義なり、阿字門に入るを以ての故に、則ち是れ諸法無行なり。摩まは是れ我の義なり、夷いは則ち乘の義なり。何故ぞ諸法無行なる。一切の法は我不可得なるを以ての故に。若し我あることなければ、所乗及び乗者無し、爾れば乃ち名けて大乘とす。瞿摸くもの義は前の釋に同じ。怛囉たんらは是れ如如離塵垢の義、即ち是れ心の實相なり。若し行者能く是の如く心地を淨治するときは、則ち能く畢竟清淨にして、諸の障礙を離る。凡そ擇地平治し已りなば、其の方分を知りて、即ち漫荼羅の中心深

成辨諸事の眞言不動明王或は又降三世明王の眞言なり。

五穀五藥一傳

一肘許を穿ちて、(二)成辨諸事の眞言を用ひて、五寶五穀五藥を加持して其の中に安置せよ。去垢辟除等は皆供養法の中に説くが如し。若し深秘の釋ならば、即ち是れ菩提心の中の五智の寶を安立して、能く五種の善萌を起し、五種の過患を滅除す、故に五穀五藥と云ふ。(三)是の如く安置し了りて、更にまた淨塗して、極めて平正ならしめよ。灌頂せんと欲する瓶を取りて、貯るに淨水を以てすべし、大いに満たしむること勿れ、諸の花果を挿み、中に五寶穀藥を置いて、寶を埋めし處に之を置くべし。第三日に瓶を置くより以後は、日日三時に辨事の眞言一百八遍を誦じて、此の瓶を加持して、然して後に餘の事業を作すべし。(四)第四日の暮に至りて、次に香水の眞言を用ひて、香水を加持すること或は一百八遍乃至千遍、然して後に灑淨すべし。彼の眞言に曰はく、

南麼三曼多勃跋南、阿鉢囉底三迷、伽伽那三迷、三麼多奴揭帝、鉢囉吃嚩底微輸睇、達摩跋賭微戊達爾、莎訶。

初めの句は普く諸佛を歸命したてまつるなり。毗盧遮那の三身の一切處に遍きが如く、十方三世の一切如來も亦また是の如し。今皆普通の心を以て一切歸命し已りて、

然して後に此の眞言を説くことは、此の諸の世尊をして本誓を越へざるが故に、同共に加持して證明を作さしめんと欲するなり。下の一切の眞言例して爾り、復廣く釋せず。第二句の中に最初の阿字門を以て眞言の體とす、謂はゆる種子の字なり、餘の諸字門は皆此の字を莊嚴せんが爲の故なり。此の字門は即ち是れ菩提心の本原なるを以て、今造る所の大悲藏生漫荼羅王なり。乃ち先づ香水を用ひて灑淨することは、皆是の如くの心地を治して諸の垢穢を離れしめんがための故なり。若し外境を論ずれば、亦是れ所持の金剛の心地なり、是の故に餘字は皆此の字門を成さんがためなり。阿字は是れ一切の法、本不生の義なり。次に波羅字と云ふは、波は是れ第一義諦なり。羅をば名けて塵とす、一切の字は皆阿字門に入るを以ての故に、即ち是れ塵垢本來不生なり、塵垢本來不生なるは即ち是れ第一義諦なり、第一義諦は謂はゆる淨菩提心なり。次に底字あり、正體は是れ多字門なり。三昧の聲を帶ぶるを以ての故に轉じて底とす。底は是れ心の義なり、亦是れ如如の義なり。自心の如實の相に如ふは即ち是れ淨菩提心なり、淨菩提心は一切の法に於て都て染着なし、即ち蓮花三昧と名く。是の三昧に住すれば、乃至諸法の空相も不可得なり、謂はゆる諸佛の虚空とす、

(二) 四悉檀 世界
 悉檀 爲人悉檀 是
 有の義 對治悉檀 是
 空の義 第一悉檀 是
 悉檀は不生の義 阿
 字の故に四共の義 阿
 字の義を説くに外
 ならず。
 (三) 四不生 自不
 生、他不生、共不
 生、無因不生の四
 義みな阿字の不生
 の義に外ならず。

故に次に娑^サ字と摩^マ字門とを明す。定慧均等なるを以て三昧の聲を具ふ、故に
 三迷^{サンミ}と云ふなり。此の中にはただ字門に約して解釋す。諸の大乗經論に、(二) 四悉檀^シ
 四不生等に約して、種種の因縁譬喩を以て、廣く阿字門を説くが如きは、則ち無量の
 句義あり。又一切の語言の中に、皆阿の聲を帶ぶるを以ての故に、一一の字門に皆一
 切の字門を具ふ。若し意を得ん者はまさに自在に旋轉して之を説くべし、以下は具に
 論す可からず。復次に眞言の中に字義あり、句義あり。字義は已に前に説けるが如し。
 若し句義を云はば、此の阿鉢囉底三迷^{アハチラチサンミ}は是れ無等無對の義なり。謂はく此の心地の漫
 茶羅王は、一切の語言譬喩を出過せり、乃至一法として倫匹をなす可きことあること
 なし、故に無等と云ふ。何故に此の如くなるか、具さに如上の字門所説の義を含むを
 以ての故なり。第三の句義に虚空等と云ふ。言はく、此の心地は畢竟淨なり、無分別
 なり、無邊際にして虚空に等同なり。復次に伽^ガ字門は是れ行の義なり。那^ナ字門は
 是れ大空なり、法に於て自在なる義なり。伽字、阿字門に入るを以ての故に、一切の
 法は本初より以來^{エノカタ}都て所行なし、如來は此の法の中に於て實際に到りたまふ。又復更
 に所行無し、不行なるを以ての故に、即ち是れ大空に住して、法に於て自在なり。我

が心地と此の大空と畢竟等しきを以ての故に、當に知るべし、弟子の心地及び道場の
 地も亦復是の如し、故に等虚空と云ふ。第四の句義に等隨と云ふは、金剛の地は虚空
 に等しきを以ての故に、即ち能く等しく一切衆生界に遍して、普く隨類の身を現す、
 故に漫茶羅を畫作するに堪へたり。復次に娑^サ字門は是れ漏の義、摩^マ字門は是れ我の義。
 意の義なり、此れ等の諸の衆生界は本より不生なるが故に、皆悉く如如なり、是の故
 に法界と衆生界と畢竟等し。努^ヌ字門とは大空三昧なり、如來は此の大空三昧に住して
 無行無到にして亦去來もなし、而も能く其の心量に如^かひて、緣に隨ひて應現す、故に
 等隨と云ふなり。第五の句義に本性淨と云ふは、還つて阿字の淨菩提心門を轉釋し、
 及び香水の義なり。如來は等至法界の香を以て、大悲三昧の水と和合して、能く普く
 一切衆生の心地に灑ぎて、其の垢穢を除きたまふ。何の故にか是の如くなる、彼の本
 性淨なるに由るが故に、水の性本より淨きが故に、能く諸の垢穢を淨むるが如く、如
 來の香水も亦是の如し、本淨に由るが故に能く以て一切衆生の心を淨む。故に次に第
 六の句義を明して淨除法界と云ふ。猶ほ香水を地に灑ぐことは、穢を除かんが爲の故な
 るが如く、如來も亦爾り、性淨の戒香を以て、性淨の悲水に和合して、遍く法界の衆

生の性淨の心地に灑ぐことは、一切の戲論を皆淨除せしめんがためなり、故に亦當に諸の字門を以て廣く之を衍ぶべし。一切如來同じく是の如くの大誓を説くを以ての故に、名けて眞言とす。復次に法界とは即ち是れ衆生界なり、衆生界とは即ち是れ心界なり、心界とは即ち是れ本性淨なり、本性淨とは即ち是れ遍く一切に至り、虚空に等同なり、虚空に等同なるものは、即ち是れ無等にして、阿字門に等し。虚空の無邊なるが如くなるが故に、當に知るべし、阿字門も亦無邊なりと。虚空の無染無變無動なるが如くなるが故に、當に知るべし、阿字門も亦無染無變無動なり。虚空の一切の相を離れたれども、而も萬像を含み、一切の作を離れたれども、而も世間の事業之に因りて成ることを得るが如く、阿字門も亦復是の如し、無相無作にして無盡莊嚴を具足し、普門不思議の業を成就す。是の如く當さに種種の門を以て、自在に之を説くべし。然して復無量無邊の未曾有の法あり、彼の虚空の能く譬喩する所に非ず、是の故に阿字門を眞言の種子となす、譬類に過ぎたればなり。末の句に莎訶と云ふは是れ覺の義なり。一切如來もと菩薩の道を行ひし時、同じく是の如くの義を見るを以ての故に、必定師子吼して誠實の言を發す、我れ要す當に此の阿字門を以て、遍く無盡の

衆生界を淨むべし、若し我が此の誓虚しからずば、其れ一切衆生ありて、我が誠言を誦じて法則を虧がざるときは、則ち當に其の願ふ所の如く皆充滿すべしと。我れ今すでに如來の三昧耶の教に隨ひて、此の眞言を説く、唯だ願はくは本誓に違はざるが故に、我が道場を具足し嚴淨せしめたまへ、故に莎訶と云ふなり。以下の諸眞言に莎訶と云ふは、其の義大同なり。

ニ凡そ五寶を内れん時は、前の如く十方の諸佛を敬禮すべし。而して請白して言はく、我れ明日當に請法を作すべしと。此の第三日より以去、漸く當に漫荼羅の大小方位を准定すべし。或は四肘、或は十二肘等なり、乃至諸の聖天の位處、皆白檀を點記せよ。若し阿闍梨具さに記持すること能はずば、乃至其の形相を書き、或は字を書して之を記して、一一に分明ならしめよ。及び香水を灑淨し竟らば、當に白檀を用ひて圓壇を塗り作るべし。十二指量に劑れ。最初には中胎藏の大日世尊の位を置き、次に東方の大勤勇の處に於て、一切如來の位を置き、東南の維の眞陀摩尼の處に、一切菩薩の位を置き、次に東北の維の虚空眼の處に於て、佛母の位を置き、次に大日の右邊に於て、蓮華手の位を置き、次に大日の左邊に於て、金剛手の位を置き、次に

西南の隅に於て、聖者不動の位を置き、西北の維に降三世の位を置け。正面は是れ通門の處なり、即ち阿闍梨の所住として供養瑜伽を修する處なり。

三經に「初第一我身」と云ふは、即ち毗盧遮那の位なり。五佛を以て當さに共に一壇に置くべし。「第二諸救世」とは即ち是れ諸佛菩薩なり、亦分ちて二位とす。「第三彼同等」とは即ち是れ佛母なり、如來をば名けて無等とす、而して般若波羅蜜は無等と等しきが故に、彼同等と云ふなり。「第四は蓮華手、第五は金剛部主、第六に不動尊」と云ふ、則ち降三世は知る可し、此れ即ち皆是れ成辨諸事の持明なり。當に知るべし、此の六位を擧げて一切諸尊を攝す。是の如く作し竟りて當さに香華供養の具を布列すべし、供養次第の儀式に准同せよ。然る後寶蓮華臺寶王の宮殿を觀作せよ。中に於て座を敷き、座の上に白蓮華臺を置き、阿字門を以て轉じて大日如來の身を作せ、閻浮檀紫磨金色の如く、菩薩の像の如くして、首に髮髻を戴き、猶ほ冠形の如し、通身に種種の色光を放ちて、絹縠の衣を被たり。此れは是れ二首陀會天にて最正覺を成する幟幟なり。彼の界の諸の聖天衆の衣服は輕妙にして、乃至鉢兩あることなし、本質嚴淨にして、復假るに外の飾を以てせず、故に世尊俯して其の像に同じたまふ。若

二、首陀會天
語なり、淨居天
義、不還果の聲聞
の所居たる第四禪
の淨居天を過ぎて
菩薩受職成道の處
ありとす、是れ
今謂ふ淨居天な

し深秘の釋を作さば、如來妙嚴の相は法爾にして減なし、造作の所成に非ざるが故に、外の寶を以て飾とせず、乃至十住の諸菩薩も、猶ほ佛の神力を承くるに因りて、加持身を見ることを得。其の常寂の體に於ては羅縠にあるが如し、故に以て況とす。閻浮金は亦是れ自然性淨にして色又最深なるは、佛の金剛智體の最も深妙たることを明す。通身に種種の光を放つは、即ち是れ普門より大慧の明を開示するなり。

次に四方の八葉の上に於て四方の佛を觀すべし。東方に寶幢如來を觀せよ、朝日の初めて現れて、赤白相輝く色の如し。寶幢は是れ發菩提心の義なり、譬へば軍將の大衆を統御するに、要す幢旗を得て、然して後に部分齊一にして、能く敵國を破り、大功名を成すが如く、如來の萬行も亦復是の如し。一切智の願を以て幢旗となし、菩提樹下に於て四魔の軍衆を降伏するが故に以て名とす。色朝日の如くなるは、亦彼れと相應する義なり。南方に娑羅樹王の華開敷佛を觀せよ。身相金色にして普く光明を放つ、離垢三昧に住するが如き標相なり。始め菩提心の種子より、大悲萬行に長養せられて、今遍覺の萬德開敷を成す、故に以て名とす。離垢は即ち大空の義なり、此の大空を證する時、猶ほ眞金の百鍊して垢穢都て盡くるが如くなるが故に、佛身の相も亦

然り。此れは是れ世間上妙の金なり、若し閻浮檀金に比すれば、即ち色淺くして稍濁れり、彼の自然に鏡徹清明なることを得ず。華葉上の佛は心量の因縁より生ずるを以ての故に、差降あるなり、次に北方に於て不動佛を觀せよ、離熱清涼にして寂定に住する相に作せ、此れは是れ如來の涅槃の智なり、是の故に義を以て不動と云ふ、其の本名には非ず、本名は當に鼓音如來と云ふべし。天鼓の都て形相なく、亦住處もなければ、而も能く法音を演說して、衆生を警悟するが如く、大般涅槃も亦復是の如し、二乗の永寂にして都て妙用なきが如くには非ず、故に以て喩とす。次に西方に於て無量壽佛を觀せよ、此れは是れ如來の方便智なり。衆生界無盡なるを以ての故に、諸佛の大悲方便も亦終盡なし。故に無量壽と名く。梵音の(二)爾爾を名けて仁者とす、又四魔を降伏するを以ての故に、名けて勝者とす、故に偈に具に其の義を翻じて之を仁勝者と謂ふ。此の二佛も亦真金の色に作るべし、稍目を閉ちて下し視しめて、寂滅の三昧の形に作れ。諸佛も例して是の如し。華臺の四維に四菩薩あり、(三)下の文に之を説くが如し。其の一切如來の位には、ただ一佛を觀じて金壇の中に在く、即ち一切の佛身に同じ。餘は各經の中の像位に依りて、皆字を轉じて身と成して、一一に明了

(一) 爾爾 Teri

(二) 下文 經第五 卷入秘密漫荼羅位 品を指す。

(一) 汗栗駄 梵語
 sridaya 心と譯す、
 肝心、心體等の
 心なり、念慮の
 心は、梵語に實多
 citta と云ふ。

(二) 百光遍照王
 阿字に點を加へた
 るものなり。
 (三) 無垢眼 兩眼
 中に羅字を觀する
 な無垢眼とす、羅
 字は離塵垢の故
 に。

ならしむべし。凡て漫荼羅轉字の法は、一一の諸尊に皆本種子の字を用ひよ、或は諸の餘部の通用の字を以てせよ、三部の阿婆縛等の如し。若し恐らくは淺行の阿闍梨、是の如く速疾に旋轉すること能はずば、但だ阿字門を觀じて無量の光を生せしむ、光の至る處に即ち彼の尊の身を現す。法事の夜に至りて、亦皆此れに倣ふべし。凡そ觀行を修せん時は、先づ當に五字を以て身を持すべし、供養法の中に説くが如し。即ち自心を觀じて八葉の蓮華と作せ。阿闍梨言はく、凡人の(一)汗栗駄心の狀は、猶ほ蓮華の合みて未だ敷かざる像の如し、筋脈ありて之を約めて以て八分と成す、男子のは上に向ひ、女人のは下に向ふと。先づ此の蓮を觀じて、其れを開敷せしめ、八葉の白蓮華座となす。此の臺の上に當に阿字を觀じて金剛の色に作し、首の中に(二)百光遍照王を置きて、而も(三)無垢眼を以て之を觀すべし。此れを以て自ら加持するが故に、即ち毗盧遮那の身と成る。此の方便を以て毗盧遮那の身を觀じて、我が身と無二無別ならしめて、而も二明王の中間に在るを、名けて佛室に住すとす。漫荼羅を書き竟る時に至りて、阿闍梨座位を移して壇門の外に出でんには、當さに此の佛室の位に於て、意の所樂の尊を置くべし。或は般若經を置きて、金寶の盤を以て盛りて嚴飾し供養し、

二、四、大亂脱

或は所持の數珠若しは金剛杵シヨ金剛鐸タツを置く等なり。
ニ 又凡そ地を擇治せんと欲する時は、當に自ら心蓮花の上に如意寶珠ありて、内外明徹せりと觀すべし。彼れ諦カキかに觀察する時、有らゆる善惡の相悉く中に於て現る。阿闍梨即ち當に慧の方便を以て之を擇治して、堅固平正なることを得しむ。弟子の心を觀することも亦是の如し。此の中の深秘の趣は意を以て得可し。

六 亂脱

四六 行者佛室に住して上の如く諸の聖尊を觀じ竟りて、當さに阿アを轉じて嚙ガとなすべし。金剛薩埵を以て自身を加持し、塗香華等を奉り、法の如く供養すべし、皆次第法の中に廣く説くが如し。然して後に大悲心を興し、誠を至して慇懃に請白の阿利沙の偈を誦せよ、經文の如し。今梵語を存すること左の如し。

八 亂脱

三漫嚙ナマンバカ訶囉カラシ存念ト我マイ薩埵サタ一切ナ爾ナ者ナ即チカ
請クふフ迦カ梨リ也ヤ作サ婆バ袖ス但タ嚙カ井イにニ佛ブツ濕シツ務ム爾ニ那ナ嚙カ曳エ平ヘイ明日ミツなり

此の偈の意は言はく、諸佛悲愍者唯だ願はくは我れ等を存念したまへ、我れ今請白す、當に受持地の法を作すべし、并に諸の佛子、明日に當に降臨のために證明を作したまふべしと。梵音には存念の聲の中に於て、即ち請赴の意あるなり。

二 亂脱

- 三 ○一切菩薩
- 六 ○金剛手
- 七 ○聖無動尊
- 二 ○一切佛位
- 一 ○三五如來位
- 四 ○阿闍梨位
- 四 ○佛母虛空眼
- 五 ○蓮華手
- 八 ○降三世尊

此れは是れ白檀漫茶羅の位なり。

五 亂脱
八漫茶羅前
白檀漫茶羅九位
の中に自身を除き
て八位を觀す

第五日の暮に至りて、復當に次第に諸の法則を具すべし。好く自ら嚴身して八漫茶羅の位を觀じ、奉請結護等一一に周備し竟りて、當に不動明王或は降三世尊を誦じて、密印と相應して一百八遍を滿たし、此の地を加持すべし。阿闍梨言はく、第三日より以去、毎日に三時の念誦の時、皆不動の眞言一百八遍を誦じて地を加持せよ、獨り此れのみ非ず、一切處に用ふべしと。又初日より三日に至るまでの以來、若し留難あらば即ち當さに收攝し停止すべし、若し已に白檀の位を塗り竟らば、設ひ種種の魔事ありて兩つ和合せずとも、要カナ當に方便を加へて必ず成就することを得しむべ

し。餘は(一)瞿瞿の中に説けるが如し。其の第五夜に不動の眞言を誦じ竟りて、次に當に大日如來の身を以て即ち持地の眞言を誦じ、及び三昧耶の印を作すべし。彼の眞言を説きて曰はく、

南^ナ摩^マ三^サ曼^{マン}多^ダ勃^ボ駄^ダ喃^{ナン}、薩^サ婆^バ他^タ揭^ケ多^ダ、地^ヂ瑟^セ姪^シ那^ナ地^ヂ瑟^セ社^{シャ}帝^{テイ}、阿^ア耆^キ麗^{レイ}、微^ビ麼^マ麗^{レイ}、娑^サ麼^マ羅^ラ彌^{マイ}、鉢^ハ囉^ラ吃^キ囉^ラ底^ヂ鉢^ハ囉^ラ輸^{シュ}睇^{テイ}、莎^{シャ}訶^カ。

初めの句は一切諸佛を歸命す。第二、第三、の句義に、一切如來の加持を以て之を加持せよと云ふ。此の意は云はく、彼の金剛道場の如きは、一切如來神力を以て、共に加持したまふ所なり、今此の地をば亦復是の如くならしめたまへと。復次に我れ已に弟子の淨心地を平治し竟りぬ、此れは是れ心王の如來、大悲藏漫荼羅を圖畫したまふ處なり。我れ今誠實の言を説く。一切如來の神力を以て之を加護して堅固不動なることを得しめたまへとなり。第四句に阿耆麗と云ふは是れ不動の義なり。第五句に微麼麗と云ふは是れ無垢の義なり。此の意は言はく、一切如來の神力を以て、正しく之を加持して、安固不動なることを得しむ、但だ不動なるのみに非ず、又一切の垢を離れしめたまふとなり。正しくは第四句の初めの阿字を以て眞言の體とす。如來は何れ

(一) 羯磨 梵語、
辨事と譯す。

(三) 阿闍梨の座四方は
於て持誦勸請す可
き尊なる方は、大
の向ふ方なるが故
に大日の眞言を持
誦するなり。白檀
尊の本誓の座に各
位に背くことな
るなり。

の法を以て加持してか、能く畢竟じて傾動せざらしむる。謂はく此の阿字門を以ての故に、是の如くの力用あるなり。第六句は是れ憶念持の義なり。猶ほ比丘の(一)羯磨の法を作すに、衆僧をして一心に和合して、同共に受持せしむるが如く、今此の眞言も亦爾り。阿字を用ひて加持し竟りて、一切如來本誓を憶念するが故に、同共に受持したまへと請ふなり。第七句は是れ本性淨の義なり。此れ即ち前の句を轉釋す。何の故ぞ諸佛心を同じうして加持したまふ。本性淨なるに由るが故に、若し法、阿字門に入りぬれば、即ち是れ本より已來無動無垢なり、十方三世の諸佛此の義に由るが故に、皆同じく一戒一見なり、所以に同共に加持したまふなり。末の句に莎訶と云ふは、僧の羯磨し竟りて忍可印成の句を加ふるが如く、若し我が發する所の誠言必定して謬なくば、唯だ願はくは諸佛、三昧耶を越えざるが故に、所作を圓滿せしめたまへとなり。此の中の有らゆる字義亦當に廣く分別して説くべし。時に彼の阿闍梨、當に東方の一切如來の壇位の外に往きて、東に向ひて眞言を誦持すること、或は三遍或は七遍すべし、能く多きは益善し。次に南方に往き、次に(三)西方に往き、次に北方に往きて、皆(三)白檀の座位に背きて之を誦持せよ。是の如く一周し竟りて、次に虚空眼の位に往き

(一) 瞿曇經 淨地
(二) 蘇多羅 金剛
線なり。

て、當さに面を東北に向けて、壇位に背きて之を誦すべし。次に東南に往き、次に西南に往き、次に西北に往きて、又一周し竟りて、更に當さに誠を至して禮を作して、種種に供養すべし。阿闍梨の座位に就き、面を東にして坐し、本受持の眞言を誦じて、本尊の三昧に住せよ。皆供養次第の中に説けるが如し。又次第に白檀位の諸尊の眞言を持し、并に彼の印を結べ。阿闍梨言はく、先づ部主大日の眞言一百八遍を持せよ、所餘の八位に彼の眞言の大小を觀じて之を持せよ、若し更に能く誦せば、兼ねて第二院の四菩薩、第三院釋迦等の上首の諸尊を持せよ、乃至都て諸位を誦することも亦得と。其の白檀の位は、但だ塗泥乾きなば、香水を以て灑ぎ竟りて、即ち之を作すことを得べし。亦尅めて第四日にあるにあらず、置き了りてより後皆須らく此れに依りて持誦すべし。法事の夜に至りても亦此れに准じて知る可し。其の受持地の夜、阿闍梨法の如く持誦し竟りて、乃至金剛の諷詠を以て、遍く諸佛菩薩を歎す。冥坐疲れ極まらば、即ち此の壇を置く處に於て、法の如く護身して、即ち東面にして臥すべし。當に所度の弟子に於て、極めて大悲憐愍の心を生ずべし。(一)瞿曇且坦囉の若く地を受持し竟りて、又(二)蘇多羅を結びて、弟子の名號を受持する法あり。彼れ安寢せん時、當さに心

(一) 生の作用あるに三
(二) 種の作用あるに三
(三) 誠神又法に神變を
(四) 念に心輪又法に神變を
(五) 身業第ニは口業、
第三は意業なり。

蓮華臺の中に摩字門を思惟すべし。一切諸法は我不可得なるが故に、即ち是れ無障礙の菩提心なり、亦是れ如意寶珠なり、又云はく此の如意珠只是れ阿字門なり。彼の阿闍梨當さに夢中に於て、或は無量の諸佛及び菩薩大名稱者示現して、諸の事業を作すと見るべし。謂はく種種の應度の衆生に隨ひて、(一)三輪を以て化導し、或は親り自ら悲生漫荼羅を安布し建立し、或は微妙の音聲を以て安慰し勸勵して言はく、汝今衆生を愍念するが故に此の漫荼羅を造作す、善き哉摩訶薩埵、汝が書く所は甚だ微妙なりとすと。是の如くの種種の境界あらば、阿闍梨當さに慧心を以て善く之を決擇すべし。當に知るべし、衆聖已に共に是の地を加持す。意に隨ひて作法す可しと。若し障礙あらば、相應の護摩作して、方便を以て淨除し、當に大勤勇の心を發して、要す所作を成就せしむべし。復次に若し見諦の阿闍梨ならば、則ち蓮華三昧の淨菩提心如意珠の中に於て、自然に明かに有障無障の因縁を見ること了了無礙なり。心佛現前して囑授し、爲に疑はしき所を決す。如し其れ魔事を覺知せば、當に大智慧大方便を以て旋轉して、護摩の法を作して、要す所持の心をば動かす退かず、法界漫荼羅を建するに堪へしめて、然る後に休息すべし。復次に阿闍梨初め地神を警發せしより以來、便ち是の如く

の道場の地を捨離すべからず。恒に是の中に於て加持し念誦し、審諦に觀察して、未だ平正ならざる處あるに隨ひて、輒ち之を修治せよ。又衆縁の支分すなはを思惟して、皆素め具せしめよ、事に臨みて闕乏して、疑惑を生ずることを得ること勿れ、地を受持し竟りてより、即ち界域を規畫し、方位を布定して、灌頂の夜に至りて方に諸尊を造るべし、若し速かに成すこと能はずば、地を持して以後に、漸次に之を修するとも亦答なし。

經に「復次於餘日攝受應度人」と云ふより以下、「授與香水令飲彼心清淨故」にいたるまでは、弟子を攝受し建立し護持する支分を明す。地を受持し已りて、次に明夜當に弟子の法を作すべし、故に餘日と云ふなり。此れに因みて弟子應度の相を廣く辨ず。偈に「若弟子信心」とは、謂はく、阿闍梨彼れの現在の根性、或は久遠の因縁を觀るに、此の不思議縁起の三種の秘密の諸の方便の中に於て、直ちに信じて疑はず、能く怖畏することあることなければ、便ち攝受するに堪へたり、餘は師徳の中に説けるが如し。偈に「生種姓清淨」と云ふは、謂はく、婆羅門等の四種の大姓の家に於て生ず、若し是れ(二)旃陀羅等は家法相承して、不清の事を習行するを以ての故に、性多く弊惡

(二) 旃陀羅 印度に四姓の差別階級を立つる中の最下劣の種姓なり。

なり、若しために傳法灌頂を作して、大法を流通せしめば、他の輕慢を生じて、匱法の因縁を成さん。なほ比丘の受具にも亦、衆僧を毀辱する極卑下姓を簡去するが如し、若し但し結縁の受法ならば、論ずる所に非ず。復次に若し久遠より以來、曾て發菩提心の因縁あらば、即ち是れ如來種姓の中に生ず、最も勝族とす。偈に「恭敬於三寶」と云ふは、謂はく、佛法衆僧に於て、淳厚謙下の心を起して、常に好みて親近供養し尊重し讚歎す、當に知るべし、是の人は先世に道を行ひし因縁ありと。乃至常不輕菩薩の如くなるをば、是れを深く一切衆生を敬ひて、佛法僧寶を信すと名く。「深慧於嚴身」とは、是の如くの等虛空無邊の佛法は、劣慧の者の心器の能く堪ふる所に非ず、故に智性深利にして以て自ら莊嚴せる者に乃ち爲に説く可し。

「堪忍無懈倦」とは、此れは是れ堪能する所ありて、退屈する所なき義なり。梵音に忍辱と同じからず、謂はく、求法の因縁に種種の艱苦の事ありと雖も、皆悉く能く作す、假使一度成らざれども復更に發迹して之を修す。誓ひて大海を挹み盡して、而して後に已むが如し、若し人志性は是の如くならば、則ち法を傳ふ可し。「尸羅淨無缺」とは、謂はく、在家出家の律儀に於て、乃至本性受の諸の禁戒に於て、奉持する所に隨ひて

則ち深心に防護して、毀缺あることなきなり。若し是の如くの性を具ふる者は、未だ三昧耶平等の大誓に入らずと雖も、復當に敬順して違はざるべきが故に、法を傳ふるに堪へたり。「忍辱不慳慳」とは、此の中を分ちて二白とす、忍辱とは内外違順の境界の(二)八種の大風に於て、其の心安忍して傾動する所なきを謂ふ。智度の尸波羅蜜の中に廣く説けるが如し。當に知るべし、是の人は必ず持明の重禁を犯さず、不利衆生の行を作さざるが故に、法を傳ふるに堪へたりと。不慳慳とは有らゆる財法に於いて、常に他を惠まんことを念ひて、もし來り求むる者には、心に鄙慳なきを謂ふ。智度の檀波羅蜜の中に廣く説けるが如し。當に知るべし、是の人は必ず持明の重禁を犯さず、正法を慳慳せざるが故に、傳授するに堪へたりと。「勇健堅行願」とは亦分ちて二句とす。勇健とは即ち是れ阿闍梨の徳の中の勇健の菩提心の種性なり。道を行ふ時に於て、種種の畏る可き色聲に遇ふと雖も、心怯弱ならず、乃至生に出で死に入るに怖畏の想なくして、正しく菩提薩埵大人の所行に順ふ、故に傳授すべし。堅行願とは此れは是れ要心の願なり、梵音に求願の義と同じからず。自ら志を立てて毎日三時に念誦せしめ、則ち一期を終るまで、種種の異縁に遇ふと雖も、初より間絶せざるが如く、是の

(二)八種大風一
毀譽稱讚苦樂の八
境なり。

如く事に始終あれば、若し菩薩道を行ふ時にも、亦本誓を虧がざるが故に、法を傳ふるに堪へたり。然るに此に説く所の弟子の十徳を、若し兼備せる者は、當に知るべし、是の人は甚だ希有たりと。但し偏に長ずる所ありて、匠成す可きに堪へたらしめば、即ち攝受すべきのみ。又聲聞の受具の時の如きは、種種の遮難を觀察す。謂はゆる^{はなは}ただ少く^{わか}ただ老い、色貌の瑕疵あると諸の病患等なり。白衣の嫌訶を恐るるが故に、輒ち之を簡ひ去つるなり。今此の摩訶衍は是の如くにはあらず、ただ道機にして濟ふ可からしめば、諸餘の過失ありと雖も皆觀る所なし。

偈の中に「或十或八七或五二一四」と云ふは、是れ一期の道場に阿闍梨の灌頂を作すの限數なり。此の中には超數に約して之を取る、謂はく、一より二に至り、二より四に至り、四より五に至り、五より七に至り、七より八に至り、八より超へて十人に至る。是の故に一漫荼羅の中に、同時に三人六人九人のために灌頂することを得ず。蓋し如來の密意なり、阿闍梨も所由を釋せざりき。又大方等陀羅尼經に、十人以上に過ぐることを得ずと云へるに同じ、此れを過ぎて已外は、阿闍梨の心量の周からざる所あらんことを恐る、當に後の縁を待ちて別に爲に作法すべし。又此の十人以下は、

謂はく、俱時に發心して各内外の所有を捨て、三寶に供養し、同共に漫茶羅を成辨するが故に、同時に作法することを得。若し人道場の便に遇ふに因みて、法縁には値ひ難し、乞ふ濟度を爲したまへと云はん者には、未だために阿闍梨の灌頂を作すべからず。「若復數過此」とは、若し但だ結縁を一門の本尊の法の中に求めて、眞言印を受くる者は、則ち是の如くの制限に依らず。阿闍梨亦當に大悲を發起して、能く少分の善心を起す者あらんに隨ひて、皆ために發生して菩提の種子を立つべし、故に或復數過此と云ふなり。

經に云はく、「その時に金剛手秘密主、復佛に白して言さく、世尊當に云何が此の漫茶羅に名くべき、漫茶羅とは其の義云何」とは、此れ如來、人を誦び衆を限るに因みて、諸の未悟の者を曉さんが爲に、轉じて疑問を生ずるなり。金剛手もと世尊に請ひて此の加持の境界を稱して、大悲藏生大漫茶羅王を演說せしめたてまつれり。則ち是の平等の大悲また限量なし、而も今世尊の説き玉ふ所は、徳ありて傳ふ可き者なりと雖も、猶ほ十人に過ぎず、是れ(一)隨轉の一門にして、其の具體に非ざるに似たり。故に(二)當に何んが此の漫茶羅に名くべきと問ふなり。又漫茶羅は是れ輪圓の義なり。今

(一)隨轉一門に佛の本意にあらざれども他の情機に隨轉して説を設くるもの。當に何んが云云大悲漫茶羅は云無限なるべし、僅かに十人以下に局限せるが如きは、大漫茶羅と名け難きに似たり。

既に名數を限局す、理に於て未だ圓ならざるに似たり。故にまた此の中の漫茶羅は是れ何の義とせんかと問ふなり。凡そ二の問あり。世尊の答の中に、初めには名を答へ、次には義を答ふ。名を答ふる中に就きて、還復本旨を申へ明して云はく、夫れ漫茶羅とは是れ發生の義なり、今即ち名けて發生諸佛漫茶羅とす。菩提心の種子を一切智の心地の中に下して、潤すに大悲の水を以てし、照すに大慧の日を以てし、鼓つに方便の風を以てし、碾へざるに大空の空を以てし、能く不思議法性の芽を次第に滋長せしむ。乃至法界に彌滿し、佛の樹王を成す、故に發生を以て稱とす。夫れ雷雨の解を作すに甲の圻くる者に隨ひて先づ萌す。卉木の滋榮の性分等しからざるを以て、遂に平分の施をして亦限量を成さしむ可からず。次に義を答ふる中に、梵音の漫茶羅は是れ乳酪を攪搖して蘇を成すの義なり。漫茶羅とは是れ蘇の中に極めて精醇なる者の淨び聚りて上に在る義なり。彼の精醇なるものは復變易せざるによりて、復名けて堅とす、淨妙の味のみ共に相和合して、餘物の雜ること能はざる所なり、故に聚集の義あり、是の故に佛、極無比味・無過上味なり、是の故に説きて漫茶羅とすと言ふ。三種の秘密方便を以て、衆生の佛性の乳を攪搖して、乃至五味を経歴して妙覺の醍醐を成じ、

醇淨融妙ビュンジャウユウメイにして復増またす可からず、一切の金剛智印同共に集會して、眞常不變の甘露味の中に於て最も第一たり、是れを漫荼羅の義とす。

經に「又秘密主」と云ふより以下は、廣く漫荼羅の義を演べて疑妨を釋除す。復分ちて三とす、初には法界圓壇の普門の無限なることを明し、次には人を限り衆を簡ぶ所由を明し、末の句は阿闍梨に勤勵して、平等の悲願を興さしむ。初の文の中に就きて、「無邊の衆生界を哀愍する、是れ大悲胎藏生漫荼羅の廣義なり」とは、若し行人自ら中胎藏を見る時は、即ち一切衆生に悉く成佛の因縁ありと知るが故に、其の起す所の大悲漫荼羅も亦法界くまに周し。且く十世界微塵數の諸の執金剛菩薩衆等の如きは、一門を以て漫荼羅の主と作すに隨ひて、餘をば眷屬と爲して、則ち一種の漫荼羅を成す。是の如く旋轉して窮已無く、算數譬喩の能く及ぶ所に非ず。何に況や是の中に各無量の門を以て莊嚴し、種種の方便を以て衆生を引攝すること、又勝かげて紀す可けんや。若し行者此の一字の法門の中に於て、廣を攝して略とし、略を衍のべて廣として、法財を出生して遍く一切に施して、常に斷盡なきをば、乃ち善く漫荼羅の廣義を解すと名く。

次に「秘密主よ、如來の無量劫に於て積集せる、阿耨多羅三藐三菩提の加持する所なり、是の故に無量の徳を具せり、當に是の如く知るべし」とは、此れは廣義の所由を釋するなり。華嚴の入法界の諸の善知識、各各に一門の中に於て通達せる所の法は、深廣無際なれども、然れども亦互に相知らざるが如し。如來も昔菩薩の道を行ひたまひし時、普門より是の如く等の佛刹微塵數の諸の善知識に親近して、彼の一一の功德藏に於て、皆極無等比無過上味に到りたまふ。是の如くの内證の徳、無量無邊なるを以ての故に、其の加持現作する所の法門眷屬も亦復無量無邊なり、彼の眞言門の行者も當に其の心を通泰して、是の如くの解を作すべし。已に内徳の無限なることを知りぬ、次に本地の漫荼羅の度人の無限なることを明さん。何を以ての故に、大悲願に副ふを以ての故に。故に經の文の次に云はく、「秘密主よ、一衆生の爲の故に、如來は等正覺を成じたまふに非ず、亦二にも非ず、多にも非ず、無餘記と有餘記との諸の衆生を憐愍するが爲の故に、正等覺を成じたまふ、大悲願力を以て、無量の衆生界に於て、其の本性の如く法を演説したまふ」と。此の中の發菩提心の義は入法界品及び智度の摩訶薩の論議の中に廣く説けるが如し。無餘記ムヨキとは佛の現前に授決して、某甲

(二) 若し我が在世の文。法華經法師品

(三) 一切衆生等。北本涅槃經第廿四第廿七第三十六等の文。

の衆生、某劫の中に於て作佛して、某如來と號し、是の如くの國土眷屬あり等と、以て了了に説きたまふが如し、故に無餘記と名く。有餘記とは、衆生に告げて、汝未來の某佛の時に於て、當に是の罪を畢へて、某甲如來汝の爲に授記したまふべしと言ふが如き類是れなり。復次に世尊の(二)若し我が在世或は滅度の後に、諸を法華經の一句一偈を聞くことあらば、我れ皆爲に無上菩提の記を授くと説きたまふが如き、是れを無餘記と名く。若し(三)一切衆生に悉く佛性あり、彼れ善根を生じて、相續して斷たずば、當に無上菩提に至るべしと言ふ、是れを有餘記と名く。我れもと此れ等の衆生の爲に、來りて等正覺を成せり。況や其所願以て滿つ、衆生の自心の寶を開きて、其の本性の如く之を給與す、當さに何の限かあるべき、且く惡世の弘經の淺行の一迹に據るが故に、一期の法事は劑りて十人に至ると云ふのみ。此れより以下は第二の句なり即ち此の人を限り衆を簡ふ所由を釋す。

經に云はく、「秘密主よ、大乘の宿習なく、未だ曾て眞言乘の行を思惟せず、彼れ少分をも見聞して歡喜信受する能はず、又金剛薩埵よ、若し彼の有情、昔大乘眞言乘道の無量の門に於て進趣し、已に曾て修行せり、彼等の爲の故に、此れに限りて名數を

(二) 法華經 藥草

造立す」とは、此の意は云はく、若し諸の衆生、未だ曾て過去無量の佛の所に於て久しく善根を種る、此の秘密乘に於て、未だ曾て修習せずば、造次に之を聞きて信受すること能はじ。若し傳法の人、徒らに善心を以て機に差ひて爲に説かば、或は當に其の誹謗を増して彼の善根を斷つ、故に(二)法華に、無智は疑悔して永失をなすと云へり。十方世界の諸の衆生、聲聞を志求する者あること少し。緣覺を求むる者は轉た復少し。大乘を求むる者は甚だ希有なり。大乘を求むる者は猶ほ易しとす。此の法を信する者は最も難しとす。故に普眼を以て之を觀るに、是の法を受くるに堪へたるものは、猶ほ須彌と大海との塵諦の如し。既に彼の意を將護して、時に乃ち之を説く、安んぞ略制して名數を造立せざることを得んや。云ふ所の「無量門進趣」とは、即ち是れ兼ねて漫荼羅の名義を釋するなり。夫れ漫荼羅とは名けて聚集とす、今如來眞實の功德を以て一處に集在す、乃至十世界微塵數の差別智印輪圓輻湊し、大日心王を翼輔して、一切衆生をして普門に進趣せしむ、是の故に説きて漫荼羅とす。云ふ所の「此れを略して名數を造立す」とは、阿字の五轉を以て、如來の無邊の内徳を統べ、字輪の百明を以て、如來の普眼の法門を攝するが如く、此れ則ち名の略なり。刹塵の方便を以て

②十人の限を一切衆生悉く佛性を具するが故に十人の中に一切衆生を略す。

③具支灌頂支分を具足せる灌頂にして事業灌頂なり。
④繫珠法華經五百弟子授記品に出自する譬にして自ら衣裏に寶珠あるを知らずして窮して乞食となれる如く、本有の佛性を知らざる衆生を喩ふ。
⑤毒鼓 涅槃經如來性品に出づ。毒を塗れる鼓を喩ふ。死を聞くる者皆死すべし。死を滅慧に喩ふ。

八葉の壇を開き、無極の大悲を以て、②十人の限を制するは、此れ則ち數の略なり。然も其の學者一の法明道に於て悟入することを得るに隨ひて、即ち是れ普く一切の諸の總持門に入る。一門より王を見るときは、即ち是れ遍く千門萬戸に入るが如し。若し説く如く行ふこと能はざれば、即ち種種の文辭を以て、廣く爲に開示すと雖も益する所なし。故に第三の句に、次に名數を限略すれども、自ら廣を礙へざることを明す。是を以て經に云はく、「彼の阿闍梨亦當に大悲心を以て是の如くの誓願を立てて、無餘の衆生界を度せんが爲の故に、當に無量の衆生を攝受して、菩提の種子因縁を作すべし」と。謂はく、此の漫荼を造立することは、是れ見聞觸知あるに隨ひて、下舉手低頭の一念の隨喜に至るまで、皆必定して阿耨多羅三藐三菩提を成す。故に阿闍梨、機に差ひて誤り授けて、爲に③具支灌頂を作すことを得ずと雖も、然れども④繫珠毒鼓の縁、豈に當に已むべけんや。故に當に大悲心を運して務めて廣く治らしむべし。復次に人の家に秘寶あれば、盜賊の爲に闕はれんことを恐るるが故に、掩ふに弊衣を以てするが如く、今此の漫荼羅の法門も亦復是の如し。秘密の藏は直ちに宣説す可からざるを以ての故に、密意を廻轉して覆ふに有相の方便を以てす。今限るに十

人を以てすと言ふは、乃ち是れ世諦の漫荼羅なるのみ。然も阿闍梨自ら當に心地を平治して、大悲漫荼羅を書作すべし。普眼を以て人を度するに、多多なるは益善し。言の如く解くことを得ること勿れ。

國譯大毘盧遮那成佛經疏卷第四 終

國譯大毗盧遮那成佛經疏卷第五

沙門一行阿闍梨記

入漫茶羅具緣品の餘

偈に「持眞言行者」と云ふは、弟子の支分の中の護持建立の方便を明す。第六の夜に至りて、師及び弟子皆深浴清淨にして、新潔の衣を着し、供物を齎持して、さきに造る所の白檀漫茶羅の處に詣りて、當に法の如く、自身と道場と及び諸の弟子とを加持すべし。其の弟子を護る方便は、下の文の入灌頂の時に説く所の如し。時に阿闍梨、次第法則の如く具に供養を修して、白檀位の諸尊を觀じて、密印と相應して彼の眞言を持てよ。(一) 瞿醯に云はく、手を以て中胎の漫茶羅を案じて、眞言一遍を誦せよ。是の如く一たび誦じ一たび案じて、乃至七遍せよと。餘位も亦爾り。次に當に諸弟子の爲に隨順して法を説きて、其の心を開導すべし。彼れを教へて三たび自ら歸依し、先罪を懺悔せしむ。既に懺悔し已りぬれば、身心清淨なること猶ほ明珠の如くして、眞正の發心に堪能なり。是の故に次に菩提心を發さしむること、皆供養法の中に説く

(二) 瞿醯經 召請

(一) 三世無障礙智
 了達するに障礙なき
 戒所の智を三世無
 障礙智と云ふ、此
 の智を生ずべき戒
 なるが故に三世無
 障礙智戒と云ふ、
 即ち三昧耶戒な
 り。(二) 亂脫
 (三) 方便學處
 の方便學處品に説
 ける十善戒なり。
 亂脫

所の如し。次に當に塗香華等を授與し、教へて運心し諸尊を供養せしめ、然して後爲に(一) 三世無障礙智戒を受けしむべし。此の菩薩戒を受くる法は別に行儀あり。(二) 菩薩發心して(三) 方便學處を攝受する所以は、皆如來の清淨の智慧を成就して、一念の中に於て三世の諸法に了達するに、聖礙無からんが爲の故なり。(四) 其の斯の戒に住することあらん者は、乃至初めて心明道を見る時に、即ち是の如くの不思議の勢分あり。此の戒は親り能く佛慧を發生し、又二乗の律儀の限量あるに對するを以ての故に、三世無障礙智を以て名とす。

次に當に齒木シモクを授與して、諸弟子に之を嚼ましむべし。因りて即ち彼の人の成器及び非器の相を觀る。此の法を爲す所以は、亦是れ彼の俗諦に順ひて、因りて秘密の方便を用ひて加持を作すなり。印度國の人、凡そ僧を請じて食せしむるにもあれ、乃至世人相命すにもあれ、皆先づ其の齒木を遺る、種種の香華を以て嚴飾して之を授與す、當に知るべし、明日彼れを請じて飯食せしむと。是の如くする所以は、愛敬の心を明さんが爲なり。彼れ先づ痰癘宿食カンオンシユクジキの因縁ありて、若し我が供を受けば、或は發動して不安ならしめんことを恐るるが故に、先づ善意を以て將護して之を警發す、彼

（二）梨勒 印度
にある薬用の果實
なり。

（三）優曇鉢羅 木
の名の梵語、合歡
木なり云ふ。
（四）阿説他 木の
名の梵語、檀なり
云ひ、又白楊な
り云ふ。

れに先づ身器を淨め、（二）梨勒等を服せしむれば、明日意に隨ひて飲噉するに、犯觸する所無くして、身心安樂なり。今阿闍梨も亦爾り、弟子に楊枝を授くる時は、即ち當に此の方便に寄せて、爲に深法を説くべし。我れ方當に汝に佛性醍醐の極無過上味を授くべし、已に汝を教へて、菩提心を發し、三業の宿障を淨除し、三世無障礙智の調伏の牙を以て、諸の煩惱を噬ましむること竟りぬ。また此の秘密の加持を以て、身心の過患を滌除せんと欲す。汝又當に其の口過を淨むべし、所遊の方にありて妄に宣傳すること勿れ、明日當に汝に不死の甘露を貽りて、皆充足せしむべしと。彼れ當に（三）優曇鉢羅或は（四）阿説他木の瑞直端好なるを取りて、龜からず細からず、十二指量を劑るべし。凡そ一切の量法は、皆大指の上の節を用ひて、側めて相捻す、是れ其の正數なり。此の二木は是れ過去の佛の菩提樹なり。若し無くば當に乳ある木を求むべし、謂はく、桑穀等なり。木の上下の別を記して、皆枝の末を以て上とし、根柢を下とす。香水を以て灌洗し、又復塗りて之を薰せよ。其の下末に於て、白線を以て華を纏ひて、もつて莊嚴をなし、亦標誌を作せ、上下を知り易からしめんが故なり。當に手を以て案ひて、不動の眞言を以て之を加持すべし。或は百遍、或は千遍、あら

かじめ嚴備せしめよ。既に受戒し已りなば、師當に一の齒木を取りて諸尊に奉獻し、餘をば弟子に分ち授けて、壇の外に出でしめ、東に向ひ、或は北に向はしめて、法の如く蹲踞して之を嚼ましむ。嚼み已りて面せる所の方に向はしめて、正しく此を擲げて其の相を驗るべし若し。嚼める處外に向はば、是の人は悉地ならず、身に向はば悉地成就せん。若し遠く擲ぐるに却り來りて身に近づかば、是れ久しからずして成就する相なり。若し首直くたちて上に向はば、成就すること更に速なり。首下に向はば、是の人は當に修羅・龍宮に入るべし。若し擲ぐるに空中に在らば、此の人は先より已に成就せりと知るべし。又は北方東方に向ふをば上成就とし、西方をば中成就とし、南方をば下成就とす。是の如くなりとも雖も、若し人先より東に向ひて擲ぐるに、嚼める處東に向はば、即ち是れ身に背くなり、亦成就することを得ず。餘は此の方に准じて類して知る可し。餘は（三）瞿醯の中に説けるが如し。

次に當に金剛線コンゴウセンの法を作すべし。凡そ（三）縫を作らんには上好の細具の縷イトを擇ぶべし。香水を以て之を洗ひ、極めて清淨ならしめて、潔淨の童女をして右に之を合さしめよ。五色の縷を合さんには、當に五如來の眞言を用ひて、各一色を持すべし。然る

（三）瞿醯 召請
品。 金剛線なり。

後に成辨諸事の眞言を以て惣じて之を加持せよ、漫荼羅の纏を造ることも亦爾り。

五如來の色とは謂はく、大日佛を以ては白色を加持し、寶幢を以ては赤色を加持し、華開敷を以ては黄色を持し、無量壽を以ては綠色を持し、鼓音佛を以ては黒色を持す。阿闍梨先づ自ら纏を取りて三結にして、金剛の結を作し、用て左の臂に繋けて、自身を護持せよ。次に一一に諸の弟子のために臂に繋けしめよ。是の如く弟子を攝取するときは、則ち漫荼羅に入るに、是れ諸の障難を離るるなり。其の金剛結の法は縷説す可からず、當に阿闍梨に従ひて之を面受すべし。復次に五色の纏とは即ち是れ如來の五智なり、亦是れ信・進・念・定・慧の五法なり、此の五法を以て一切の教門を貫攝す、是の故に名けて修多羅とす、古譯には之を纏經と謂ふなり。若し見諦の阿闍梨ならば、能く如來の五智を以て、弟子の菩提心の中の五種の善根を加持し、萬行を貫攝して、瑜伽の臂に繋持して、生死を経歴すれども、常に失壞せざらしむ。若し能く是の如く弟子を攝取するをば、乃ち善く金剛結を作すと名く。

阿闍梨此の夜弟子の法を作さんと欲する時は、其の供養する所をば、當に七夜の半を減すべし。又當に彼の情機を觀じて密教を讃揚し、樂欲を發生せしめ、其の心を堅

一を以て八自在の身を示す。一に一切の法を了知する。一に一切の業を離脱する。一に一切の煩惱を断ずる。一に一切の生死を超越する。一に一切の境界を超越する。一に一切の諸佛を親近する。一に一切の菩薩を護持する。一に一切の衆生を救済する。一に一切の虚空に遊歩する。一に一切の如來の如し。

固ならしむべし。二并に爲に十種の方便學處を分別す。然れども此の三世無礙智戒は、凡て結縁の者にも、皆豫め其の四種の根本と及び、三昧耶とを聞かしめよ、又一偈をば當に耳語して之を戒むべし、具支灌頂の者のみ乃ち聞くべきのみ。其の教誡する所の二偈も亦是れ阿梨沙なり、能く具さに梵本を誦せば益善し、之を左に列ぬ。

阿闍梨也。今也。廣流磨也。鼻囉視選。無對又。遷婆利。臆駄也。摩訶怛磨鼻也。曳囊也。薩婆也。爾奈也。喻延也。娑補怛囉。并に。善囉訶也。救娑泥也。薩囉梅也。跋囉蟻哩。係修薩他也。開耶磨。囊也。麼。也。捺耶也。帝曇喻延也。摩訶夜泥也。涅附若哆。醯明晨也。婆尾屍也。他得也。

偈の意は云はく、汝今より以去、便ち已に無等の利を獲て、位大我に同じと。大我とは諸の如來の八自在の我を成就して、法に於て自在なる者と、及び諸の摩訶薩埵とを謂ふ。次に一切の諸の如來、并に此の教の中の摩訶薩衆、一切皆已に汝を攝取すと。此の教とは此の大乗秘教の中の、十佛刹土の金剛菩薩等を謂ふ。次に大事を成辨すと云ふは、即ち是れ能く大事を成す、大事の因縁を成辨するは、謂はゆる如來の知見を開示悟入するなり、故に經の中に會意して之を言ふなり。次に汝等明日大乗生を得んと云へるは、大悲漫荼羅に入りて、灌頂を得已りて、一切如來の種姓の中に生ずる

を謂ふ。復次に縁業生を離れて、大空生を得るが故に大乘生と云ふ。

時に阿闍梨是の如く教誡し印持し竟りて、還た次第に漫茶羅の外に於て、東に向ひて坐せしめよ。阿闍梨また當に供養すべし、至誠の心を以て諸尊迎請して言さく、我れ明日に於て弟子を哀愍し、諸の聖尊を供養したてまつらんが爲の故に、大悲胎藏漫茶羅を建立し、力に隨ひて供養すべし、唯だ願はくは、慈悲を以て憶念して、當に明日に於て悉く皆漫茶羅に降集して、加持を作したまふべしと。大意此の如し、餘は(一)瞿醯の中に説けるが如し。彼れ至誠に三請し已りて、金剛の句偈を宣説して諸尊を稱歎し、然して後に如法に發遣せよ。

復弟子の爲に廣く法要を説きて、教へて繫念し思惟せしめよ。吉祥草を籍きて、面を西に向ひて寐ねしめよ。彼れ夢の中に於て、若し種種の境界を獲ば、晨に起きて皆當に師に白すべし、則ち行人の悉地の成不の相を知る。若し是れ見諦の阿闍梨ならば、自ら當に深瑜伽に住して、明かに弟子の本末の根縁を見て、錯謬あることなかるべし、設ひ是の如くの事相を作さず、及び世諦に隨順して之を行ふとも、一切咎なし。若し未見諦の師ならば、則ち當に謹みて法則に依りて、虧失せしむること勿るべし。

(一)瞿醯經 簡擇弟子品

經に云はく、「夢中に僧住處を見る」とは、謂はく、見る所清淨微妙にして種種に嚴飾せるに、身其の中に入りて禮跪し旋遠して、諸の慶善の事に遇ふなり。園林とは謂はく、見る所滋榮殊特にして、華果繁く盛なるに、或は親しく自ら採り掇ひ、或は樹の杪に昇り踐み、空を履みて行くなり。堂宇とは謂はく、種種の華房綺疏殊異にして嚴好なるに、中に於て自在に受用し、身心適悅するなり。樓觀とは謂はく、層臺顯敞にして、遠く四方を觀るに、種種の勝境を見て、神情熙暢するなり。凡そ是の如くの地は皆吉祥とす。是の中の法門の表す所も、亦擇地の中の説の如し。若し此れと相違して、塔寺の焚摧し荒穢せる類を見るが如きは、即ち善夢に非ず。幢とは謂はく、旗幟の寶幢ハウドウ崇高端麗にして、其の前に現れ、或は用て衆人を導導するに、命に従はざることなし。是れ大菩提心を建立し、萬行を軌成する像なり。蓋とは謂はく、孔雀の尾等の五色間錯せる、或は空中に在りて其の上に蔭ひ、或は人之を授與するを執りて以て遊行するは是れ悲願普く覆ふ像なり。摩尼珠とは謂はく、圓明照徹し、或は能く衆物を出生して衆人に給施す、此れは是れ淨心覺寶の四攝利他の像なり。刀とは謂はく、瑩飾鑿徹精剛銳利なるを、或は人授與し、或は自ら執持す、是れ慧性成就の像なり。

悦意華とは謂はく、種種の水陸に生ずる華なり、其の性類に随ひて上中下あり、色は鮮白なるを以て上とし、味は甘醇なるを以て上とするが如きは、皆善萌開發の兆なり、當に意を以て之を分別すべし。女人とは是れ三味の像なり。男子とは是れ智慧の像なり。亦端正威徳にして、人に敬愛せらるゝ類を取る。密親とは謂はく、父母等なり。善友とは謂はく、傳法の上人善知識等なり。或は牝牛群牧の乳味豊盈し、或は人之を構り、或は自ら飲み吮るを見る、皆是れ大悲漫荼羅の醍醐上味の像なり。或は經夾の淨白無垢にして、整齊にして嚴飾し、字色分明にして、種種の殊勝の事を記説すと見ば、則ち善相とす。若し卷快垢壞し、字義殘缺せる類は、當に不善なりと知るべし。或は諸佛親しく爲に摩頂し、現前に記蒞し、微妙の音を以て之を慰諭したまふを見、或は聲聞・辟支佛等、乃至虚空の中に住して、無量の神變を示現すと見ん。皆當に事に随ひて甄擇して、其の所爲の因縁を識るべし。諸果とは謂はく、世に希有なる所の珍奇の妙果なり。或は人ありて授與し、或は空より下る等は皆悉地の像なり。或は河池大海を渡り、乃至自ら夢に之を飲みて、須臾に皆盡くるを吉祥とす。若し漂流溼溺して拯援する所無き類は、當に不善なりと知るべし。或は空中に種種の好聲ありて、法

音を歌詠し、諸の伎樂を奏するを聞き、或は三寶の功德を稱揚して、心に聞かんと樂ふ所なる、或は吉祥なりと言ひ、或はまさに汝に意樂の果を與ふべしと言ふ、是の如き等は皆善夢とす。當に上中下の類を以て之を分別すべし。寺宇等の如きは、即ち地に依り空に在るの別あり、其の見る所の人にも、亦男女聖凡の異あり、是の故に經に「宜應諦分別之」と云へり。若し如前の善相と相違して、或は夢に其の身狂象等のために逐はれて恐怖危急し、或は駝驢に乗り、或は可惡弊惡の人の服飾弊壞なるを見、或は自ら身青泥糞穢の中に轉び臥すと見、或は諸の不淨空よりして墮つと見るは、皆是れ相違の相なり。若し是れ深行の阿闍梨ならば、自ら當に瑜伽の中に於て、悉く夢みし所の事、及び所爲の因縁を知るべし。弟子晨に起きて師に白さん時に、當に機に随ひて勸發して、爲に彼の疑網を斷つべし。若し彼の人成辨の理あること無しと觀ば、則ち具足の傳法は之を與ふべからず。彼れ久しくして功效なく、或は疑謗を生せんことを恐るゝが故なり。或は瞿醜に説ける所の如く、爲めに寂災の護摩を作して、諸障を離るゝことを得て、然して後に召入せよ、若し種種の殊勝の境界を見ば、法言を以て慰諭して、歡喜を得しむべし。

りたまへり、思量分別の能く及ぶ所に非ず、故に甚深奥と云ふ。世智不能了とは言はく、此の心性は一切世間の聰慧利根の者も能く思議する所に非ず、假令長爪梵志等の諸天論師、種種の因縁譬喩を以て莊嚴して、比況し量度すとも、終に自ら其の境界に非ず。苦ろねんそに思惟し求むるとも、徒らに狂を發さしめん。獨り信力堅固の者のみありて、此の秘密の方便に依りて乃ち能く之に入るのみ。「無含藏」とは、云ふ所の難可了知の者は、正しく是の如くの無含藏の處に在り。實の如く蘊の阿頼耶の本不生を知るを以ての故に、執受する所もなく、亦含藏もなし。その時に一切の心意識の妄想戲論皆悉く清淨にして、法界圓照なること、秋の月の空に在るが如し、故に次の句に「離一切妄想」と云ふなり。梵本には離一切戲論妄想と云へり、今偈の中には語略なるを以て、又意義異なることなきが故に具さに存せず。次の句に「戲論本無故」と云ふは、若し具さに梵本を存せば、以論無戲論故と言ふべし。一切の戲論は皆悉く衆縁より生じて自性あることなきを緣て、自性なきが故に即ち是れ本來不生なり。是れは前の句を釋するを以て、即ち此の戲論は自ら戲論なしと云ふ。今は會意を以て之を言ふが故に本無と曰ふ。次に二句あり、此の淨菩提心の究竟の方便を明す。一切の妄業を出過

するを以て、即ち能く如來の智業を成就す、普門の導利大事の因縁に非ざること無し。是の故に一切の所作みな倫匹なし、故に一切業無比と云ふなり。次に前の句を轉釋して、權實の大綱を統論す、故に「常依於二諦」と云ふ、即ち是れ論に諸佛の說法は常に二諦に依ると云ふなり。然れども此の經宗は、種種の具支の方便を作すこと皆世諦に隨ふ。此の因縁に由りて一切智智の印を得るは、即ち是れ眞諦なり。是の故に世諦を因とし、眞諦を果とす、因は四味の如く、皆悉く無常なり、果は醍醐の如く、是れ則ち常とす。然も十緣生句を以て之を觀するに、世諦の實相即ち是れ第一義諦なり、是の故に權實相即して俱に不可思議なり。此の二句は文簡略なりと雖も、能く行者をして一切如來の方便に於て、また餘の疑なからしむ、故に當に類に觸れて長く一部の文義を貫通せしむべきのみ。已に略して大菩提の道を開示し竟りぬ。又結勸印持するが故に、「是乘殊勝願汝當住斯道」と云ふ、亦是れ重ねて授記の意を明すなり。

「その時に住無戲論執金剛、佛に白して言さく、願はくは三世無礙智戒を説きたまへ、若し菩薩此に住すれば、諸佛菩薩を皆歡喜せしむるが故に」とは、上の文にはただ三世無障礙戒を受くとのみ説きて、未だ其の相を顯さず、是の故に住無戲論金剛、

名く。今行者、身口の業は自ら別体なし、末を統べて本に歸すればただ是れ一心なり、而も此の心の實相は常に是れ平等の法界なりと觀る。是の故に此の戒に住する時に、種種の身口意業皆同じく一相にして、無量の見網皆悉く淨除す、是の故に住無戲論金剛印と名くることを得。

經に「不作一切諸法」と云ふは、種種の五陰は煩惱に依る、煩惱は業に依る、是の種種の業は皆身口意に由りて生ず。身口意に約して、分ちて十種の善惡業道とするが如きは、其の條緒を究むれば則ち無量無邊なり。是の故に三業に凡て修行する所あるは、則ち進趣の行あり。進趣を失ふ者は則ち倒想をなす、倒想に由るが故に無量の相生することあり、此の諸相の爲に礙へられて、佛の無礙智を得ず。今行者深く十緣生句を觀じて、三業は畢竟不生なり、法性自爾にして常に動作なしと了知する、是れを無爲戒に住すと名く。是の如くの淨戒も尙ほ如來の所作に非ず、況や斯の戒に住して諸法を造作せんや。

經に云はく、「云何が戒とする、謂はゆる觀察して自身を捨てて、諸佛菩薩に奉獻す、何を以ての故に、若し自身を捨つるときは、則ち彼の三事を捨つとす、何等をか三と

する、謂はく身語意なり」とは、次に無作戒を持つに慧の方便を具足することを明すなり。行者、身の實際の中に身不可得なり。即ち是れ如來の解脱なりと觀す。是の故に罄く此の身を捨てて、用て一切如來に施したてまつる。此れより以後の動止施爲に凡て有らゆる所作は、皆如來の解脱の爲にして、己身の爲に非ざるなり。種種の熾然の萬行を以て佛土を莊嚴し、衆生を成熟すと雖も、法性自爾なり、造作する所に非ず。其れ能く是の如く奉修する者、是れを無邊の福聚と名け、是れを無盡の福河と名く。涓滴の善根を造るに隨ひて、法界海の中に投ずるを以ての故に、乃至衆生界を極むるまで亦窮渴なし。阿闍梨言はく、梵本の論の中に、ある偈に云はく、若し解脱の人ありて、此の解脱の法を持ち、解脱の者に供養すれば、此の福最も勝れたりすと。若し眞言行人、是の如くの淨戒を曉さざれば、則ち口に眞言を誦じ、身に密印を持し、心は本尊の三昧に住して、具さに次第の儀式を修し、諸尊を供養し奉ると雖も、猶ほ諸法を造作すと名く。未だ我人の網を離れず、云何が菩提薩埵と名くることを得んや。故に經の次に云はく、「是の故に族姓の子、身語意の戒を受くるを以て、菩薩と名くることを得、所以は何となれば、彼の身語意を離るるが故に、菩薩摩訶薩應に是の如く

第五篇戒を
類別するに五篇あり、
一に波羅夷、二に僧伽婆尸沙、三に提舍尼、五に突吉羅、
悪作と譯す、突吉羅を
第五篇と此の惡作なり。
此の惡作は此の惡作なり。
此の惡作は此の惡作なり。
此の惡作は此の惡作なり。

學ぶべし」と。此の中に應學とは、舊譯には名けて式叉迦羅尼とす。猶ほ第五篇の戒に惣じて毗尼毘度の威儀行法を攝するが如く、大乘の學者も亦是の如し。當に此の戒の方便を持して、普く一切の眞言行の中に入るべし。苟くも戒虧くることありて、而も菩薩の行を成すことを得といはば、是の處あることなし。

經に云はく、「次に明日に於て、金剛薩埵を以て自身を加持して、世尊毗盧遮那の爲に禮を作せ」とは、即ち是れ受戒の明日なり。謂はく、第七日の暮なり。漫茶羅の諸の作務を作造せん時は、皆當に金剛薩埵を用ひて自身を加持すべし、謂はく、自身は即ち是れ執金剛なりと觀するなり。是の中の方便は下の品の經文、及び供養次第の中に説けるが如し。若し見諦の阿闍梨ならば、則ち是れ金剛薩埵の心に住するなり、謂はゆる無等々の菩提心なり。此の秘密加持を以ての故に、有らゆる所作能く之を沮壞する者なし。次に當に前の如く運心して、大日如來の爲に禮を作すべし。然して後に降三世の眞言を持誦して淨瓶を加持す、此れも亦是れ成辦諸事の眞言なり。二先づ當に如法の淨瓶を取りて、清潔の水を汲み、如法に灌漑して、中に五寶・五穀を置くべし。又種種の香木衆妙の華菓枝を取りて、中に挿して種種に莊嚴して、鮮淨の

一三 亂脫

二

四六 亂脫

四七

蘇悉地經 奉

帛綵を用て頸に繫け、皆供養次第に依りて辟除去垢すべし、淨むるに法界心の字を以てして、然して後に加持するなり。大凡そ眞言の遍數は定限あることなし、字を以て之を計るべし、蘇悉地の中に説けるが如し。又彼の中には三部の漫茶羅を作すに隨ひて、各部心或は部母の眞言を用ひて加持す。今此の經の中には通じて辦事の眞言を用ひて加持す。其の眞言は又廣略を兼ぬるが故に、具さに遍數を論せず、當に意を以て之を裁るべし。若し極大ならば、誦すること百遍に至るべし、次ならば五百遍、小ならば千遍に至らしむべし。既に加持し竟りなば、當に白檀を以て、先に規畫せし所の壇門の外に置くべし。漫茶羅に入らんと欲せん者に、當に先づ此れを以て灑ぎて、彼をして宿障を淨除し、方に漫茶羅を見ることを得しむべし。又別器に於て香水を調和せんには、鬱金・龍腦・旃檀・等の種種の妙香を以てし、亦眞言を以て加持し、授與して少しばかりを飲ましめよ。此れを金剛水と名く。秘密の加持を以ての故に、乃至地獄の重障をも皆悉く除滅して、内外俱に淨くして法器となるに堪へたり。阿闍梨言はく、此れをば即ち誓水と名く、亦世諦に順へば猶ほ明誓の法の如し。一切衆聖の前に於て此の香水を敵らしめ、自ら其の心を誓ひて、要す大菩提の願を退かざ

らしむるなりと。復次に無礙の戒香を以て、^嚙字門の清白の心水に和合す。あらゆる之を飲觸する者は、皆必定して無上菩提を成す。此の如く其の心を清淨にするときは、即ち秘密の漫茶羅に入るに堪へたり。

「爾の時に執金剛秘密主、偈を以て佛に問ひたてまつる」と云ふより以下は、漫茶羅を造立する支分を明す。偈の中に先づ佛を讚歎す。唯だ願はくは一切智、諸の説法の中の最第一の者、彼の時分を説きたまへと云ふなり。此の時分とは即ち是れ初めて漫茶羅を書くより、事の竟るに迄^{いた}るまでの時分の限劑なり。次に大衆は何れの時に於てか、普く集りて靈瑞を現すと云ふは、謂はく、大悲胎藏の中の一切普門の隨類の身は、何れの時に於てか、普く道場を集りて現前し、神力を以て加持して威験を示現したまふと云ふなり。若し弟子諸根淨利に、應度の機深慧にして、或は此の時に於て、即ち^{まのあた}親り無邊の聖衆を親見すること、靈山會に坐せし者の、同じく三變淨土の分身の諸佛を見しが如く、異なることなし。當に知るべし、その時即ち是れ漫茶羅の阿闍梨の、誠諦の語を傳持し、如來の事を行ふ時なりと。故に「懺懃持真言」と云ふなり。此の偈を説き已りて、「その時に世尊、持金剛慧者に告げて言はく、常に當に此の夜に於

(一) 曼荼羅經 摩訶
漫茶羅品。

(二) 下の文 轉字
輪曼茶羅行品を指
す。

て漫茶羅を作すべし」とは、謂はく、此の第七夜の中に於て、法事をば都て畢へしむるなり。是の中には日没より後、明相の出づるに至るまでを、總じて名けて夜とす。初めて夜分に入らば、即ち當に諸位を圖書し、諸の供養の具を安置すべし。明相未だ出でざる以前に發遣せしめ竟れ。若し此の法に違はば障礙を生じ、乃至所依の住處をも亦吉祥ならざらしむ。然も深秘密の釋の中には、正しく道機の嘉會するを以て時とす。或は加持の方便を以て百劫を促めて一夜とし、或は一夜を演べて百劫とす、脩短は縁にあり、定限あることなし。若し淺行の阿闍梨ならば、則ち須^{すべから}く具^{つぎ}さに法則に依るべし。晝日の分に於て即ち當に界域を規畫して、白檀等を以て諸尊の形位の分段を草定し、日の將に夕ならんとするに至らば、豫め香・華・燈・燭等を備へて皆素辦せしむべし。(二) 瞿醯に云はく、漫茶羅の北面の一處に於て白色を以て規畫して、辦事の真言を以て諸難を辟除して、諸の供具を置くべしと。阿闍梨言はく、若し一夜の中に於て遍く諸尊を書く能はずば、第五日の受持地より以後、漸次に之を作せ、理に於て妨なし。又別に尊形印字の三種の方便あり、(三) 下の文に説く所の如し。

經に「傳法阿闍梨」と云ふは、已に時分を知りぬ、即ち造立の軌儀を明すなり。日

入の時に至りて阿闍梨及び助伴の弟子、各法の如く澡浴し已りて、新淨の衣を着し、大悲心を興し、供物を賣持して、漫荼羅の所に往詣して、先づ一に具法を以て加持すべし。供養次第の中に説くが如し。次に當に法の如く自身を護持して、所度の弟子を呼びて、彼れのために作護して、灑ぐに香水を以てして、皆一處に次第に坐せしむべし。然して後に阿闍梨は道場の門前に至りて、遍く運心して、十方一切の諸佛を稽首し頂禮し奉る、亦上に説けるが如し。然る後に五色の線を持ちて、漫荼羅の位に向ひて、立ちて之を頂戴せよ。次に自身を觀じて毗盧遮那と作せ、經に謂はゆる、大毗盧遮那を以て自ら加事を作すなり、然る所以は大日如來は是れ此の大悲胎藏の阿闍梨なるを以てなり。是の故に行者若し阿闍梨の事を行ふ時は、即ち自身を以て毗盧遮那と作すべし、若し緣漫荼羅の諸の作務を作さん時は、即ち自身を以て金剛薩埵と作せ、其の加持方便は(二)下の文及び供養法の中に説くが如し。

復次に行者まことに護方の八位を知るべし、凡そ造作する所の漫荼羅は、此れに隨ひて轉せよ。東方の(三)因陀羅より次第に隨ひて轉至せよ、南方は(四)餓摩羅、西方は(五)嚩囉拏、北方は(六)毗沙門、東北は(七)伊舍尼、東南は(八)護摩とす、西南は(九)涅哩底、西北を

(一) 下の文 轉字
 (二) 輪漫荼羅行品
 (三) 因陀羅 Ind.
 (四) 帝釋天なり。
 (五) 餓摩羅 Vama.
 (六) 嚩囉拏 Vāru.
 (七) 水天なり。
 (八) 伊舍尼 Iśā.
 (九) 自在天なり。
 (十) 護摩 Homa
 (十一) 涅哩底 Nir.
 (十二) 羅刹天なり。

(一) 嚩哩 嚩哩
 風天なり。 Vāru

(二) 嚩哩とす、其の上方の諸尊は多く帝釋の右に依る、下方の諸尊は多く龍尊の右に依る。上とは空居を謂ひ、下とは地居を謂ふなり。又中胎藏を環れる三重の界域は、皆已に豫め標誌をなして、方隅を均等ならしめて、圖位を素定せよ、要す大日の位を五種の寶聚の心に當てしめよ。此の衆相を圖する時に至りては、阿闍梨先づ因陀羅の方に至りて法の如く禮を作せ。次に火方に住して北に向ひて立ち、助伴の弟子は伊舍尼に在りて、修多羅を對持して外界を準定せよ。弟子次に當に右に遠りて涅哩底に至る、師は亦右に廻らし西に向ひて之を對持せよ。阿闍梨次にまた右に遠りて嚩哩の方に至る、弟子亦右に廻らして北に向ひて之を對持せよ。弟子また右に遠りて伊舍尼に至り師亦右に廻らして東に向ひて之を對持せよ。凡そ一周し竟るまでは皆臍に當て、虚空の中に在きて均等平正ならしめよ。第二周に至りても亦前の如く右に轉じて次第に之に耕ちて以て界道となせ。次にまた四維を準定せよ。阿闍梨また當に右に遠りて涅哩底に至る、弟子先より伊舍尼に在り、右に廻らして相向ひて之を持せよ。弟子次にまた右に遠りて嚩哩の方に至る、師即ち右に轉じて護摩の方に至る、弟子亦右に廻らし相向ひて之を持せよ。皆臍に當てて空中に在きて其の位を準定せしめよ。弟子次に

また右に遠りて涅槃底に至れ、師即ち右に轉じて伊舍尼に至りて相對し之れに^{すみ}耕ちて、弟子次にまた右に遠りて護摩の方に至れ、師即ち右に轉じて轉度の方に至りて亦相對して之に^{のたま}耕て。阿闍梨言はく、其の正四方の十字の界道は經に言はずと雖も、理として必ず之あるべし、亦須らく右に旋りて相對して^{すべ}耕ち定むべしと。是の如く已に外界と及び八方の相とを定むること竟りて、次に當に中に入りて先づ中胎の外界を定むべし、亦前の如く旋轉して^{のたま}耕ちて四方の相を作せ、其の八方の相は已に定む、更にま作さたず。次に第一重の外界を定め、次に第二重の外界を定むること亦中胎の法則に同じ、其の廣狹の量は皆當に展轉して相半なるべし。もし中胎藏は縱廣八尺ならば第一重は當に廣さ四尺にすべし、第二重は當に廣さ二尺にすべし、第三重は當に廣さ一尺にすべし。阿闍梨言はく、本法は此の如し、若し大小の相懸^{あひはる}ならんことを恐るれば、稍意を以て之を均調するに理に於て失なしと。是の如く分ち竟りて、また一一の重に於て更に分ちて三分とせよ、其の最も裏に向へる一分は是れ行來の周道なり、故に佛子所行道と云ふ、次の一分は是れ諸の供養物を安置する處なり、次の外の一分は是れ諸尊を安置する座位なり、故に此の二分は皆是れ聖天の位處なり。次に此の外に於て

また周匝の界縁を作せ、此の虚空位の中に於て、當に運心し觀察して、其の方面分位に隨ひて、相應の諸尊をば皆都て請じて供養すべし。爾る所以は阿闍梨事に臨みて妄誤する所ありて、諸尊を安置するに或は周悉せざんらが爲なり、其のまさに請召すべきに而も位次なき者をば、皆當に運心して此の中に於て供養すべし。此の三分の位を分つ法は先づ第一重の裏に於て、隨ひて少分を取りて用て界縁を作せ、其の闊狹の量は當に意を以て之を裁りて、趣に^{つぎ}稍く座位を通ずることを得べし。此の界縁の内に於て三分を作して、均しく之を分つべし、當に先づ諸尊の座位の内の界分を定め了りて、次に行道と供養との中間の界分を定むべし。是の如く第一重竟りて、次に第二重に於ても亦外より裏に向ひて漸次に之を分て。次に第三重を分つことも亦是の如し。上の文に説ける所の、大日如來の臍より以下の光明は、是は此れ第三重の位なり、臍より以上咽に至るまでに出す所の光明をば第二重の位とす、咽より以上乃し頂相に至るまでの光をば、第一重の位とす、其の中胎藏は即ち是れ毗盧遮那の自心の八葉の華なり。共に漫荼羅を建立する所の金剛の弟子は、須らく善く眞言の法要に通達し、師に亞ぎ近づきて、則ち能く更相に^{たがひ}佐助して遺失する所無かるべし。若し是の如くの人を得ざ

るときは、但し已に會て法の如く灌頂せし者を取りて、事に臨みて指授して之を行はしめよ。又此の人なくば當に楸を置きて之を爲すべし、先づ火方の師位に於て楸を下せ、次に伊舍尼の方に亦之を置きて線を引け、即ち師先づ火方の楸は此は是れ師位なりと心に記せよ、然して後に伊舍尼より線を引きて涅槃底に至れ、餘は此に准じて之を行ひて知る可し。阿闍梨又云はく、共に線を引かんと欲せば、要す須らく灌頂せんと欲する所の弟子を取るべきのみ、先づ加持香水を以て之に灑ぎて與に事を行へ、書ける所の壇位等をば且く物を以て之を覆ひて見しむること勿れと。

「方に等しく四門あり」とは謂はく、重重の院に皆四門を設けて、中を正しく均等ならしむるなり。西向の一門を開きて以て出入を通じ、餘門は線を以て界し、横に之を斷て。(二) 罽離に云はく、凡そ諸方に門を開くこと、皆彼の方隅の廣狭に隨ひて、准じて九分となして、中の一分を取りて門とせよ、其餘の八分は則ち門の左右に於て各四分を得べし。出入する所の門は稍闊く作らしめよ、自餘の諸門は白色の末を以て畫を作して之を閉づべしと。阿闍梨言はく、金剛線を用て界を作して横に斷ち竟れ、猶ほ金剛の如し、之を越ゆ可からず、越えん者は三昧耶を犯すと。又經の文に通門は西

(二) 罽離經 摩訶漫荼羅品。

向と云へれども、若し因縁あらば餘方に向ひて之を開くとも理に於て咎なし。餘は下の文に説く所の如し。「誠心を以て愍重に衆聖尊を述布せよ」とは謂はく、圖畫せん時は先づ瑜伽に住して、此の漫荼羅の大衆會の一の形・色・相貌・威儀・性類・座位・諸印を觀じて、皆悉く現前し、具足し明了にして、然して後に無量の愍懃恭敬の心を以て之を彩畫し、乃至大小疏密の度も亦均しく相稱はしむるなり、故に「是の如く衆相を造らんに均調して善く分別せよ」と云へるなり。

「内心妙白蓮」とは、是れ衆生の本心の妙法(一) 芬陀利華秘密の幟幟なり。華臺の八葉は圓滿均等にして、正しく開敷せる形の如し、此の蓮華臺は是れ實相自然の智慧なり、蓮華葉は是れ大慈方便なり、正しく此の藏を以て大悲胎藏漫荼羅の體とす、其餘の三重は是れ此の自證の功德より流出せる諸の善知識入法界の門なるのみ。正方の四葉は是れ如來の四智なり、隅角の四葉は是れ如來の四行なり、此れに約して現れて八種の善知識となる、各金剛慧印を持つ、故に遍出諸葉間と云ふ。是の如くの十六の法は一一に皆法界に等し、乃至少分も平等ならざる處あることなし。故に其の標相も亦興に冥符せり。如來の萬德を略攝して以て十六指となす、申べて之を長さば則ち

(一) 芬陀利 梵語なり、白蓮の義。

(二) 三、五、亂脱なり。

(一) 下の品 秘密
(二) 八印の品 秘密
(三) 三角の形 大
の形なり、道心な
を却くこと、火の
能く物を焼く如
し、故に三角を以
て初發菩提心を表
す。
(四) 毗盧遮那佛
母 佛眼尊なり、
大日は佛部の源な
るが故に、佛眼を
能く生ずるに非ず
佛眼は主たる故に
佛母と云ふなり。

無量無邊なり、故に此の漫荼羅の極少量は十六指にかざる、大にするときは則ち無限なり。鬚髮は是れ一切の三昧門・陀羅尼門・六度・十八空・等なり、大般若に説ける所の如し。此の一一鬚髮より、加持神力を以ての故に、三重漫荼羅の中の一種の莊嚴眷屬を現出す。此れは是れ如來秘傳の法なり、翰墨に形す可からざるが故に、圖像に寄在して以て行人に示す、若し深意を得ん者は自ら當に黙して之を識るべきのみ。此の實相華臺の中より則ち大日如來の加持の相を表す、其の義は已に前に釋せるが如し、其の所餘の秘密八印は(一)下の品と及び圖とに之を説く。

次に東方の内院に於て大日如來の上に當りて一切遍知の印を畫作せよ、(一)三角の形に作り、其の鋭を下に向けて純白色にして光焰を以て之を圍み、白蓮華の上に在け。即ち是れ十方三世の一切如來の大勤勇の印なり、亦是諸佛心印と名く。三角は是れ降伏除障の義なり、謂はく、佛道樹に坐せし時、威猛の大勢を以て四魔を降伏して正覺を成すことを得たまへり、鮮白は是れ大慈悲の色なり、如來の師子奮迅の大精進力は正しく是の事の因縁の爲なり、乃至大悲の光を放ちて常に法界に遍し、故に普周遍と云ふなり。次に大勤勇の北に於て北の維に至りて虚空眼を置け、即ち是れ(二)毗盧遮那

(一) 般若經 大品
大般若經第十六卷、
六七八卷。

亂脫 (二) 九八頁
三行の第
八より却
來
(一) 三障 報障業
障煩惱障なり、逆
に惑業苦の三道に
あたる。
(二) 阿字門等 阿
字を三部の種子と
するなり。

佛の母なり、佛母の義は(一)般若經の佛母品の中に廣く説けるが如し。眞金は是れ如如實相の體なり、畢竟淨の句は是れ彼の教門の外飾なり、故に「縞素を以て衣と爲す」と曰ふ。一切の戲論滅する時は心日の光明照さざる所なし、故に「遍く照すこと猶は日光の如し」と曰ふ、恬怕一心なる人、乃ち能く此れを見る、故に其の幪幪は猶ほし天女の正受に住せる像の如し。次にまた大勤勇の南に於て、南の維に至りて、一切諸佛菩薩の眞陀摩尼の印を作せ、此れは是れ淨菩提心の無邊の行願の集り成れる所なり、常に能く普く世出世間の一切の財寶を雨らす、諸の救世者は皆性淨蓮華臺の中より是の如くの寶を現したまふ、故に「白蓮の上に住す」と云ふ。阿闍梨言はく、此れは是れ一切に通ずる印なり、亦諸の方面に於て皆之を置く可し、若し諸佛菩薩の經の中に、所持の印相を言はざる者は、亦此の無價の寶珠を執らしむること皆得と。大凡此の第一重の上方は是れ佛身の衆德莊嚴なり、下方は是れ佛の持明使者なり、皆如來部門と名く、右方は是れ如來の大悲三昧なり、能く萬善を滋榮するが故に蓮華部と名く、左方は是れ如來の大慧の力用なり、能く(一)三障を摧破するが故に金剛部と名く。是の故に(二)阿字門に入れば一切の諸法不生なり、是れ法身の義なり。娑字門に入れば一切

の諸法無染着なり、是れ蓮華の義なり。轉字門に入れば一切の諸法離言説なり、是れ金剛の義なり。下の字輪品の中に、此の三字を以て百明を統攝するが如きは、意此にあり。

二九〇

三 普門方便智
機に隨ひて應現し
其の方便無邊なる
用なり。普門方便智の

經に「大日の右方に大精進觀自在者を置き」と云ふは、即ち是れ蓮華部の主なり、謂はく如來は究竟して十緣生句を觀察して、此の普眼の蓮華を成すことを得るが故に觀自在と名く。如來の行に約するが故に菩薩と名く、頂に無量壽を現せることは、此の行の極果は即ち是れ如來の(三)普門の方便智なることを明す。此の像及び菩薩身は皆現法樂に住して熙悅微笑する容に作すべし。觀自在の身色は淨月の如し、或は商佉の如し、即ち是れ上妙の螺貝なり、或は軍那華の如し、其の華は西方に出たり、亦甚だ鮮白なり、當に此の三の譬を惣すべて、其の光鮮かに潤徹にして、白の中の上なりと言ふべし。

次に觀音の右邊に於て多羅菩薩を書け、凡そ諸の聖者は皆面を大日に向はしむ、今觀音の右邊と言ふは即ち是れ座の西なり、他も皆此れに倣へ。此れは是れ觀自在の三昧なるが故に女人の像に作せ、多羅は是れ眼の義なり、青蓮華は是れ淨無垢の義なり。

是の如くの普眼を以て群生を攝受すること既に光時にあらず、亦後時にあらず、故に中年の女人の狀に作れ、太だ老いず、太だ少からず。青は是れ降伏の色、白は是れ大悲の色なり、其れ妙にして二用の中に在るが故に二色を和合せしむ、是の義を以ての故に青ならず白ならず。其の像は合掌して掌中に此の青蓮を持てり、手面皆觀音に向へよ、微笑の形の如し、通身に圓光あり、淨金色の如し、被服は白衣にして、首に髮髻あり、天髻の形に作れ、大日の髮冠には同じからず。

觀音の左邊には聖者毗俱胝を置き、其の身は四手あり、右邊の一手は數珠鬘を垂れ、一手は施願の印を作し、左邊の一手は蓮華を持ち、一手は軍持を執る。面に三目あり、摩醯首羅の像の如し。首に髮冠を戴く、毗盧遮那の髮髻冠の形の如し。云ふ所の持とは地の萬物を持すと言ふが如し、即ち是れ載承の義なり。其の身潔白にして圓光之を圍めり、光の中に具に黃赤白の三色あり、純白純赤純黃ならざるが故に無主と云ふ。凡そ黄をば増益の色とす、白は寂災の色、赤は降伏の色なり、此の三昧の光の中に兼ねて三力を具するを以て、是の故に用て幪幪とす。

次に毗俱胝の左邊に近く得大勢尊を書け、世の國王大臣の威勢自在なるを大勢と名

くるが如く、此の聖者は是の如くの大悲す位の位に至り得たるを以ての故に以て名とす。未敷蓮を持つ所以は毗盧遮那寶智の華臺に既に果を成し已りて、また是の如くの種子を持ちて、普く一切衆生の心水の中に散して、更に未敷蓮華を生ずるが如く、此の尊の迹も是の處に同じ、亦能く普く一切衆生の潜萌の善を護りて、敗傷せずして念念に増長せしむ、即ち是れ蓮華部の持明王なり。

次に明王の左邊に明妃耶輸陀羅を書け、譯して持名種者と云ふ。身は眞金色なり、諸の瓔珞を以て莊嚴して極めて端嚴ならしむ、天女の像の如し。右の手に鮮白の妙華の枝を持つ、果葉相間りて長さ條茂りて好し、其の華或は初めて疱めるあり、或は開かんと欲するもあり、或は正しく開敷せる者もあり、若しは五、若しは十、乃至十なり。左の手に鉢胤遇を持てり、亦是れ西方の勝上の華なり、得大勢明王は一切衆生の菩提の種子を安立することを主る、而して此の明妃は此の中の種種の功徳を含藏し出生することを主るを以ての故に、其の被服幘帽皆此の義と相應せり。

多羅の右に半拏囉嚩悉寧を置け、譯して白處と云ふ、此の尊は常に白蓮華の中に在すを以ての故に以て名とす。亦天の髮髻冠を戴き、純素の衣を襲たり、左の手に開敷

蓮華を持てり、此の最白淨の處より普眼を出生す、故に此の三昧をば名けて蓮華部の母とす。

次に觀自在の下に於て何耶揭唎婆を置け、譯して馬頭と云ふ。その身黃に非ず赤に非ず、日の初めて出づる色の如し、白蓮華を以て瓔珞等と爲して其の身を莊嚴す、光焰猛威にして、赫奕として鬘の如し、^ニ指甲長く利く、^三雙牙上に出でたり、^五首髮は師子の項の毛の如し、^ニ極めて吼え怒れる狀に作せ、^六此は是れ蓮華部の忿怒持明王なり。猶ほ轉輪王の寶馬の四洲を巡履するに、一切の時と一切の處とに於て、去る心息まざるが如く、諸の菩薩の大精進力も亦復是の如し、是の如くの威猛の勢を得て、生死の重障の中に於て、身命を顧みず摧伏する所多き所以は、正しく白淨の大悲心のための故なり。故に白蓮の瓔珞を用て自ら身を嚴るなり。已に法の如く觀音の諸の眷屬を建立し竟る。

次に大日如來の左方に於て金剛部の明王を安置せよ、謂はゆる執金剛の能く一切の願を満たす者なり。其の色鉢胤遇華の如し、是れ淡黃色なり、或は綠寶の如し、是れ^一鉢羯寶なり、猶ほ虚空の顯色の如し。淨法界の色と金剛の智体と和合せるを以て、

一、四、亂脫
三、五、同上
六、同上

二、鉢羯具なる
梵語は摩羅羯陀と
云ふ、金翅鳥の口
邊より出づる綠色
の珠なりとぞ。

一、六、亂脱

二、同上

三、同上

五、同上

七、同上

是の故に其の身黃白なり、是の如くの智身は虚空の破壊す可からず、能く之を降伏する者一切無きが若し、故に虚空の顯色を以て幪幪となす。此の意は言はく、若し法、乃至少分も極微の如くも是れ得可き者は、則ち無常變易の諸行の所隨とす、是の故に畢竟空の智は、堅固の性の中に於て最第一たり。所持の密印は即ち是れ五股金剛なり、五如來の智は皆權實の二用を兼ねたり、而も金剛慧の手を以て其の中を執持せり、故に「左執拔折羅」と云ふ。此の印は當に光鬘を以て普く圍繞すべし、故に「周環起光簇」と云ふ。二首に三峯の寶冠を戴く、形山の字の若し、峯の間は仰偃せる初月の形の如し、種種の微妙の雜寶の一切の瓔珠を以て、其の體を莊嚴せり。此の意は言はく、般若波羅蜜、果地の心中に至れば、轉じて一切種智と名く、故に「首戴乘寶冠」と云ふ。此の妙慧を以て、廣く一切諸法に歷て、自在に旋轉して、無量の法界莊嚴を出生す、故に「間錯互嚴飾廣多數無量」と云ふなり。

次に金剛部主の右に於て忙莽鷄を置き、謂はゆる金剛部の母なり。亦金剛智の杵を持ち、諸の瓔珞を以て身を嚴れり。此れは是れ金剛智力を出生する三昧なり、謂はゆる金剛三昧なり。

次に部母の右に於て大力金剛針を置き、素支を譯して金剛針と云ふ。一股の拔折羅を持ちて以て幪幪となす、此の拔折羅は是れ一相一縁の堅利の慧なり、此れを用て諸法を貫徹して通せざる所なし、故に金剛針と名くるなり。其の下に二たりの使者あり、みな女人の形なり、踟躕微笑して之を瞻仰す、その狀卑しくして充滿し、淺黃色なり、金剛を以て標とす、是れは彼の重障を摧壞する三昧なり。

次に執金剛の左に於て金剛商羯磨を置き、譯して金剛鏢と云ふ。その印は連鏢を執持す、兩頭皆拔折羅の形に作れ、鏢の下に亦二たりの女使あり、金剛針の使者と異なることなし。此の智印を以て一切の剛強難化の衆生を攝持して、無上菩提を退かざらしむ、故に以て名とす。

次にまた執金剛の下に於て忿怒持明を置き、三世一切の大作障を降伏する者なり、月曆尊と號す。面に三目あり、四牙出現せり、夏の水雨の時の雲の色、如し、大笑の形に作せ、金剛寶を以て瓔珞とせり。此れは是れ持金剛者、無量の門の大勢威猛を以て、衆生を攝護する三昧なり、無量の眷屬を以て自ら圍繞す、皆悉く卑しくして充滿せり、忿怒の形に作れ、乃至一身に百千の手を具せり、種種の器械を操持し、堅

一、亂脱

立して森然なり。若し盡く書く可く可からずば要す一二の使者を作し、乃至五六をもせよ、皆蓮華の上に住せしむべし。意は此の蓮華心の中に、法爾に一切勇健の大精進力を成就して、餘處より來るにあらざることを明す。

已に金剛薩埵の諸の眷屬を建立し竟る。次に西方に往きて如來の持明使者及び諸の執金剛衆を書け、種種の形色性類、種種の密印標幟あり、皆圖の中に於て之を出す。是の一一の尊の大慧の光明悉く法界に遍せり、所現の身口意密も亦法界に遍す、故に「普く圓滿の光を放つ、諸の衆生の爲の故に」と云ふなり。

此の下位に於て、涅槃底の方に依りて不動明王を書け、如來の使者なり。童子の形に作せ、右に大慧刀の印を持ち、左に羂索を持てり、頂に莎髻あり、屈髪垂れて左の肩にあり、細く左の目を閉ぢ、下の齒を以て右邊の上の唇を噛み、その左邊の下の唇は稍翻して外に出せ、額に皺文ありて水波の狀の如し、石上に坐し、其の身卑しくして充滿なり、奮怒の勢極忿の形に作せ、是れ其の密印の標幟の相なり。此の尊は大日の華臺に於て久しく已に成佛したまへり、三昧耶の本誓願を以ての故に、初發大心の諸相不備の形を示現して、如來の僮僕給使となりて諸務を執作す。利及と

一、六 亂脱
二 同上

五 同上
四 同上
三 同上
八 同上

羂索とを持つ所以は、如來忿怒の命を承けて、盡く一切衆生を殺害せんと欲するなり。羂索は是れ菩提心の中の四攝の方便なり、此れを以て不降伏の者を執繫し、利慧の刃を以てその業壽無窮の命を断ちて、大空生を得せしめたまふ。若し業壽の種除ければ、則ち戲論の語風も亦皆息滅す、是の故に其の口を緘閉せり、一目を以て之を視る意は、如來平等の目を以て觀たまふ所の一切衆生、宥む可き者無きことを明す。故に此の尊の凡そ所爲の事業あるは、唯だ此の一事の因縁の爲のみ。其の重障の盤石を鎮めてまた動かざらしむるは、淨菩提心の妙高山王を成すなり、故に「安住在盤石」と云ふなり。

復次に下方の西北の隅の際に於て、降三世忿怒持明王尊を作せ。首に寶冠を戴き、五股金剛印を持つ、毗盧遮那を瞻仰して、教勅を請受する狀の如し。偈に「不願自身命」と云ふは、至極忿怒し奮ひて、命を顧みざる容に圖作すべきを謂ふ。謂はく、法界の衆生を攝召して、皆法王の威命に順從せしめんと欲す、此れ亦是れ成辨諸事の眞言なり。此の五如來の智大自在力の爲に、滌除し摧滅せらるる者、皆悉く果地の莊嚴に至る。唯だ障礙する所なくして偏に但空を證するのみに非ず、是の故に五股

一、三 亂脱
五 同上
六 同上
七 同上
二 同上
四 同上

の印を持ち、首に寶冠を戴きて風輪の中にあらしむ、即ち法華經のあらゆる所作は皆佛知見を開きて清淨を得しめんが爲なりと云ふ意なり。

ハ亂脱、九は二八
九頁にあり。

+ 同上

次に第二院に往きて釋迦牟尼を畫け。阿闍梨言はく、此の中の第二は是れ隱密の語なりと。若し中より外に向はば當に釋迦牟尼の眷屬を以て第三院とすべし、今は則ち毗盧遮那の法門眷屬を以て第一とし、釋迦牟尼の生身の眷屬を第二とし、諸の菩薩は悲智の間にありて、上求下化するが故に第三とするなり。此の如く文を互にする所以は、此れは是れ如來の密藏なり、諸の慢法の人ありて、師に従はずして受くるを防がんが爲に、經文を變化す、故に須らく口傳し相付すべし。

東方の初門の中に於て先づ釋迦牟尼を置け。身は眞金色にして并に光輝ある三十二相を具ふ、所被の袈裟は乾陀の色に作せ、白蓮華に坐して説法の狀に作す、謂はく、左手を以て袈裟の角を執る、今の阿育王の像の如し、右手は指を豎てて空水輪を以て相持す、是れ其の標幟なり、此の白蓮華は即ち是れ中台の淨法界藏なり。世尊此の教をして廣く流布せしめんが爲の故に、此の生身の標幟を以て之を演説したまふ、然

(一) 乾陀色 香色
即ち赤に黒の雜れ
る色なり
(二) 阿育王の像
阿育王は印度の有
名なる王なり、此
の王は太く佛法を
歸依せり、佛の第
四女釋迦佛の金像
を造れりと云ふ、
今謂ふ所は此の像
を指すか。

れども本の法界身と無二無別なるが故に「住彼而説法」と云ふなり。

次に世尊の北邊に於て佛眼を安置せよ、亦是れ釋迦牟尼佛母なり、此の方には譯して能寂母とす。當に世間に見んと樂ふ端嚴無比の身に作すべし、通身に皆圓光あり、喜悅微笑せり。此は是れ如來隨類の形を出生する三昧なり、此の三昧は正しく大慈の普眼を以て體として、應度の衆生を察觀して之を導利す、慈眼の光遍からざる所なし、故に「遍體圓淨光」と云ふなり。

次に佛母の北に於て如來の白毫相の印を畫け。蓮華の中に住し、商法の色に作せ、身に圓光あり、手に蓮華を執れり、半敷ける狀の如し、内に如意寶珠あり。此れは是れ如來の無邊の福業の集まりて成れる所なり、觀佛三昧等の經に廣く説けるが如し、能く一切衆生の願を満足す。

次に釋迦師子の南に於て如來の五頂を置け。第一には白傘佛頂、第二には誓耶、譯して勝頂とす、第三には微誓耶、此れは多の聲を用て呼ぶ、譯して最勝頂とす、第四には誦殊羅施、譯して火聚頂と云ふ、經に衆徳と云へるは正譯には當に大分と云ふべし、是れ大徳を具する義なり、第五には微吉羅拏、譯して捨除頂と云ふ、是れは一切

の煩惱を弃捨する義なり、亦是れ摧碎の義なり。此れは是れ釋迦如來の五智の頂なり、一切の功德の中に於て猶ほ輪王の大勢力を具するが如し。其の狀皆轉輪聖王の形に作せ、謂はく、頂に肉髻の形あり、其の上にもた髪髻あり、即ち是れ重髻なり、餘の相貌は皆菩薩の如し、極めて端嚴にして歡喜ならしめよ、所持の密印は圖の如し。

次に東方に於て最も北邊に近く五淨居衆を布列せよ、第一に自在天子、第二に普華天子、第三に光鬘天子、第四に意生天子、第五に名稱遠聞天子なり、當に次第に之を列ぬべし。其の印相は具さに圖に説くが如し。阿闍梨言はく此れは是れ五那含天子なりと。此れを過ぎて已上に菩薩佛の職位を受くる處あり、亦淨居天と名く、多くは是れ一生補處の菩薩なり、是れは第二院に攝せらる、此の中に明す所に非ず。

此の天の次の南に毫相の右にまた三佛頂を書け。第一をば廣大佛頂と名け、第二をば極廣大佛頂と名け、第三をば無邊音聲佛頂と名く。其の形相皆五頂に同じ、是れは如來の三部の衆徳の頂なり。其の五種の如來頂に五種の色あり、謂はゆる眞金色と鬘金色と淺黄色と極白色と淺白色となり。是の中の眞金と鬘金との二色は相似たり、然れども眞金は光淨く、鬘金色は稍重れり。三佛頂には三色あり、謂はく白色と黄色と

赤色となり、此れは是れ寂災・增益・降伏の色を兼具せり。此の八佛頂は皆周身に光あり、光極めて廣厚なり、諸の瓔珞を以て身を嚴る。如來の本誓願力に由るが故に、悉く能く一切の願を満足す。

東南の隅に諸の火天衆を布列せよ。火焰の中に住せり、額と兩臂とに各三の灰畫あり、即ち婆羅門の三指を用て灰を取りて自ら身に塗る象なり、一切深赤色なり、心に當りて三角印あり、焰火圓の中にあり、左の手に數珠を持ち、右の手に澡瓶を持つ。此れは是れ普門の一身なり、火祠の韋陀梵志を引攝せんが爲に、方便を以て佛の韋陀の法を開示す、故に此の大慧の火壇を示す、梵行を淨修する標幟なり。

次に左方に於て大日の南に在りて餓摩法王を作せ。手に檀拏の印を執る、此の印相は猶ほ棒の形の如し。上に人首あり、極忿怒の狀に作せ、水牛を以て座とし、身を黒玄色に作せ。阿闍梨言はく、少かりし時、嘗て重病に困りて神識を困絶せしに、冥司に往詣して此の法王を觀たり。后と共に語言して貌甚だ慈忍なりき。然るに此の檀拏印は忿怒の形を以て、生來の犯す所を檢効して口より火光を出し、至りて嚴切を爲す、出家以後の功業を驗するに及びて、便ち寂然としてまた言ふことあらず。餓摩王及び

后、階より降り善言を以て稱歎し、慇懃に敬を致して歸戒を求受す。因りて放されて此に却還せらる。蘇るに至りて後、その兩臂の繩に擊持せられし處に猶ほ瘡痕あり、旬月にして癒たりきと。閻摩の西に閻摩后及び死后を作れ、亦是れ閻摩の後なり。東邊に黑夜神及び七摩怛里を作れ、譯して七母と云ふ、皆女鬼なり、其の形悉く皆黒色なり。

次に西南の隅に於て涅槃底鬼王を書け。刀を執り可怖畏の形に作れ、是れ護方の羅刹王なり。嚙嚙拏は是れ西方の護方の龍王なり、縞索を持ちて印とせり。

東方の五頂の南に於て當に(一)因陀羅釋天の主を書くべし。須彌山に坐して天衆圍繞せり、首に寶冠を戴き、身に種種の瓔珞を被て伐折羅を持てり。「及餘諸眷屬」とは舍脂夫人及び六欲天等を謂ふ、具さには圖の中に示す所の如し。

釋天の眷屬の南に日天衆を置け。八馬の車輅の中に在り、并に二妃その左右に在り、謂はゆる誓耶・微誓耶なり、譯して勝・無勝と云ふ。日天の眷屬には諸の執曜を布せよ、(二)益伽をば西に在り、(三)輪伽をば東に在り、(四)勃陀は南に在り、(五)勿落薩鉢底は北に在り、(六)設備設遮をば東南に在り、(七)羅睺は西南にあり、(八)劍婆は西北に在り、(九)計

- (一) 因陀羅釋天 Sakra deva Indra 帝釋天なり。
- (二) 益伽 火曜星なり。
- (三) 輪伽 金曜星なり。
- (四) 勃陀 水曜星なり。
- (五) 勿落薩鉢底 木曜星なり。
- (六) 設備設遮 土曜星なり。
- (七) 羅睺 日月蝕なり。
- (八) 劍婆 地震を主る星歟、或は三寶荒神なり。
- (九) 計都 彗星なり。

都をば東北に在り、又南緯の南に於て涅槃多を置け、謂はく天狗なり、北緯の北に嚙嚙多を置け、謂はく流火なり。

釋天の眷屬の北に淨居天に近く大梵王を置け。髮髻冠を戴きて、七鵝の車の中に坐せり、四面にして四手あり、一手には蓮華を持ち、一手には數珠を持つ、已上は是れ右の手なり、一手は軍持を執り、一手は唵字の印を作す、此の上は左の手なり。印は當に稍頭指を屈して直く餘指を申ふべし、手を側め之を按じて語る狀に作せ、是れを淨行者の吉祥印と名く。所餘の四禪の諸天は皆その左に列せよ、無熱等の五淨居天をば列ねて其の右に在り。毗尼に謂はゆる淨居天の被服の儀式を觀じて、齊整着の三衣と內衣との戒を制せしとは是れなり。

西方に門に近く地神衆を置け。次に北に薩囉薩伐底を置け、譯して妙音樂天と云ふ、或は辯才天と曰ふ。次に北に并べて其の妃を置け。又次に微瑟紐を置け、舊譯には之を毗紐と謂へり、此れは是れ那羅延天なり。并に商羯羅天を置け、此れは是れ摩醯首羅なり、一世界の中に於て大勢力あり、三千世界の主には非ず。經の中の下の文に更に嚙捺羅あり、即ち是れ商羯羅の忿怒身なり、事に從ひて名を立つ。

又塞健那天を置き、即ち是れ童子天なり、皆其の側に妃を置き、阿闍梨言はく、此れ是の天衆は當に釋梵王の左右に之を序列すべしと。最も西北の隅に護方の風天と眷屬とを置き。西門の南に日天と相對して月天を置くべし、白鵝の車に乘れり、其の左右に於て二十七宿・十二宮神等を置きて以て眷屬とす。

次に北門に於て當に毗沙門天王を置くべし。其の左右に於て夜叉八大將を置き、一をば摩尼跋陀羅と名く、譯して寶賢と曰ふ、二を布嚕那跋陀羅と名く、譯して滿賢と曰ふ、三をば半支迦と名く、舊くは散支と曰ふ、四をば娑多初哩と名く、五をば醜摩嚩多と名く、即ち是れ雪山に住せる者なり、六をば毗灑迦と名け、七をば阿吒嚩迦と名け、八をば半遮羅と名く、及び訶栗底母・功德天女あり、經文に之を闕けり。阿闍梨言はく、功德天は毗沙門に隨ひて北方に在くべし、若し本位ならば亦西方に置く可しと。凡そ此れ等の諸大神は皆是れ衆に知識せられたり、世間の衆生各々に性欲の因縁に隨ひて、宗奉し供養す。毗盧遮那、普門を以て衆生を攝せんとするが爲の故に、一切處に遍して彼の身に示同して、即ち世間の共に識れる標幟を以て、出世間秘密の標幟とす。猶ほ帝釋の像の妙高山王に安住するが如く、如來の因陀羅三昧も亦復此の處を

移さずして、淨菩提心の妙高山王を開出す、自餘の法門も例して皆是の如し、詳かに説く可からず。但し行者、彼の一一の衆の中に隨ひて功行成就するときは、自ら當に開解すべきのみ。

又釋迦牟尼の座の下に忿怒持明を作すべし、右邊をば無能勝と號し、左邊をば無能勝明妃と號す、並に白色にして刀印を持てり、佛を觀て其の間に坐す。云ふ所の地神とは即ち前に説く所の西門の中の地神なり、當に寶瓶を捧持して度恭長跪せしむべし、其の瓶の中に種種の水陸の諸華を置き、餘は圓に説くが如し。並に通門に於て第二重の廂曲の中に二龍王を置き、右をば難陀と曰ひ、左をば跋難陀と曰ふ。首の上に皆七の龍頭あり、右の手に刀を持ち、左の手に絹索を持つ、雲に乗りて住す。此れ皆漫荼羅の中の所要なり、故に眞言行者當に不迷惑の心を以て、次に依りて之を作すべしと云ふ。

經に云はく、「所餘の釋種の尊の眞言と、印と壇と、一切の法とを、師具さに開示すべし」とは、釋迦部の中の佛鉢・錫杖・の印等の如き、其の類甚だ多し、經に具さに出さず、但し此の方の空缺の處に隨ひて、餘經の所説を擇び採りて、便に逐ひて之を安置

せよ、設令之を缺ぐとも亦過咎なし。但し經の中に出す所の上首の諸尊等をば必ず一に法の如く之を書くべし、遺謬することを得ざれ、其の蓮華部・金剛部等の諸方も亦此れに例して知るべし。

經の中に次に第三院の菩薩の眷屬を説く。釋迦の内に當りて、正東の門の中に文殊師利を書けよ、身髻金色にして頂に五髻あり、童子の形に作れ、左に泥盧鉢羅ニロハを持てり、是れ細葉の青蓮華なり、華の上に金剛の印あり、極めて熙怡微笑して白蓮華臺に坐せり、此れ其の秘密の標幟なり。阿闍梨言はく、髻金は即ち是れ閻浮金の色なり、以て金剛の深慧を表す。首に五髻あることは、如來は五智久しく已に成就したまへども、本願の因縁を以ての故に、童眞法王子の形を示作したまふことを表す。青蓮は是れ諸法に染着せざる三昧なり、心に所住なきを以ての故に即ち實相を見る、金剛の智印、能く常寂の光を以て遍く法界を照す。白蓮に坐する意は、中胎藏に異ならざることを明すと。

文殊の北邊に當に光網童子菩薩を書くべし。身眞色なり、寶網を執持し、種種の瓔珞を以て莊嚴して、寶蓮華の中に坐す。文殊は無相の妙慧を持し、光網は萬徳の莊

嚴を持す。智度に説く所の如し、鹽を以て諸食に調和すれば其の味を倍増すれども、空り噉ふ可からず、故に行人、般若の方便を失ひて、單に空慧を修すれば、則ち斷滅の中に墮ち、純ら福德を修すれば、則ち有所得の中に墮つ。佛の長子を觀する所以は意此にあり。

次に文殊の五使者を作せ、一をば髻設尼ケイセツニと名け、二をば優婆髻設尼ウパケイセツニと名け、三をば質多羅シツタラと名け、四をば地慧と名け、五をば請召と名く。妙吉祥の左右に於て次第に之を列ねよ、蓋し各文殊の一智を持するなり。髻設尼は是れ髮の端嚴なる義、優婆は是れ其の亞の者なり。文殊は五髻を以て五智を徵表するが故に、此の使者も亦美髮を以て名とす。質多羅は是れ雜色の義なり。其の五使者の下に各一の奉教者を作せ、皆跪きて使者に向ふ、音告を承受する形の如し。悉く是れ文殊の三昧なり、故に經に「侍衛無勝智」と云ふなり。

次に第二重に於て、大日如來の左方に除蓋障菩薩を書け。西方の俗法は東に向ひて治するが故に、東を以て初方とし、南を右方とし、西を後方とし、北を勝方とす。今此の漫荼羅の壇門は西に向ふが故に大日の左方に當るなり。圖の中に除蓋障菩薩は左

の手に蓮華を持ち、華の上に寶珠を置き、右は施無畏の手に作す。此の菩薩及び諸の眷屬は、皆是れ大慈悲の拔苦除障の門なり、正しく此の菩提心の中の如意寶珠を以て、一切衆生に無畏を施して、其の所願を満たす。

經に「二分の位を捨てて當に入菩薩を書くべし」と云ふは、謂はく、除蓋障の側に當に二使者を作して、然して後にその次第の如く八菩薩を置くべし。凡そ諸の眷屬を列ぬることは、皆最初の者を右に在き、第二の者をば左に在き、第三をば復右に在き、第四をば復左に在かしめよ。是の如く一は左、一は右、次第に之を置く。今此の八菩薩の中に於て、先づ除疑怖を以て除蓋障の右の在き、施一切無畏を左に在け。次にまた除一切惡趣を以て除疑怖の右に在き、救意慧を以て施無畏の左に在け。次にまた悲念菩薩を以て除惡趣の右に在き、慈起菩薩を以て救意慧の左に在け。次にまた除一切熱惱を以て悲念の右に在き、不可思議慧をば慈起の左に在け。諸餘の位布列すること皆此れに倣へ。

次に北方に於て地藏菩薩を書け。種種の間飾せる雜寶莊嚴の地の上に於て、金銀頗胝水精の四寶を以て蓮華座とせよ、亦窮極巧麗ならしめよ。其の菩薩は華座の上に在

りて、光燄其の身に周遍して胎藏に在るが如し、故に「處於餘胎」と云ふ。此の聖者は寶王の心地の中の性起の功德の無邊の寶藏を主持するが故に、其の標幟は一切の珍奇の雜寶を以て綺錯し莊嚴するなり。其餘の眷屬の菩薩も義亦之に同じ。地藏の右に當りて寶處菩薩を置き、地藏の左に寶堂菩薩を置き、次に寶處の右に於て持地菩薩を置き、寶掌の左に寶印手菩薩を置き、持地の右に又堅固意菩薩を置き、是の如くの上首の諸尊に又各各に其の左右に於て、諸の眷屬を書きて以て自ら圍遶するなり。

次に西方に於て虛空藏菩薩を書け。鮮白の衣を被て、左の手に蓮華を持つ、華の上に大刀の印あり、刀の上に遍く燄光を生ず、及び諸の眷屬皆正蓮華の上に坐す。

此の菩薩は如來の等虛空の慧を持つ。大刀を持つ所以は、利慧の標幟なり、白衣を被服するは白淨無垢なることを明す、是れ其の教門の外飾なり。譬へば虛空の分別する所もなく、亦積集することもなければ、而も世間の萬像之に依りて生ずるが如く、今此の法門も亦爾なり、畢竟空の中に於て、不思議自在の用を出生して窮盡あることなし、大集の虛空藏經の中に廣く明せるが如し。此の中の法門の眷屬は謂はゆる、虛空無垢菩薩・虛空慧菩薩・清淨慧菩薩・行慧菩薩・安慧菩薩なり、亦前の次第の如く左

一、亂脫
二、同上
三、同上

六、同上

右に之を列ぬ。みな等と云ふ所以は、上の上首の諸尊に復各無邊の眷屬あることを明すなり。其の形相は皆圖に説くが如し。

此の偈の末に「略説大悲藏漫荼羅位竟」と云へる此の二句は、是れ傳度の者、義を以て之を結ぶなり、經の中の本文には非ず。如上所説の菩提心爲因、大悲爲根、方便爲究竟とは、即ち是れ心の實相の華臺なり、大悲胎藏開敷して、大悲方便を以て三重の普門の眷屬を現作す。是の義を以ての故に、大悲胎藏漫荼羅と名くるなり。一世界の中に於て普く六趣隨類の身を現すが如く、一切世界の中に於ても亦復是の如し、彼の衆同分の中に於て最も上首たり、其の所説の法も亦彼の法の中に於て微妙第一なり、また此の義に由りて普く能く無盡の衆生を攝受するが故に、毗盧遮那を名けて法界王とするなり。今の上首の諸尊同じく共に集會して是の如くの法を印持したまふ、故に彼の一切の同類の衆生、各各に希有の心を生じて言はく、我が尊ぶ所の與等なき者も亦復此の衆中に在す、當に知るべし、此の法は甚だ希有たることをと。希有の心を生ずるを以ての故に、一切の法界門に隨ひて善根を種う、乃至長夜に不善根を興して正法を破壊せんと欲する者も、既に道場に至りて彼の宗奉する所の大天を見、又不

思議法食の施を蒙りて、惡心即ち滅して魔事を弃捨し、或は一念隨喜の心を生ず。一念の淨心を生ずるを以ての故に、便ち中に於て大悲胎藏漫荼羅を開出す可し。

復次に此の漫荼羅の種種の法門は同一法界なりと雖も、然も其の功用の淺深各差別あること、一地の所生、一雨の所潤なれども、然も諸の藥草の性分不同なるが如し。若し醫王之を觀るときは、是れ是れの藥草は某病の中に於ては對治の宜しき所に非ず、然も某病に於ては勢力殊勝なりと知る、若し此れ等の普門方便の中に於て、一一に分別して謬らざれば、乃ち大阿闍梨と作るに堪へたり。十萬偈の大本の中には、彼の諸の聖尊各、自ら通達したまへる所の法界門と、種種の異の方便の法とを宣説したまふと云ふ。今此の略本にはたゞ其の普通趣の道の要法を擧ぐるのみ。若し行者法の如く修行し、法則を虧かずして、不思議の加被を蒙る時は、自ら當に曲示の方便通せざる所なかるべし。阿闍梨言はく、凡そ行者瑜伽に住せずば人の爲に漫荼羅を建立すべからずと。初めて書かんと欲する時には、先づ字門を用ひて轉じて諸尊を作し、座位形色性類一一に相應して、即ち是の如くの大悲藏は即ち是れ我が身なりと觀じて、方めて手を起して之を書け。もし是れ深行の阿闍梨ならば、必ず即ち一切の時に於て、常

に是の如くの佛會を離れず。書き了りて法事を作さん時には、法の如く次第に金剛地を起し、此の寶王の宮殿を觀じて、須彌山の頂に在くべし、あらゆる一一の莊嚴は皆下の品の中に説くが如し。是の如く明了にし已りて、方に請召す可きなり。

國譯大毘盧遮那成佛經疏卷第五終

國譯大毗盧遮那成佛經疏卷第六

沙門一行阿闍梨記

入漫荼羅具緣品第二の餘

阿闍梨所傳の漫荼羅の圖位、具さに列ぬること左の如し。

- | | | | |
|--------|---------------------|---------|-------|
| 上方 | 右方 | 左方 | 下方 |
| ○如來如意寶 | △能授一切尊
一切の願を滿たす也 | □妙金剛 | ▽降三世尊 |
| ○如來甲冑 | □蓮華部女奉教者 | □蓮華部奉教者 | □青金剛 |
| ○如來羂索 | □蓮華三股戟 | □金剛蓮 | □金剛鐸。 |
| ○如來怖魔 | □蓮華戟 | □寂靜金剛 | |
| ○如來馬藏 | □蓮華尊 | □大迅利金剛 | □金剛羂索 |
| ○如來唇 | □金剛蓮 | | |
| □如來十力 | □蓮華輪 | | |

- 如來牙
- 如來大護
- △無所畏大護者。
- 如來無所畏
- 如來鈴鐸
- 如來商佉
- 如來三昧耶金剛
- 如來正勤
- 如來三昧耶
- 如來舌
- 如來豪相
- 一切如來座
- 如來大勤勇
- 如來眼
- 蓮華刀
- 蓮華德菩薩
- 大水吉祥
- 大吉祥
- 僧吉祥。
- 佛吉祥。
- 金色菩薩
- 名稱慧菩薩。
- 白色菩薩
- △壞諸怖畏大護者。
- 大勢至菩薩
- 毗俱胝菩薩。
- 觀世音菩薩
- 多利尊。
- 金剛牙
- 那彌茶金剛
目より名を立つ又は短云ふ
- 赤體金剛
- 佛奉教者
- 越無量虛空
- △月歷尊。
- 難降大護者女。
- 金剛部生
- 金剛連鐐。
- 執金剛
- 不可越護門者。

- 如來心
- 如來鑠底
- 無堪忍如來無堪忍
- 水自在尊
- 如來念處
- 如來刀
- 如來輪
- 如來蓮華
- 如來頂
- 如來結界
- 如來施願
- 如來平等說
- 如來口
- 如來腰
- 觀音母
- 大白菩薩
- 資財主菩薩
- 遍觀菩薩
- 吉祥菩薩
- 帶塔德菩薩
- 寶德菩薩
- 鹿皮衣形
- 蓮華軍持
- 蓮華鬘
- 蓮華斧
- 蓮華索
- 蓮華鐸
- 蓮華螺
- 金剛母。
- 金剛針
- 金剛鈎
- △金剛無勝大護者。△如來使者
- △軍荼利金剛。
- 金剛拳
- △大力金剛。
- 無戲論金剛
- 虛空無垢金剛
- 金剛斧
- 素羅多金剛住
- 大身金剛
- 金剛輪

- 如來焰光
- 如來鈎
- 虛空眼
- 蓮華部使者
- 大勝金剛
- 廣眼金剛
- 拔折羅金剛
- 金剛棒
- 聖不動尊

右第一重竟る

- 無垢光童子
- 光網童子
- 男奉教者
- 男守衛者
- 男使者
- 女使者
- △ 六面尊
- △ 降闍摩尊
- 賢劫菩薩
- △ 行慧菩薩
- 勝妙天菩薩
- 寶嚴菩薩
- △ 寶印手菩薩
- 大慧菩薩
- 寂慧菩薩
- △ 無垢慧菩薩
- 無盡意菩薩
- 不思議慧菩薩
- △ 大慈起菩薩
- 無像菩薩
- 賢劫菩薩
- 金光菩薩
- 金色菩薩
- △ 寶德菩薩
- 寶德菩薩
- 花幢菩薩
- △ 計都菩薩
- 無垢光菩薩

□ 地慧童子

○ 救意慧菩薩

△ 清淨慧菩薩

□ 優波計設尼

○ 寶掌菩薩

□ 施一切無畏菩薩

□ 文殊師利

□ 地藏菩薩

△ 除一切蓋障菩薩

□ 計設尼

○ 寶作菩薩

□ 除疑怖菩薩

□ 質多羅

△ 持地菩薩

○ 除一切惡趣菩薩

□ 女使者

□ 堅意菩薩

△ 悲念菩薩
亦は大悲纏と名く

□ 男使者

○ 寶冠菩薩

□ 除一切熱惱菩薩

□ 女守衛者

△ 發心即轉法輪菩薩

○ 海慧菩薩

□ 女奉教者

○ 寶輪菩薩

□ 刺泥弭菩薩
無垢
なり

□ 寶冠童子

△ 泥弭菩薩
垢なり

□ 金光菩薩
△ 光明菩薩

□善住意菩薩。

△妙慧菩薩。

○妙幢菩薩

□月光童子

□無邊幢菩薩

□善財童子

□賢勅菩薩。

□賢劫菩薩

右第二重竟る。

△火天護方神

□伊舍那護方神

△涅槃底護方神

▽風天護方神。

△火天

□鳩槃荼衆眷屬

△女羅刹。

▽風神后

△火天后

□阿名揭拏羊耳

△羅刹衆。

△迦樓羅女。

△婆私慧吒大仙

□阿顯縛揭拏馬耳

□賢劫菩薩

△迦樓羅。

△竭伽大仙

□戌婆揭拏箕耳

○童男菩薩

△迦樓羅。

△末建荼大仙

□雜寶藏神。

○比丘衆

△非人眷屬

△瞿曇大仙

△荼吉尼。

○日光菩薩

△一切人眷屬

△迦葉大仙

△荼迦。

○比丘菩薩

△諸執曜神等

□童男菩薩

□西南日輪遍照勝德佛

△毗逝耶后

□離塵勇猛菩薩

□童男菩薩

□比丘衆

△日天子

□東北方定勝手德佛

○菩薩衆

□寶勝菩薩

△逝耶后

□菩薩衆

○比丘衆

□西北方一寶蓋佛

□那羅延并眷屬

□比丘衆

○童女菩薩

□比丘衆

□魔天他化自在天

□童女菩薩

△苾芻蟻噪知

□童女衆

□化樂天

□女部多。

□兜率陀天

□部多藥叉類。

△諸毗那夜迦

□賢劫菩薩

□焰摩天

□住雪山藥叉將。

△摩訶迦羅黑神

○小訖哩瑟摩二龍王

□東方提頭賴吒天王并健闥婆衆

□娑多祁哩藥叉將。

○優婆路係多二龍王

□舍支夫人。

□半遮羅藥叉將。

△毗舍遮十眷屬。

○路係多二龍王

□帝釋三十三天

□毗灑迦夜叉將。

△毗舍支十眷屬。

○優婆臂多二龍王

□童子菩薩

□痾吒嚩迦藥叉將。

△毗舍支十眷屬。

○臂多二龍王

□比丘衆

□毗沙門子藥叉將。

△毗舍支十眷屬。

○東訖勞二龍王

□歡喜菩薩

□上方歡喜德菩薩

○沙伽羅龍王

□摩尼拔陀羅神。

□摩尼拔陀羅神。

○沙伽羅龍王

- 菩薩衆
- 童女菩薩
- 阿難陀
- 須菩提
- 舍利子
- 大目連
- 大迦葉
- 無量音聲佛頂
- 廣大佛頂
- 火聚佛頂
- 勝佛頂
- △如來錫杖
- 如來鉢
- 護方神后
- 俱吠囉護方神毗沙門
- 吉祥功德天
- 滿賢藥叉將
- 訶栗底母女五
- 散支大將
- 童男菩薩
- 比丘衆
- 勝授菩薩
- 北方勝德佛
- 菩薩衆
- 比丘衆
- 童女菩薩
- △寒冷地獄
- △熱惱地獄
- 毗樓博叉王
- △閻摩殑唎底后
- △閻摩后
- △閻摩但茶
- △閻摩羅法王
- △質咀羅笈多訊獄者
- △夜黑天
- 辨才天
- 童男菩薩
- 比丘衆
- 阿那婆達多龍王
- 得叉迦羅龍王
- 摩迦斯龍王
- 矩利迦龍王
- 羯句吒迦龍王
- 和脩吉龍王
- 阿難陀龍王
- 大蓮華龍王
- 波頭摩龍王
- 優婆邏那守門者
- 通門

- 如來牙
- 豪相
- △無能勝尊
- 釋迦牟尼佛
- △無能勝妃
- 佛母
- 賢劫菩薩
- 主田農神
- 主象馬廐神
- 比丘衆
- 主王庫藏
- 主外道福處神
- 離憂菩薩
- 南方無憂德佛
- 菩薩衆
- 童男菩薩
- 童女菩薩
- 遜那守門者
- 地神
- 龍王并后眷屬
- 比丘衆

- 如來鑠底印
- 童男菩薩
- 比丘僧
- 普光菩薩
- 東方寶性佛
- 菩薩衆
- △主巖穴神
- 主伏藏神
- 主磧神
- 主尸林神
- 主陂池神
- 主龍泉神
- 別異地獄
- 賢劫菩薩
- △遮閻孛
- △嬌吠喇
- △吠瑟孛味
- △嬌喇
- 行慧菩薩
- 西方寶焰佛
- 菩薩衆
- 比丘衆
- 童女菩薩
- 主平相侵神
- 主日歷神
- 主時分神

- 比丘僧
- 童女菩薩
- 佛袈裟
- △佛軍持
- 白傘佛頂
- 最勝佛頂。
- 摧碎佛頂
- 最高佛頂
- 辟支佛
- 大梵并明妃眷屬
- 四禪天
- 無色天
- 主井神
- 主空中宮苑神
- 主宮室神
- 主海神
- 主街陌神
- 主河神
- 主道神
- 主曠野神
- 主郊野神
- 主店肆神
- 主城神
- △燕捺喇
- △嗜捺喇
- △末囉弼
- 緊那羅妃。
- 緊那羅緊那羅神
- 童男菩薩童男菩薩
- 比丘衆
- 蓮華手菩薩
- 東南蓮華勝德佛
- 菩薩衆
- 比丘衆
- 童女菩薩
- △慕訶囊
- △名闕火神
- 主業作神
- 主宿神
- 主宿對神
- 主夜神
- 主六時神
- 主直神
- 主二十八宿神主二十八宿神
- 主十二宮神主十二宮神
- 主月神主月神
- 主日神主日神
- 主天后名月神
- 月天子
- 月后名月神
- 童男菩薩

- 淨居自在天子
- 普化天子
- 光鬘天子
- 意生天子
- 名稱遠聞天子
- 大自在妃并眷屬
- 大自在天并眷屬
- 摩醯首羅子及妃
- 持明妃
- 持明仙
- 主村神
- 主洲神
- 主島神
- 主山神
- 主悉地物神
- 主悉地神
- 主仙藥神
- 主藥計神
- 主藥神
- 悉地持明妃。
- 悉地持明仙。
- △劫微
- △芒囊娑
- △訖灑也
- △社吒羅
- △句路誕囊
- △沒栗拏
- △露係多
- △芒嚕多
- △捺囉迦
- △沙摩醯捺羅
- △諸大仙等
- 比丘衆
- 蓮華勝菩薩
- 下方蓮華德佛
- 菩薩衆
- 比丘衆
- 童女菩薩童女菩薩
- 賢劫菩薩賢劫菩薩
- 阿修羅女眷屬。
- 阿修羅眷屬。
- 摩睺羅伽女。
- 摩睺羅伽

右第三重竟る。

阿闍梨言はく、第一院の東方の如來鈎乃至如來甲等は、皆是れ毗盧遮那の三昧なり。一一に天女の形に作れ、漫荼羅の方圓の如く以て其の色を辨せよ。白蓮臺の上に坐し

て、手の中にはまた蓮華を持つ、華の上に各物の像を以て用ひて標幟とせよ、鈎・輪・刀・槩・商法・鈴鐸・絹索・甲冑等の如し、皆本相に依りて之を書け。頂相・豪相・口・舌・牙・唇等も准例して推して解す可し。如來臍は蓮の上に於て連環圓好の相を圖作せよ、如來腰は亦頗る旋曲して數珠鬘の形の如し。如來臍は輪王の馬寶の臍の相の現れざる形の如し。如來施願は當に與願の手に作るべし。如來法及び辯說等は或は經藏を持ち、或は說法の手に作せ。念處・十力等は皆是れ止觀相應の法なり、寂然三昧の容に作れ。三昧耶は當に佛頂の相に作るべし。如來頂相は具さに一切の功德を攝す、凡そ手の中に物の標幟となす可きなくば皆之を置くべし。

若し漫荼羅に尊形を作さずして、但だ秘密の印を示さば、金剛座の上に於て蓮華臺を作り、臺の上に前の如く標幟を書作せよ。其の字漫荼羅を作さば、經の中に種子の字あるをば、當に法の如く之を置くべし、如し經に載せざるは、當に梵名の中の最初の字を取りて種子の字と爲すべし、或は通じて阿字を用ふ可し。

北面の蓮華部の諸尊、若し經の中に形相を説かざるは、通じて紅蓮華色或は淨白色に作れ。金色尊等の如きは則ち名に依りて之を辨せよ。所持の印相は亦佛相の中に説

くが如し、然も蓮華を用て標幟とせよ、蓮華輪の像の如きは、當に四の蓮華葉を以て十字の形の如くして、用て輪輻となすべし、輻の外に刃を作して之を環圍せよ。蓮華刀は當に蓮の上に於て刀を置くべし、刀鋒の上に又蓮華を用ひて以て標幟の相とせよ。金剛杵戟等皆亦是の如し。蓮華絹索は蓮華を以て兩の茸よきとせよ。鐸は則ち蓮華を以て繫とせよ、鬘は則ち蓮華を貫穿して以て身を莊嚴せよ、或は所持の華の上に於て之を置き。戴塔吉祥は頂髻の上に於て窠塔波そたはを置き、或は所持の上に在け。蓮華尊は則ち華の上に於て重ねて蓮華を置き。寶德尊は蓮華の上に寶あり。能授一切願明王は能く一切の希願を滿たす、其の状はもつばら觀世音の如し、手に蓮華を持ち、華の上には或は如意寶珠を置く、息災・增益・降伏・の事に隨ひて、彼の相應の壇の中に在け。大吉祥は二手に各蓮華を持つ。水吉祥は或は蓮の中より水を出し。或は手を垂れて水を出す。被鹿皮尊は當に鹿皮を以て身を嚴るべし、梵天の像の如し、其の契印漫荼羅は前の説に例同せよ。通じて娑字を用て種子とするなり。

南面の金剛部の諸尊も亦經に依りて、初に名を列ぬる所の者は皆具さに之を置くべし。方圓三角半月等の壇を作さんに隨ひて、身色も亦爾り、或は一股拔折羅を持ち、

或は三股・五股を持つ、上下二鋒等の種種の金剛の標相、經の中に説く所の如く意に隨ひて之を置き。其の刀・斧・鉤・針等は皆金剛を以て標幟とせよ、刀は則ち刀鋒・柄飾みな金剛杵の端の銛銳の形に作れ、絹索連鎖は兩端みな三股波折羅の像の如し、輪は十字の金剛を以て輻輳とし、利及環遠して之を圍め、鐸は一股金剛を以て上繫とし、十字の金剛を舌とせよ。餘は皆例推して解す可し。

契印の漫荼羅は亦金剛座の上に於て白蓮華を置き、華の上に各其の物を表せよ。若し字漫荼羅を作さば、執金剛所統の眷屬には通じて嚙字を用ひよ、餘の金剛は通じて呌字を用て種子とするなり。

第二院の諸菩薩衆は、若し經の中に具さに形相を載する者は、一一に其の本教の如く之を書け、文なき者は通じて眞陀摩尼の印を用ひよ、當に蓮華を持ち、華の上に如意寶を置き、焰鬘を周圍して之を圍むべし。或は彼の名の中の義趣に隨ひて、以て其の相を表せよ、寶冠菩薩は則ち華の上に於て冠を置き、寶網菩薩は則ち華の上に於て網を置き、寶掌菩薩は掌中に寶を持ち、發心轉法輪は即ち手中に輪を持つが如し。所有の諸の闕位の處には皆賢劫の菩薩を置き。其の使者、奉教者等は皆卑下の容に作れ、其

の使者は刀棒を操持して、狀夾門の守禦の如し。奉教者は或は棒印を執持し、或は所尊を瞻仰す、指麾教勅を受くるが若し。守護者は守門の通信にして謬白する所あるが如し、各其の類に隨へ。降閻摩尊は是れ文殊の眷屬なり、大威勢を具せり、其の身は六面六臂六足なり、水牛を座とす、面に三目あり、色は玄雲の如し、極忿怒の狀に作れ、當に文殊の梵本を檢して、具足して之を圖すべし。凡そ此れ等の諸尊、若し餘經の中に具さに形相を説かば、亦彼れに依りて、圖畫して漫荼羅の中に入る可し。此の諸尊毗盧遮那經に眞言手印を載せずして、即ち別に餘經に出さば、當に彼の經に依りて眞言手印を授與して、此の經の供養次第法に依りて之を行はしむべし。

第三院の十方佛等は各常の相に依りて之を圖せよ。若し契印を作さば當さに如來の頂相を以てすべし、種子は則ち阿字を以てせよ。聲聞・緣覺は一同に比丘の儀式なり、是の中に緣覺小しく差別なることは謂はく、或は肉髻等の大人の相あり。若し契印は當に鉢・袈裟・錫杖等を用ふべし、其の種子の字は、經の中の眞言所説の如し。東方の日天の前に、或は摩利支天女を置き、陀羅尼集に之を出せるが如し。北方の夜叉八將の圖の中に闕少せる者は、其の形大抵相似せり、みな甲冑を被、伽駄の印を持ち

て、身相圓滿して端正なり、彼の趣は所求の乏しきことなく、常に快樂自恣なるを以ての故なり、羊耳・馬耳・象耳等は皆是れ鳩槃荼の眷屬なり、其の形夜叉に同じからず、皆身を露し、毛を垂れて、非人の像に作る、耳は畜獸に同じ。圖に持明仙と云ふは是れ餘の藥力等の所成なり。悉地持明仙とは皆是れ専ら呪術に依りて悉地を得る人なり、ただ諸仙と云ふは皆是れ圍陀の火に事ふる類なり、苦行を勤修して五通を成就せる神仙なり、又夜叉持明あり、是れは彼の類の中に福德最勝にして、天趣に攝せらるる者なり、世仙と又殊なり。其の山・海・河・池・林樹・穀・藥・城邑・道路等の神は各本名を以て標幟の相とせよ。山神は山に坐し、河にあり、其の樹藥等をば或は手に執持し、或は其の上に依る、當に義類を以て之を推すべし。華嚴の中に更に足行神・身衆神あり。是れは諸の岐行を護る類及び身を護る神なり、亦次に依りて之を列ぬ可し。西方の非人趣とは當に知るべし、毗盧遮那普門身の中に結是れ雜類の鬼神・傍生等なりと、圖の中に別の名相なき有は多く其の中にあり、所攝最も多し。路係多是れ赤色なり、臂多是れ黄色なり、訖栗瑟拏は是れ黒色なり。其の青色は亦是の中に攝す、若し此の方の中に依りて義を明すときは、即ち當に各別に之を出すべし。訖勞は是れ白色なり、皆是れ

二、亂脫

二、亂脫

一類の龍王なり、各本色に依り之を書け。若し鰥波の字を加ふる者は其の色稍淺し。遜那・臨波遜那は亦是れ護門の大龍王なり、皆右の手に刀を持ち、左に罽索を持つ年月時分を主る神等は皆天女形に作れ、華枝等を執持して以て標相とせよ、若し善事を主る者には、其の華も亦色相を圓備せしめよ、若し惡事を主る者には、萎萃せる華果等を持たしめよ。其の六時を主る神は亦六枝の華を持つ可し、時に隨ひて榮落する像に作りて以て其の事を表せよ。晝夜を主る者には亦華敷き華合するを以て之を明す可し。他は皆此れに倣へ。南方の忿唵吃嚩知は是れ摩醯首羅の子なり、身極めて枯瘦せり、常に怨敵を降伏するに、假使骨肉消盡すとも、要す勝つことを得しむるを以ての故に此の形を爲す。私に謂はく、即ち是れ智度に云ふ所の、常に苦行を修して肉を割き火を祀りて、諸の惡神を感生する者なり、所以に位南方にあり。其の十二の火天は經の中に略して形像を説けり、一の神の名を闕げる者あり、但し諸の火天の惣相の形に依るべし。餘は圖の中に示す所の如し。

經に云はく、「爾の時に執金剛秘密主、一切衆會の中に於て、諦かに大日如來を觀たてまつりて、目暫くも瞬かず」とは、時に佛の示現したまふ所の普門漫荼羅の如き

二、亂脫

は、諸尊の圖位を演説したまひ竟りぬ。秘密主普眼を以て此の一一の諸尊を觀るに、皆根本を見ず、亦住處なし、悉く是れ蓮華臺藏實相の身なり、種種の方便を出生すること窮盡す可からず。爾の時に深く自ら慶幸して希有の心を發し、倍此の法に於て難遭の想を生じて、將に更に深義を問ひたてまつらんと欲するが故に、先づ偈を説くなり。初の偈の意は言はく、一切智慧者の世間に出興すること。彼の靈瑞華の時時に乃ち一たび現るるが如きのみ、佛の優曇華は即遇ひ難しと雖も、然も此の眞言法要は倍また之に遇ひ難し。何を以ての故に、此れは是れ如來の秘藏なり、長夜に守護して妄りに人に授けず、苟くも頓悟の機無ければ其の手に入らず、世尊の在世すら猶ほ怨嫉多かりき、況んや末代をや。復次に此の經に自ら難現の因縁を釋す。若し衆生一たび此の漫荼羅を見れば、無始より以來の惡業重障摧滅して餘なく、必定して大菩提の記を得るが故に、鈍根薄福の人の能く遭ふ所に非ざるなり。一たび見ること尙ほ難し、何に況や次第修行せんをや。當に知るべし、是の人は轉た復希有なりと。常に善門海會の爲に稱歎せられて、名十方に聞こえ、又大日如來に同じく種種の名號あり、故に無量稱と曰ふなり。

經に「行此無上句」と云ふは、即ち是れ無上菩提の句を修行するなり。此の阿字門は一切眞言の王たること、猶ほ世尊の諸法の王たるが如し、故に眞言救世者と曰ふ。次の二句は救世の業を明す、いはゆる能く行人をして金剛の性を成して諸の惡趣を止斷し、一切の苦を生ぜざらしむるなり。

經に「若し是の如くの行を修すれば、妙慧深くして動かさず」と云ふは、若し具さに眞本を存せば、慧極めて深くして動かさずと云ふべし。大海の心は極めて深廣なるを以ての故に、又極めて二邊を遠離するが故に、乃至大風の起る時も搖動すること能はざるが如く、若し行者此の眞言の大海の心に入らん時も亦復是の如し、妙慧甚深無量にして又極めて二邊を遠離するを以ての故に、一切の諸法動搖すること能はず。娑竭羅龍王の雨を六天に降らす時、自の宮に於て三業都て動作なきが如し。若し是の如くの義を解する者は、則ち漫荼羅の種種の方便は皆悉く實際に住すと知る。

經に云はく、「時に普集會の一切の大衆及び諸の持金剛者、一の音聲を以て金剛手を讚歎す」とは、彼の諸の大衆、佛の廣く漫荼羅の圖位を演べたまふを聞き竟りて、此の中の法界標幟及び金剛の事業を問ひたてまつらんと欲すれども、世尊を敬重する

が故に、未だ敢て言を發せず、金剛手能く衆心を觀察して、機に乗じて偈を説くことは必ず疑網を決して、普く無量の衆生を利せんと欲すと知るを以てなり。是の故に稱讚證明して勸めて問を發さしむ。又十佛刹微塵衆等、一心一味なるを以て、一人をして此の法音を誦せしむ、人人俱時に別説すと謂ふには非ず。

偈に云はく、「善哉善哉一勤勇、汝已に眞言の行を修行して、能く一切眞言の義を問はんとす、我等咸く意に思惟することあり」とは、眞言の行は即ち是れ三平等の法門なり、汝三密を持つ人の中に於て、最も上首たり、故に能く世尊に普門の深義を問ひたてまらんとす、仁者の佛に問はんと欲する所の義の如きは、我等も亦皆是の思惟あり、今悉く同心に思欲す、當に速かに陳説すべし。次に云はく、「一切現に汝が證驗を爲す、眞言の行力に依住す」とは、言はく、我等初發心の時、此の無上の句に住するに由るが故に、乃至能く金剛慧海に於て甚深不動なり。是の故に必定師子吼して汝が前の所説の偈に於て、現に證明を作す、我等が有らゆる所作皆眞言の行に住し、眞言の勢力に依るに由りて、成就することを得たり。若し汝如來に秘密の方便を諮問せばあらゆる大乘を求むる人、當に眞言の行法に於て皆通達することを得べし。通達する

を以ての故に、久しく勤修せずして亦我等と異なることなかるべし。是の如くの利義を見るを以ての故に、一音聲を以て同心に勸助す。

その時に秘密主、大衆の勸發を蒙り已りて、即ち伽陀を説きて廣く世尊に問ひたてまつる。初の一偈は綵色の義を問ふに四句あり。第一の句は云何が是れ綵色の義と問ひ、第二の句は當に何の色を以てすべきかと問ひ、第三の句は云何が此の色を安置する、先づ何の處にか於てする、内なりや外なりやと問ひ、第四の句は色を布く時何の色を以てか先とすると云ふ、此れは是れ漫荼羅を造る時の一種の支分なり。次の偈は諸門の標相を問ふに三句の偈あり。第一の句は門旗の形量を問ひ、第二の句は門廂の形量を問ひ、第三の句は諸門を建立する法度形量を問ふ。是の如くの種種の秘密の標幟は、阿闍梨皆善く之に通達すべし、又是れ一の支分なり。次に二偈ありて凡そ八問あり。第一の句は云何が食及び華香等を奉らんと問ひ、第二の句は寶瓶の法則を問ふ、當に知るべし、一切の諸の供養の具は皆其の中にあり、阿闍梨當に事相に隨ひて其の性類を辨すべしと。又是れ一種の支分なり。第三の句は云何が弟子を引召して。漫荼羅に入れんと問ひ、第四の句は云何が灌頂の法を作さんと問ひ、第五の句は云何が所尊

に句観せんと問ふ。然も此の中にまた二種あり。若し初心の行人、世諦の漫荼羅に依らば、云何が召入し、灌頂し、阿闍梨に奉獻せしめん。若し已に瑜伽を修習して秘密灌頂を作さば、云何が召入し、灌頂し、阿闍梨に奉獻せしめん。正しく作法する時のあらゆる加持教授の方便、皆此の中に攝す。又是れ一種の支分なり。第六の句は護摩の處所を問ふ、亦淺密の二釋、及び息災・増益・降伏等の諸の異方便あり。第七の句は眞言の部類の字義・句義を問ひ、第八の句は三昧門の淺深差別の相を問ふ。凡そ阿闍梨未だ善く是の如くの法に通達せずば、漫荼羅を建立すべからず、又三種の支分を成す。

是の如く問ひ竟りて、大寂法王執金剛に告げて言はく、汝當に一心に諦かに聽くべしと。次に偈を説きて、最勝の眞言の道は大乘の果を出生すと言ふは、大乘の果は即ち是れ佛の無上の慧なり、要ず是の如くの方便に由りて生ずることを得、汝善言を以て能く我れに請問するに由るが故に、今普く諸の摩訶薩の爲に開示し演説せん。初の一偈は色の義を答ふ。「彼の衆生界を染むるに法界の味を以てす、古佛の宣説したまひし所なり、是れを名けて色の義と爲す」と云ふは、猶ほ世間の染色の能く淨麤を染めて、同味ならしむるが如し、故に味を以て色を解す。袈裟味と云ふが如きは、即ち

一 亂脱
二 同上

五 同上

(二) 明道、具さに
法明道と云ふ、大
慧の光明を放ちて
法性の眞理を照ら

是れ染めて袈裟色に作すなり。今此の漫荼羅の色の義も亦然り、法界不思議の色を以て衆生の心を染めて同一の淨菩提味ならしむ。復次に世間の染衣の先づ灰水を以て洗ふときは、染色を受け易きが如く、今囉字門を以て弟子の心垢を焚燒して、灰燼と成らしめ、然して後囉字門の大慈悲の水を以て、之を洗ひて純一清白にして諸の戲論を離れ、然して後染めて法界漫荼羅を作し、種種の普門の身をして、皆同じく實相の色ならしむ。次に兩偈あり、通じて三の問を答ふ。「問の中には當に何の色を以てすべきかと云ひ、今此の答の中に、具さに青黃赤白黒の五色を用ゆるなり。二偈に「先づ内色を安布す、外色を安布するに非ず」と云ふは、是れ云何が色を布く、何れの處にか先づ起し、何れの處にか後に起すと云ふを答ふるなり。「潔白を以て初とし、赤色を第二とし、是の如く黃及び青を漸次に彰著せよ、一切内は深玄なり、是れを色の先後と謂ふ」とは、是れ是の色は誰れをか最初となすと云ふを答ふるなり。潔白は是れ毗盧遮那淨法界の色なり、則ち一切衆生の本源なるが故に最も初とす。赤は是れ寶幢如來の色なり、既に菩提心を發して、(二)明道の中に於て、魔怨を降伏し、蓋障を滅除するが故に第二なり。黄色は是れ娑羅樹王の色なり、正覺を成す時、萬德開敷して、

す、故に降魔除障の徳あるなり。

皆金剛實際に到るを以ての故に第三なり。青は是れ無量壽の色なり、既に金剛實際に到れば、即ち加持方便を以て、普く大悲漫荼羅を現すこと、淨虚空の中に具さに萬像を含むが如し、故に第四なり。黒色は是れ鼓音如來の色なり。普門の迹を垂るる所以は、皆本を顯さんが爲なり、本とは即ち是れ如來自證の地、大涅槃に住するなり。若し加持神力を捨つるときは、即ち一切心量の衆生、其の境界に非ず、是の故に其の色幽玄にして、最も後に居るなり。復次に世間の淨帛の如きは、先より染色を受くるが故に、最後の黒は是れ染色の極なり。最深なるを以ての故に復加ふ可からず、是を以て後に居る。漫荼羅の色も亦然り。白は是れ百六十心の垢を越ゆる義なり、是れを信の色と名く、故に最初なり。赤は大勤勇の義なり、是れ精進の色なるが故に第二なり。黄は謂はく一念相應する時、定慧均等にして三七覺開敷す。是れを念の色と名く、故に第三なり。青は大空三昧の義なり、是れを定の色と名く、故に第四なり。黒は謂はく大涅槃の義なり、即ち是れ如來究竟の慧なり、是れを慧の色と名く。故に第五に名く。或は有る説に、白色は最初なり、黄を第二とし、赤を第三とし、青を第四とし、黒を第五とすと言ふは、此れは染を受くる淺深の有容有上の義に約するなり。

(一) 白は是れ等五色を信進念定慧の五根に配するなり。
(二) 七覺、擇法、精進、喜、輕安、念、定、行捨を七覺支と名く。

又白は是れ信の義、最初なり。黄は金剛の沮壞す可からざるが如し、即ち是れ進の義なり、故に第二なり。赤は謂はく、心障淨除して光明顯照す、即ち是れ念の義なり、故に第三なり。餘は上に釋せるが如し、法門の表する所各殊なり。復次に白は是れ寂災の色、如來部の義なり、故に最初なり。黄は是れ増益の色、蓮華部の義なり、故に第二なり、赤は是れ降伏の色、金剛部の義なり、故に第三なり。青は是れ諸事を成辨し、亦隨類の形を出生す、故に第四なり。黒は是れ攝召の義、即ち諸の奉教忿怒等の所爲の衆務なり、故に第五なり。復次に世間の綵畫は五色に過ぎず、然れども更相に涉りて種種の深淺の不同あり、巧慧の者善く之を分布して萬像を出生するに窮盡あること無きが如く、法界不思議の色も亦復是の如し。統て之を言へば五字門に過ぎず、然れども亦互相に發揮して種種の差別智印を成す。如來は普門の善巧を以て悲生漫荼羅を圖作し、乃至世界微塵數の隨類の形を出生すれども、猶ほ窮盡せず。若し瑜伽行人、若し此の中の意を得ば當に類に觸れて是れ、自在に施爲すべし。寂滅眞如の中には當に何の次かあるべき。偈の中に説ける所の如きは、且く一途の法門を擧げて、綱領を提げたるのみ。

(二) 伊字三點、梵字の伊字は三點、を鼎足の如く例るなり、故に不離、不離の三點に義を、伊字の三點を、今佛部蓮華を、伊字三點の眷屬を、伊字三點の眷屬を、云へるなり。

(三) 瞿醯經、摩訶曼荼羅品

經に「先づ内色を安布す、外色を安布するに非ず」と云ふは、凡そ圖書の法は、當に先づ内心の秘密蓮華藏を建立し竟りて、次に第一重の(二)伊字の三點の諸の内眷屬を造り、次に第二重の四菩薩等の諸大眷屬と、及び第三重の一切の世天眷屬とを造るべし。又諸の界道は中央と及び第一重とには、當に五色を具すべし。先づ白色を以て周界をなし竟りて、次に其の外に於て赤色の界を布き、次に外に又黄色を布き次に外に又青色を布き、最外に次に黒色を布く。其の第二重も亦如上の次第に依りて、白・赤・黄の三色を布け。第三重の周界はただ純白の一色のみを布け。皆極めて均調正直ならしめて、漸次に右に旋りて之を布け。其の行道及び供養處の外縁等は、隨ひて一の純色界に作せ。(三)瞿醯に云はく、但だ白色を用ふるなりと。白色を先にして中より外に向ふ所以は、此の菩提心の五種の根・力、漸次に増廣して、乃至大般涅槃に住すれば、則ち一切處に遍して、在らざる所なきことを明すが故に、黒色は最も外に居くなり。若し淺より深に至り、迹より本に歸すれば、則ち世尊六趣に俯同して、初門の眷屬となりて、淨菩提心を開發す。若し衆生此の明門に入りて、百六十心を超ゆる時は則ち已に世間を出過して菩薩の位に上る、故に第三の漫荼羅は唯だ白色を以て界と爲すなり。

第二の漫荼羅は、白の上に於て更に赤色・黄色を加ふることは、赤は是れ勤勇なり、菩提心の中に進みて萬行を修す。黄は是れ如來の念處の萬徳開發す、その時に即ち重玄門に入りて寂光土に居る、乃至迹補處に居れども、猶は一人をも識らず。故に第二重に於ては、但だ三色を以て界となすなり。第一重の漫荼羅は、三色の上に於て更に青色・黒色を加ふることは、青は是れ大空三昧なり、謂はゆる如來の身口意密無盡加持の故に、大虚空の色に作れ、黒は謂はく、如來壽量常住の身なり、是の如くの妙身は、畢竟無像なるが故に、深玄色に作せ、此の二句は是れ如來の秘藏なり、普く一切衆生の爲に非ず、故に内眷屬と名く。又此の深玄色に入る時は、即ち是れ如來自證の中胎華藏なり、その時に五智の色を見るに、皆同一法界の色なり、何ぞ淺深の殊あらん。而も諸の衆生に漸入の者あり、超昇の者あり、頓入の者あり、然も其の所趣は畢竟して同歸す、故に一切内深玄と云ふなり。

經に云はく、「門の幪幪を建立すること、量の中胎藏に同じくせよ、廂衛も亦是の如し、萃臺は十六節にせよ」とは、漫荼羅に門を夾みて皆幢旗を豎て、以て幪幪とす、之を門幪幪と謂ふ。二標相距る尺量は中胎と正等ならしめよ。上に横栝を置け、

其の廣さも亦然り。幢竿の上に皆偃月を置き、月の下に旗幟の像を置き。繒帛を取りて裁ちて正方ならしめ、隅角に之を破りて以て兩の幟とす可し、各幢竿の外に附けて、銳を上にして下に垂れよ。四維の際に亦幢竿并に偃月を置き、其の幟は兩向して之を置き。又大勤勇の門の偃月の上に於ては、各如意寶を置き、金剛手の門の偃月の上には、各拔折羅を置き、蓮華手の門の偃月の上には、各商估を置き、其の四維の上には、亦皆寶を置き。夾門廂衛の處は亞字の形の如し、而も中間に於て道を通じて、曲際毎に皆金剛槪を置き。槪の首は一股拔折羅の形の如くし、其の下は銛銳なり、一廂に六槪なれば、兩邊には十二の槪あり、四門并に四角に惣じて二十八枚なり。三重例して爾なり。并に五色の線を備へよ、皆不動の眞言、或は降三世の眞言を以て、加持すること一百八遍、或は一千八十遍せよ。阿闍梨正作法の夜に既に漫荼羅を書き竟りなば、先づ中胎及び第一院を觀て、闕少なしと知らば即ち金剛槪を下せ。其の金剛槪に金剛線を以て周圍して之を圍らせよ、通門の處に至らば則ち止めよ、横に斷すべからず。三重皆是の如く之を置き、若し爾ること能はずは、其の第三院は必ず具さに此の法に依るべし、闕少するを得ること勿れ。通門の處に至りては、當に線を舉げて、門標に

隨ひて屈曲して、上りて頭を闕へざらしむべし。既に結界し竟りなば、當に門に依りて出入して、輒く餘處を越ゆることを得ざるべし、出入の時毎に、なほ須らく不動の眞言を誦すべし。若し是れ瑜伽の阿闍梨ならば、亦周圍して線を以て圍斷す可し。若し出入すべき時は、此の線を舉げて下より過ぐ、過ぎ已りて即ちまた故の如しと想へ。或は門を去ること遠くして、急に出入すべくば、當に自身毗盧遮那と作ると觀じて、無罣礙の身を以てすべし、線を越ゆるの想を生ずること勿れ、意に隨ひて出入するに咎なし。六槪の間の廻屈の處は皆尺量を均停ならしめよ、仍須らく行道往來の界院を通すべし、最外の門の廂衛の兩邊も亦中胎と正等なり、故に廂衛亦如是と云ふ。華臺は是れ羅頂處なり、蓮華壇の規製は中胎八葉の藏に大同なり、極小は十六指にかぎれ。餘の義は下に當に更に説くべし、但し一門を開け、其の門をば大壇に向はしめよ。

偈に云はく、「知るべし彼の初門は内壇と齊等なり」とは、謂はく、第一重の門相は當に九分に準約して、廣狹をば正齊ならしむべし。門の中道をして、正しく華藏の心に當らしめよ、所餘の第二・第三も亦此れを以て準として之を分て、自然に漸次に増廣

（一）四念處 身は
不淨、受は苦、心
は無常、法は無我
なりと觀じて、淨
樂我常の顛倒想を
離る、なり。
（二）四門は四靜
慮行者若し初二
三四禪に入るに隨
ひて次第に憂喜
樂を出離するな
り。
（三）四攝法 布施
愛語利行同事は衆
生を攝化する法な
り、鉤索續鈴四苦
惱の内證にあつた
る。
（四）四梵住 慈悲
喜捨なり。
亂脱

にして各其所を得べし。

第二重の門を廂曲の中に於て、二龍王の兄弟を置き、難陀は南にあり、拔難陀は北にあり、其餘の衆寶莊嚴は、大いに秘密漫荼羅位品に同じ。阿闍梨言はく、若し深密の釋を作さば、四面の方相正直にして、均しく平等なるは、是れ（一）四念處の義、（二）四門は是れ四靜慮、亦是れ（三）四攝法なり。門標は是れ（四）四梵住、廂曲は是れ四正勤、四維は是れ四眞諦、金剛線は即ち是れ修多羅、此れを以て三十七品を連持して、法門の分齊を作す。外門の標相長短廣狹の量、皆中胎と正等なる所以は、如來の一一の法門は皆法界と相稱して、乃至毫釐の増減あること無きを明す。又所行の中道は、正しく蓮華臺實相の心に當つべし、其の普門の迹、遠くして逾廣し、故に「智者は外院に於て漸次に増加せよ」と云ふなり。

偈に云はく、「略して三摩地を説かん、一心にして縁に住せよ」と、此れより以下は漫荼羅の中の三昧の支分を答ふ。若し未だ瑜伽を修せざる者は、阿闍梨と作ることを得じ、支分を闕ぐを以ての故に法事成らず。經の中、初には略して三昧の名義を釋し、次には深廣に之を説く。初に略釋とは謂はく、心は縁を一境に係けて馳散せず、是れ

（一）有相瑜伽 自
身の外に本尊を立
て、三昧を修する
を有相瑜伽と云ひ
自身の外に本尊を
立てざるを無相と
云ふ。

等持の義なり、故に偈に略説三摩地一心住於縁と云ふなり。且く（二）有相の瑜伽に就いて、自ら上中下の三種あり、上は毗盧遮那等の諸如來の身を觀するを謂ひ、中は文殊師利等の諸菩薩の身を觀するを謂ひ、下は因陀羅等の隨類の身を觀するを謂ふ。一一に漫荼羅に示す所の色像と、威儀と、秘密の標式の或は印或は字の如く、ただ一心に縁に住してまた馳散せざる、即ち是れ彼の尊の三昧門なり。要を以て之を言はば、漫荼羅海會の佛刹微塵數の一一の善知識の如きは、皆一種の入法界三昧門なり。若し惣じて是の如くの普門の大衆を觀じ、一心に縁に住して馳散せざるは、即ち是れ普眼三昧門なり、又は普門世界三昧門と名く。一門及び一切門の如きは、或はただ正遍知部の三昧門に入り、或はただ蓮華部の三昧門に入り、或はただ金剛部の三昧門に入る。或は文殊の眷屬普くみな集會するを以て一三昧門とす、餘の三菩薩も亦爾り、行人の心量の大小に隨ひて種種に不同なり。

行者瑜伽を修習して、或は本尊を觀じ、或は秘密印を觀じ、或は眞言を觀する時、種種の境界現前することありて、本觀と相同じからざるは皆是れ邪觀なり。もし定中に於て、或は日月衆星の光明の燦麗なるを見、或は大蓮華王空中に遍滿するを見、或

は寶樹樓閣の殊勝に莊嚴せること、天宮及び諸の淨刹の如くなるを見、或はまた豁然として身心の相あるにあらず、或は諸佛菩薩の無量の大衆を見、或は種種の異聲を聞き、或は懸崖峻絶にして無間獄に至れるを見ん、本所縁に依らざるを以ての故に、皆取るべからず。ただ常の如く一心に作意せよ、定境と相應することを得と雖も、須らく深修して十縁生句を觀察すべし、味着すべからず。若し異の境界を見て、殊妙なりと思ひて之に取着するをば、名けて我慢定とし、亦慳執定と名く。但し正觀と相應する時、自然に俱胝佛利を見ることを得、此の中の佛は謂はく百千の衆、事利はいはく淨處なり。是の如く相應する時、即ち承前已來の種種の事相は因縁なきに非ず、如是如是の因縁を以ての故に如是如是の事相ありと知りて、他に由りて悟らざれども罣礙する所なし。

復次に深秘の釋ならば、謂はく、一一の善知識の法門身の眞實相の中に於て、心、縁に住して妄想戲論を生ぜざるは、是れ等持の義なり。阿字門に入りて一ら法界を念するが如きは、是れ毗盧遮那の三昧なり、法蓮華の印に於て一心不亂なるは是れ觀自在の三昧なり、金剛慧の印に於て一心不亂なるは、是れ秘密主の三昧なり、乃至梵釋

諸尊、各一法界門に於て自在を得。若し彼の解脱身に於て一縁不亂なるをば、彼の淨天眼三昧と名く、若し大悲藏雲海の中に於て一心不亂なるをば普眼三昧と名け、亦普現色身三昧と名く。たとひ如來無量阿僧祇劫に於て、此の中の廣義を演説すとも、なほ窮盡せじ。

今兩偈を以て之を攝して、窮盡して餘なからしめんと欲するが故に、「廣義復殊異大衆生諦聽」と云ふなり。此の中にまた二あり、初には如來の三昧印を明し、次には三昧道の中の差別印を明す。

偈に「佛說一切空」と云ふは。即ち是れ阿字門に入れば、乃至少法として得可きものあることなし、亦定相として三昧と名く可きなし。是の如くの一心法界に住するをば、名けて「正覺之等持」とす。然る所以は若し此の心性を出でて、外に境界の縁す可きあらば、即ち常住の境に非ず。境、四相の爲に遷さるる時、住縁の心も亦境界に隨ひて流る、云何が名けて定とせん。是の故に正覺の三昧は諸法の本不生を覺るが故に、唯だ是れ心自ら心を證し、心自ら心を知る、久遠よりこのかた常如實際にして、變易あることなし。即ち是の如く心自ら是の如くの縁に住するを以ての故に。等持と

名くることを得。此れは正しく是れ毗盧遮那本尊なり、所現の無盡莊嚴藏も亦是の如くの本尊を離れず、若し他觀ならば皆邪觀と名く。故に次に必定の印を説きて言はく、唯だ三昧を以てのみ心を證す、異縁によりて得るに非すと。若し梵本に據りて質朴に之を言はば、當に彼れ更に異得なしと言ふべし、言ふ意は餘處より之を得るにあらざるなり。

次に「彼れ是の如くの境界は一切如來の定なり」と云ふは、(二)大般涅槃經に明せるが如し。一切の心ある者は悉く佛性あり、此の佛性を即ち首楞嚴定と名け、亦金剛三昧と名け、亦般若波羅蜜と名く、佛佛道同にして更に異路なし。若し行人初發心の時、能く言の如く正しく心の佛性を觀せば、亦即ち名けて如來定に入るとなす。豈に煩しく漸く四處を超えて方に究竟に至らんや。また次に瑜伽行人。若し諸佛の威神加被を蒙るが故に、乃至三昧の中に於て、具さに十佛刹土の微塵衆等の無量の聖尊、三種の密印、互に相雜はらざるを見、或はまた一心不亂にして轉じて自身と成る、則ち奇特難思なりと雖も、尙ほ有相有縁なるを以ての故に、世間の三昧と名く。若し此の三昧現前する時、行者十縁生句を觀察して、一切の妄想戲論を淨除し、空寂と相應す。即

(二)大般涅槃經
北本第二十七、獅
子吼品。

(一)乾城 乾城は
城の略、乾城は
尋香と譯す、香を
食とし、園林城廓
の相を化作す、彼
れ去れば城廓從つ
て消滅す云ふ。

ち是の如くの漫荼羅海會は、皆悉く衆縁より生じて、鏡像・水月・(一)乾城等の如しと悟り、性相なしと觀する、是れを出世間の三昧と名く。然れども尙ほ空病未だ空せざるを以ての故に、未だ大空と名くることを得ず。道場に坐して自ら心性を證する時に及びて、即ち是の如く等の加持の境界は、皆是れ心の實際なりと知る。その時に心は相に住せず、亦空に依らずして、空と不空と畢竟無相にして、而も一切の相を具すと照見す、故に大空三昧と名く。此の三昧に住する者は、即ち是れ佛の無礙慧に住するなり。是の人は一切智智究竟圓滿すと佛説きたまへり。所以に經に、「故に説きて大空とす、薩婆若を圓滿す」と云ふ。

經の第二卷の初に云はく、「その時に大毗盧遮那世尊、一切諸佛と同じく共に集會して、各各に一切の聲聞・緣覺・菩薩の三味道を宣説す」とは、如來已に究竟の(三)三空三昧印を説きたまへり、普門進趣の者をして、留難なからしめんが爲の故に、また三味道の中の差別の印を説きたまふ。三重漫荼羅に示す所の種種の形類は、皆是れ如來の一種の法門身なり、是の故に悉く名けて佛とす。此れ等の一切の諸佛、各本より流通する所の法門に於て、自ら彼の三味道を説く。若し世天の身を現しては、則ち彼の天

(三)三空三昧
無相、無願の三解
脫門なり。

の三味道を説き、若し聲聞の身を現じては、即ち聲聞の三味道を説き、若し辟支佛の身を現しては、則ち辟支佛の三味道を説き、若し菩薩の身を現じては、即ち菩薩の三味道を説き、若し持金剛の身を現じては、則ち金剛の三味道を説く。當さに知るべし、此の中の偈頌は是の如く無量剎塵なり、世間の結集の經卷に能く具さに載する所に非ずと。然れども諸の行人若し深く瑜伽の境界三昧に入る時は、自ら當に了了に聽聞して、正説の時の如くして異なることなかるべし。是の故に名けて佛加持日とす。

經に云はく、「時に佛、一切如來一體速疾力三昧に入りたまふ」とは、謂はく、此の三昧に入る時は、即ち一切如來は皆同一法界の智體なりと證知し、一念の中に於て能く次第に、無量の世界海微塵等の諸の三昧門を觀察して、是の如くの若干の衆生は彼の三昧門の中に於て、道に入ることを得べしと知り、彼の善知識は已に若干の衆生の爲に、種子因縁を作し、未だ若干の衆生の爲に、種子因縁を作さず、或は衆生ありて、是の如くの法門に入らば、超昇して成佛することを得可し、餘の法門に入らば、久遠に稽留して成佛することを得じと知る。是の如く等の種種の根性不同なれば、進趣の方便も皆亦隨ひて異なり。乃至その中に遊戯して次第に修習し、出入して世間を

超え、一一の門に於て各能く無量の衆生を成熟することを得。故に一體速疾力三昧と名くるなり。

その時に世尊遍く觀察し已りて、種種の三味道は同じく一體に歸して、皆是れ佛乘なりと了知して、また執金剛の爲に一切の三味道の中の成菩提の印を説きたまふ。初に二偈あり、成佛の外迹を明す。謂はく、我れ初め道場に坐して、此の一體速疾力三昧を以て、天魔の軍衆を降伏せり。然れども是の中に更に降伏し難き處あり。謂はゆる煩惱等の魔なり。形相方所あることなく、亦足迹もなければ、覺知す可きこと難けれど、一念の中に於て亦みな殄滅せり。故に「降伏四魔」と云ふなり。「以大勤勇聲」とは謂はく、佛、誠實の言を以て魔波旬に告げたまはく、我れ無量無數劫に於て、衆生を調伏せんがための故に、身命を弃捨すること稱て數ふ可からず、而して今悉く已に成熟す。入道の機あるが故に、我れ將に菩提を證して、彼れ等の衆生の爲に淨眼を開發せんとす。汝の勢力何ぞ能く留碍せんやと。適此の聲を發する時、一切衆生の怖畏悉く除こり、天魔迷悶して地に躡れ、尋いで皆退散す。若し衆生ありて是の如くの三角の印を受持する者は、乃至無間獄の中の無量の怖畏を除く、何に況や天魔鬼神等

の怖をや。故に「大勤勇の聲を以て衆生の怖畏を除く」と云ふ。その時に地神歡喜し、展轉稱説して、乃至聲淨居に及ぶ。その時に大梵天等の八部の衆生の徒、此の伏魔の外迹を見る、是の故に名稱生することありて、號して大勤勇者とす。然れども我が實の成佛の處は、彼れ等の能く測量する所に非ず、故に次に二偈ありて、菩提の實義を明す。

「我覺本不生」とは謂はく、自心は本よりこのかた不生なりと覺る、即ち是れ成佛なり、而も實には覺もなく成もなし。一切衆生是の如くの常寂滅想を解せず、分別して妄に生ありと云ひて、六趣に輪廻して、自ら出づること能はず。今正法の音を聞くと雖も、還つて種種の有爲の事迹の中に於て、推求し、挾計して、成佛を冀望す。何ぞ得る理あらんや。「出過語言道」とは、此れより已下は皆是れ阿字門を轉釋す。本不生を覺るは即ち是れ佛なり、佛の自證の法は思量分別の能く及ぶ所に非ず、亦傳へて人に授與す可からず。(二) 智度に之を言語盡竟不行處と謂へり。「諸過得解脫」とは、一切の妄想分別を名けて過とす、即ち是れ生滅斷常去來一異等の種種の戲論なり。諸法の實相を知らざるを以ての故に、悉く皆破す可く轉す可し。若し諸法の本無生際を了り

(二) 智度論 第一
に云く、言語盡く
覺り心行亦訖り、
(中略) 諸の行處を
説くは世界を名け
不行處を説くは
第一義を名くとす。

(二) 大經 涅槃經
第五如來性品に云
く、解脫は諸の
因縁を抜く(中略)
眞解脫とは即ち之
れ如來なりと。

ぬれば、即ち是の如くの一切の過失に於て、皆解脫することを得。是の故に金剛の身は百非を遠離す。「遠離諸因縁」とは、若し法界の體、生滅の相あるときは、因あり縁ありて、宣説することを得可し。而も今法の縁より生ずるは自性なし。若し自性なきは即ち是れ本來不生なり。因縁和合する時も亦所起なく、因縁離散する時も亦盡くることあることなし。是の故に淨虛空の如くにして、常に變易せず。(二) 大經に亦云はく、ただ如來のみ諸の因縁を離ると。「知空等虛空」とは、本來不生なるは即ち是れ畢竟空の義なり。自性淨にして無際無分別なるを以ての故に大虛に同じ。是の故に世間に解し易き空を以て、不思議の空に譬ふるなり。「如實相智生」とは心の實相は即ち是れ毘盧遮那遍一切處なり。佛道場に坐して法相の如く解したまふ時、種種の不如實の見悉く滅して餘なし、是の故に薩波若の慧は虛空と等し。「已離一切暗」とは、一切の法相に於て、實の如く知らざるは即ち是れ無明なり。是の故に本不生を覺る時、即ち遍法界の明を生ず、一切種を以て、一切の法を觀するに、見聞觸知せざることなし。「第一實無垢」とは、此の最實の事、更に過上なければ第一實際と名く、謂はゆる自性清淨心なり。一切の暗を離るるを以ての故に、佛の知見はまた垢汗なし。皆是れ本不生の義

(一) 華嚴八十華嚴經第十二如來名號品。

を轉釋するなり。
次に二句あり、結んで「諸趣は唯だ想と名となり、佛相も亦復然り」と云ふは、言はく、六趣の衆生と毘盧遮那とは本より二體なし、但し衆生の種種の妄想到に隨ひて種種の名を立つるのみ、佛も亦是の如し、一切世間はただ我が降魔の迹のみを見て、彼れの心相に隨ひて之を稱説して、或は大沙門と云ひ、或は大勤勇と云ふ。乃至(二)華嚴に説く所、一世界の中に於て無量の異名あり。自證の法の中に、其の所説の如く表示す可しと謂ふには非ず。

(二) 世諦を釋通第一義諦が世諦に文添するを云ふ。

次の一偈はまた(三)世諦を釋通して起教の所由を明す。故に「此の第一實際は加持力を以ての故に、諸の世間を度せんが爲に、文字を以て説く」と云ふ。謂はく、佛眼を以て之を觀するに、是の如く種種の名言も、亦また第一實際を出でず、而も諸の衆生の入道の因縁、種種に不同なり。若し文字語言を以て得度すべきには、即ち如來、實際のままにして、自在神力を以て、彼彼の聲字を加持して之を演説したまふ。若し衆生、法の如く修行して、三密と相應することを得る時は、則ち世諦第一義諦に異ならずと知るなり。

經に云はく、「その時に執金剛具德者、未曾有の開敷眼を得て、一切智を頂禮して偈を説きて言さく」とは、具德は一切如來の秘密莊嚴の德を具足するを謂ふ。蓮華の増長し具足する時、日光に照されて自然に開敷して、瑞嚴可愛なるが如く、執金剛も亦爾り、心蓮華眼、菩提印の光に遇ひて、朗然として開敷し、萬德皆備る。美内に暢ぶれば、外に彰るる容も亦青蓮華日開敷の相あり、而して伽陀を説きて、前の旨を領解す。

初に「諸佛は甚だ希有なり權智不思議なり」と云ふは、具さに梵本を存せば、一切諸佛は希有なり、智と方便と不思議なりと云ふべし。智は前の偈の中に覺本不生を領解するを謂ひ、方便は前の偈の中の加持神力を領解するを謂ふ。復次に智は心蓮華臺具足を謂ひ、方便は葉葉開敷を謂ふ。二種俱に不可思議なり、故に希有と云ふなり。次に「一切の戲論を離れて法佛自然の智なり」と云ふは、是れ廣く不思議智を歎す。「而も世間の爲に説きて衆の希願を満足せしむ」とは、是れ廣く不思議の方便を歎す。若し法、師に依りて得、衆因縁より生せば、即ち是れ戲論生滅の相なり、法性佛の自然の慧に非ず。若し是れ自然の慧ならば、修學して得可きに非ず、亦人に授く可からず。

内に證せる天の甘露味は、假令種種の方便を以て、未だ嘗めざる者の爲に之を説くとも、終に解すること能はざるが如し。然るに佛の大方便力、無相法身を以て、種種の名相を作して加持して、諸の衆生をして、因果の法を以て非因非果の法を證得せしむ。是の故に權實の二慧俱に不可思議なり。次に「眞言の相是の如し、常に二諦に依る」とは、是れ不思議の二智を結成して、上の文の二諦を施設するの意を領解す。名相即ち實際なりと知るを以ての故に、能く實際を以て加持して名相を作す。淺略即ち深秘なりと知るを以ての故に、能く深秘を以て淺略とす。衆生に隨ひて成る所の義利みな實にして慮しからず。若し能く此の世諦を解する時は、自ら當に第一義諦に通達すべし。故に諸佛說法常依二諦と云ふなり。

次に一偈あり、佛の菩提印を信解すれば、無量の福聚を得ることを明す。故に「若し諸の衆生ありて、此の法教を知らん者をば、世人供養すること、制底を敬ふが如くすべし」と云ふ。制底キヤクは是れ生身の舍利の所依なり。是の故に諸天世人福祐を祈る者皆悉く供養す。若し行人是の如くの義を信受せば、即ち法身の舍利の所依なり、一切世間の供養恭敬を受くるに堪へたり。復次に梵音の（一）制底（二）質多と字體同じ、此の中

（一）制底キヤク質多ヂヤの合字なるを云ふ。

（二）達磨駄都梵語 Dharmadhatu を法界と譯す。

の秘密は心を謂ひて佛塔となす。第三の漫荼羅の如きは、自心を以て基として次第に増加して、乃至中胎の涅槃の色は最も其の上に居る、故に此の制底は甚だ高し。又中胎の八葉あり次第に増加して、乃至第三の隨類普門の身に至るまで、處として遍せざることなし、故に此の制底は極めて廣し、蓮華臺の（一）達磨駄都（二）は謂はゆる法身の舍利なり。若し衆生、此の心の菩提印を解すれば、即ち毗盧遮那に同じ、故に世間供養すること制底を敬ふが如くすべしと云ふ。

經に云はく、「時に執金剛、此の偈を説き已りて、諦かに毗盧遮那を觀て、目暫くも瞬かず、默然として住す」とは、時に執金剛已に畢竟三昧の印を聞きて、三昧道の中の差別の印を問ひたてまつらんと欲す。若し語言を以て佛に白さば、恐らくは至理に乖かん、是を以て嘿然として佛を觀たてまつりて、一心にして住せり、即ち是れ甚深の發問なり。復次に執金剛默然として住することは、如來の機を照したまふ義を表さんと欲するが故なり。常教に傳ふる所の、佛は晝夜三時に於て、化す可き衆生を觀じて、之を度脱すと云ふが如きは、此れは聲聞の心量に隨ひて、自らは是の如くの説を作すのみ。若し佛眼は觀じて後に見る、觀せざれば則ち所見なし、觀する時は則ち智慧

生じ、觀せざる時は即ち智慧生ぜずといはば、是れ則ち生滅明暗の境なり、平等大慧と名くことを得じ。如來の無相無分別の慧は、法爾に無礙なるを以て、常に法界の根縁を照すこと、大海の潮の終に限を過たざるが如し。是の故に金剛手に適傳ふ可き機あれば、如來即ち爲に演説したまふ、問を待ちて而して後に答ふるにはあらず。復次に金剛手は世諦即ち是れ第一義諦なり、所行の處は畢竟の處に異ならずと了知す、是の故に默然として無言なり。如來は第一義諦即ち世諦なり、畢竟の處は所行の處に異ならずと了知す、是の故に廣く分別して説きたまふ。衆生をして二諦の相に通達せしめんが爲めの故に、たがひに相發明す、而も實には同じく一致に歸す。

如來の答の中に就きて略して四句あり。第一の句に云はく、「復次に秘密主、一生補處の菩薩は、佛地の三味道に住して、造作を離れ、世間の相を知り、業地に住し、佛地に堅住す」とは、此れは是れ最上灌頂の位なり、故に先づ之を明す。餘經に明す所の如きは、此れは是れ一生所繫の菩薩なり、此れより兜率天宮に上生して、次に佛位を紹ぐが故に一生補處と名く。今此の經宗には一生とは一よりして生ずるを謂ふ。初めて淨菩提心を得る時、一實の地より無量無邊の三昧惣持門を發生す。是の如く一

の地の中に次第に増長すること、當に亦爾りと知るべし。第十地の満足するに至りて、未だ第十一地に至らず、その時に一實の境界より具足して、一切の莊嚴を發生す、唯だ如來の一位のみ少けて、未だ證知することを得ず、更に一轉の法性の生ずることありて、即ち佛處を補す、故に一生補處と名く。此れは是れ究竟の發菩提心なり、一切の三味道の中に於て最も牢強の精進とす、進みて佛道に入るが故に、「住佛地三味道」と云ふなり。

「離諸造作」とは、作は謂はく、治地の業を修し、乃至佛土を莊嚴し、衆生を成熟するは、有智分別の心なるを以て、猶ほ是れ世間の相なり。今此の菩薩は正しく大空三昧を行ひて、從緣生の法、微細の戲論を遠離するが故に、離造作と云ふなり。「知世間相」とは謂はく、實に世間の實際は、畢竟して涅槃の際に異ならずと知りて、而も能く實際を動かさずして、悉く世間本起の因縁を見る。是の故に此の三味道の中に住すれば、念念の如來地に進趣す。「住於業地」とは、梵音に質に之を言ふ、當に作地と云ふべし、即ち是れ如來金剛の事業を學びて、皆善巧を得るなり。(一) 瓔珞には亦三重玄門に入りて、佛の威儀を學ぶと云へり。「堅住佛地」とは、即ち是れ如來地に於て堅固

(一) 瓔珞經 賢聖
(二) 重玄門 寂滅
(三) 重玄門 寂滅
三昧即ち無相三昧
なり、八地に於て
已に玄門に入りて
今十地に於て再び
證す、故に重玄
門に入る云ふ。

不動なる、之を名けて住とす。前の住の字と義殊なり。人の渴乏して水を求むるに、已に多時を經歷して、忽ちに清涼の池を親見することを得、中間に更に障礙無ければ、ただ一心に進趣して、また異縁なきが如き、是れを（二）補處の三味道と名く、已に清涼の池に到りぬれば、希願盡く息むをば亦佛地となす。故に同じく大空定と名くと雖も、義に差別あり。

（二）補處の三味道補處に盡く可き三味の道。

經に云はく、「秘密主、八地の菩薩の三味道は、一切諸法を得ず、有の生を離れて一切如幻なりと知る、是の故に世に觀自在者と稱す」とは、如上に已に十地の道を説く、若し次第に進まば當に佛地を説くべし、若し漸く下らば當に第九地を説くべし、何が故に八地を説くか。一切の菩薩初めて第七地を度する時、上諸佛として求む可きを見ず、下衆生として度す可きを見ざるを以て、是れ大涅槃に住せりと謂ひて、萬行に於て休息す。その時に十方の佛、此の三味道を以て、その心を發起して、菩提心の難地を度することを得しむ、是の故に別に説きたまふ。此れより進みて九地の中に入るに別説なきことは、此れより患難を過ぐるが故に、別に行處の印を説くことを須むす。初發意より以來深く十縁生句を觀じて、此の地に入る時、性空の彼岸に度ることを得、

故に「一切の諸法を得ず、有の生を離る」と云ふ。また善巧方便を以て、如如不動の中に於て、十縁生の無邊の多用を起し、如幻三昧を以て遍く十方の佛刹に至りて、種種の善知識に親近し、普く無量の度人門を學び、諸の衆生に隨ひて、何等かの像類言音を以て得度すべき者には、即ち皆之を現して爲に法を説く。是の故に世間是の如くの事迹を見るが故に、號して觀世自在者とす。是れ初めて蓮華三昧に入るの異名なり。此の中の自在は、梵本の正本には是れ富貴の義なり、人の大勢の位を得て財寶を具足し、心の欲する所に隨ひて自然に成就するが如く、此の菩薩も亦爾り、假令十方世界の一切有情、世出世間の種種の資具を希求すれども、其の性欲の種種の不同に隨ひて、能く如幻三昧を以て、一時に給與して各其所願を滿つることを得。然れども未だ起用の迹を絶して、有らゆる所作をして金剛の如くならしむること能はず。故に分ちて二印となすのみ、復次に此の中に初法明門の三味道を説くべく、已に説きし故に重ねて言はず。又如上に説く所の一生補處及び八地の三昧は、是れ教道の法門に約して此の如くの説を作すのみ。然れども秘密乘の人は、世諦の中に於て即ち能く第一義諦に通達する者なり、初發心の時より即ち具さに大空三昧を行ふ、其れ然らずと謂はば、

則ち一生の中に於て頓に諸地を満足すること能はじ。

國譯大毘盧遮那成佛經疏卷第六終

國譯大毘盧遮那成佛經疏卷第七

沙門一行阿闍梨記

入漫荼羅具緣品第二の餘

經に云はく、「復次に秘密主、聲聞衆は有緣の地に住して生滅を識り、二邊を除き、極觀察智を以て、不隨順修行の因を得、是れを聲聞の三味道を名く」とは、(一)阿毘曇に明すが如き、(二)九想、(三)八念、(四)背捨、(五)勝處、(六)一切入、(七)三三昧等をみな住有緣地と名く。此れ等の三昧を以て方便とするに依るが故に、その心をして恬然として靜ならしむ。正觀察を得て、世間出世間の法は皆悉く因あり緣あり、世間は集を以て因とし、苦を以て果とす、出世間は道を以て因とし、滅を以て果とすと覺る。阿含の中に廣く明せるが如し。(八)毗尼の中に要を擧げて之を言へり、謂はゆる諸法は緣に従ひて起る、如來是の因を説きたまふ、彼の法は因緣を以て盡く、是れ大沙門の説なりと。因緣の生滅を知るを以ての故に、有無の見を滅し、斷常の二邊を遠離して、眞諦の智生することを得るが故に、極觀察智と名く。能く極めて觀察するを以ての故に不倒不謬

(一)阿毘曇、梵語、新には阿毘達磨、Abhi dharmaと云ふ、對法と譯す、發智論、六足論、婆娑論、俱舍論等、一切有部の論藏を指す。
 (二)九想、死屍の相を觀するに、血塗相、膿相、相、不淨なる相、九相あり、此れを九想と名く。
 (三)八念、佛の八徳を念ふこと、念するなり。
 (四)背捨、五蘊に於ける貪を除くこと、背捨するなり。
 (五)勝處、外色等の八あることを勝處と名く。
 (六)一切入、一切の法に勝進したる精密なるものなり。
 (七)三三昧、空、無相、無作の三種の三昧なり。
 (八)毗尼、律藏なり、五分律第十六卷の文を指す。

諸部 上座部 大乘部乃至小乘部 二十部等なり。

辟支佛 梵語 なり、獨覺と譯す、又は緣覺とも云ふ、但し獨覺と緣覺と 覺同しからず、龍樹 智度論 第三十二卷の文。

なり、故に諦と名くるなり。無明より老死に至るまで、此れあるが故に彼れあり、此れ生ずるが故に彼れ生じ、乃至輪廻無際なり。若し此れに隨ひて輪轉する、之を名けて順とす、既に四眞諦を見已りて生死の流に背き、隨ひて聖道を行ひ、乃至我が生已に盡く、梵行已に立つ、所作已に辨ず、後有を受けずと、能く自ら記說する是れを不隨順と名く。是の如くの種種の不隨順の行は、要す三昧を以て因とするが故に、不隨順修行の因を得と曰ふ。聲聞の三昧は復(三)諸部の異說種種に不同なりと雖も、是の如くの法印に合ふをば即ち正行と名く、若し是の如くの印なきをば是れを邪行と名く。經に云はく、「秘密主、緣覺は因果を觀察し、無言說の法に住して、無言說を轉せずして、一切の法に於て極滅語言三昧を證す、是れを緣覺の三味道と名く」とは、因果は即ち是れ十二因緣の法なり、聲聞の極觀察智を以て唯蘊無我を解了するが如きは、厭怖の心重きを以ての故に、疾く煩惱を斷じて自ら涅槃を證するとも、十二因緣の實相を分析し推求すること能はず、(三)辟支佛は智慧深利なるが故に、能く總別の相を以て深く之を觀察して、一切の集法は皆是れ滅法なりと見る、此れ聲聞と異なり。阿含に云はく、十二因緣の法は有佛にも無佛にも法位常住なりと。(三)龍樹も亦云はく、此

の中の法位は即ち是れ如の別名なりと。此れは是れ一切世間に最も解し難き處なり、故に世尊始めて成道したまふ時、說法を樂はずとは、意此にあり。辟支佛は所入漸く深し、故に住無言說法と云ふ。不轉と言ふは謂はく、此の第一義に住する時は、聲字あることなし、故に轉じて以て人に授く可からず。世尊は無礙の知見を得て、法に於て自在にして、能く無言說の法の中に於て、爲に名字を作して衆生に轉授したまふ。辟支佛は智慧に礙あり、是の故に演說すること能はず。復次に辟支佛は、一切の集法は皆悉く涅槃の相の如しと觀じて、種種の有爲の境界の中に於て、皆亦戲論の風息みて、云はん所を知らず、故に極滅語言三昧を證すと名く。瑜伽を修するに是れと相應する、是れを緣覺の三昧と名く。此の二種の三昧は皆是れ菩提心の難處なり、然れどもただ是れ所行の道の中の一種の心相なり。不思議の心性に是の如くの三密の定相ある可しと謂ふにはあらず。是の故に行人、此の法印を以て、自ら印知し已りぬれば、便ち當に直ちに過ぎて無礙なるべし。若し善く識知せざれば、則ち爲に留礙せらる。經に云はく、「秘密主、世間の因と果と及び業との、若しは生、若しは滅、他主に屬して空三昧生ず、是れを世間の三味道と名く」とは、謂はく、一切世間の三昧は

要を以て之を言はば、究竟の處に於て、因果及び因に従ひて果を辨する時のあらゆる作業をみな滅壞す、謂はく、此の三事の若しは生、若しは滅、皆他に繫屬す。他とは神我を謂ふなり、然る所以は、若し行人正因縁の義を解せずして而も諸禪を修證せば、必ず當さに自心に計着して以て内我とすべし。彼れ世間の萬法は心に因りて有なるを見て、神我に由りて生ずと謂へり。假令内我に依らずとも必ず外我に依る、即ち是れ自在・梵天等なり。若し深く此の中の至蹟しきやくを求むれば、自然に因業を撥除して、唯だ我性のみ獨り存す、乃至一法として心に入ること無くして、而も空定を證す、最も是れ世間究竟の理なり。是の故に三有を盡すに垂なんなんとして、還りて三途に墮つ。禪定の中に於て種種の世間の勝智を發し、五神通を具すと雖も、其の宗趣をあきらむるに終に是の處に歸す。故に斯の一印を以て、一切世間の三味道を統收す、若し行者、此の心に入る時は、當に自ら覺知すべし。

經の中に、佛、攝偈を説きたまふ。五種の三味道の中に就きて、大いに分ちて二とす。謂はく、佛と菩薩と縁覺と聲聞との四種をば、皆出世間の三昧と名く、若し諸天等の説く所の眞言法教の道をば、皆世間の三昧に屬す。出世間の三昧は皆實の益あり、

故に「權害於諸過」と云ふ。世間の三昧は但だ權けんの益あるのみ、故に「爲利衆生故」と云ふなり。餘經に説く所の如きは、小乗を求むる人は、當に修行し作觀して、即ち世間の法教に於て深く厭離を生ずべし、大乘を求むる人は、又聲聞の法教に於て深く怖畏を生ずべしと。是れ皆未だ秘密藏を知らざる者の爲に、此の方便の説を作すのみ。此の經宗に就かば、五種の三昧は皆是れ心の實相門を開く。もし行者初め有相の瑜伽に住するときは、則ち是れ世間の三昧なり。但し此の中に於て、唯蘊にして無我なりと了知するは、即ち是れ聲聞の三昧なり。若し十縁生句を以て、諸蘊の無性無生を觀するは、即ち是れ菩薩の三昧なり、餘は住心品の中に廣く明せるが如し。餘教に心性の旨を未だ明さざるを以ての故に、五乘轍を殊にして相融會せざるとは同じからず。若し更に深秘密の釋を作さば、三重漫荼羅の中の五位の三昧の如きは、皆是れ毗盧遮那の秘密加持なり、其のともに相應する者は、皆一生に成佛す可し、何ぞ淺深の殊あらんや。今の偈の中に説く所は、彼れ等が自ら流傳する所の法教に就きて言ふのみ。

經に云はく、「復次に世尊、金剛手秘密主に告げて言はく、秘密主、汝當に諦かに諸

の眞言の支分を聴くべし」とは、眞言を大いに判するに略して五種あり。謂はく、如
 來の説、或は菩薩金剛の説、或は二乗の説、或は諸天の説、或は地居天の説なり。地
 居天とは龍鳥・修羅の類を謂ふ。又前の三種をば通じて聖者の眞言と名け、第四をば
 諸天衆の眞言と名け、第五をば地居者の眞言と名け、亦通じて諸神の眞言とも名く可
 し。聖者の眞言にも亦阿字或は囉字等を説くが如く、彼の諸の世天乃至地居鬼神等も
 亦復之を説く、彼の相に何の殊異かあるとならば、阿闍梨言はく、若し佛菩薩の説き
 たまふ所は、即ち一字の中に於て無量の義を具す、且らく略して之を言はば、阿字に
 自ら三義あり、謂はく、不生の義、空の義、有の義なり。梵本の阿字の如きは本初の
 聲あり、若し本初あるは則ち是れ因縁の法なり、故に名けて有とす。又阿とは是れ無
 生の義なり、若し法、因縁を攪りて成るは、則ち自ら性あることなし、是の故に空と
 す。又不生とは則ち是れ一實の境界なり、一實の境界は即ち是れ中道なり。故に龍樹
 云はく、因縁生の法は亦空亦假亦中なりと。又大論に薩婆若を明すに三種の名あり、
 一切智は二乗と共に、道種智は菩薩と共に、一切種智は是れ佛不共の法なり。此の三
 智は其れ實には一心の中に得、分別して人に解し易からしめんが爲の故に、三種の名

(一)龍樹 中觀論
 第四の文。
 (二)大論 智度論
 第八十四卷。

(一)大論 智度論
 第四十八。

作をすと。即ち是れ阿字の義なり。又囉字の如きは亦三義あり、一には塵の義、二に
 は阿字門に入るを以ての故に、即ち是れ無塵の義なり、又波羅蜜の義あり、究竟して
 彼岸に到るを以ての故に、即ち是れ本初不生なり。當に知るべし、亦三點を具す、三點
 に即ち一切の法を攝す、阿字・囉字の如く餘の諸字の義も皆然りと。又一切の語言の中
 に阿の聲を帶ぶるは皆阿字門に攝せらる、若し囉の聲を帶ぶるは皆囉字門に攝せらる、
 餘字も亦爾り、(二)大論の語等字等の中の釋義と亦同し。下の文にはまた廣く釋せず。
 若し諸の菩薩眞言に阿字あるは、當に知るべし、各の自ら通達せる所の法界門の中に
 於て一切の義を具す、普門法界の中に於て一切の義を具するに非すと。若し二乗の眞
 言に阿字あるは、當に知るべし、ただ盡無生智と寂滅涅槃とに約して、不生の義を
 明すなりと。若し梵天説く所の眞言に阿字あるは、是れ出離五欲覺觀の不生に約して
 義を明すなり。若し帝釋・護世の眞言に阿字あるは、是れ十不善道及び災横の不生に
 約して義を明す。餘は皆類を以て知る可し。如上の説く所は皆是れ隨他意語にして、
 淺略の義を明すのみ。若し隨自意語に就きて深密の義を明さば、一門に入るに隨ひて、
 皆一切法界門を具す、乃至諸の世天等も悉く是れ毗盧遮那なり、何ぞ淺深の別あらん

(一)盡無生智の位に於
 て四論を證せるこ
 そを自ら知るを盡
 智と云ひ、更に證
 すべきなしと知る
 を無生智と云ふ。
 (二)護世 四天王
 なり。

や。若し行者能く無差別の中に於て差別の義を解し、差別の中に無差別の義を解せば、當に知るべし、是の人は二諦の義に通達し、亦眞言の相を識れるなりと。

「復次に經の中に自ら諸の眞言の相を説く。初の偈に「正等覺の眞言の言名成立の相は、因陀羅宗の如くして、諸の義利成就す」と云ふは、此れは如來の眞言の通相を明すなり。今且らく(一)最初の三昧耶の眞言に約して之を説かば、言とは謂はく、一一の字は皆是れ一種の入法界門なり。阿三迷アサミと言ふが如きは、阿字は是れ無生の門なり、娑字は是れ無諦の門なり、麼字は是れ大空の門なり、名とは謂はく、此の一一の字門共じて一名を成す、阿をば名けて無とし、三迷をば名けて等とす、若し更に之を合せば即ち是れ無等なり。成立とは謂はく、此の衆名に籍りて、始終共じて一義を成す。初の句に無等と云ひ、次に三等と云ひ、次に三昧耶と云ふが如きは、共じて相成立す、即ち是れ無等三平等の三昧耶なり。復次に多名を以て共じて一句を成すが如きは、謂はゆる諸行無常等なり、乃至「此の多句を綜て共じて一偈として、然して後に義圓なり、即ち是れ諸行無常・是生滅法・生滅滅已・寂滅爲樂・等なり。皆是れ眞言の成立する所の相なり、餘は皆此れに倣へ。」如因陀羅宗」とは因陀羅インドラは是れ天帝釋の異名なり。帝釋自ら

(一) 最初の三昧耶密印品の最初に説ける入佛三昧耶の眞言。

聲論を造りて、能く一言に於て具さに衆義を含ましむ、故に引きて以て證とす。世間の智慧すら猶ほ此の如し、何に況や如來の法に於て自在なるをや。「諸義利成就」とは謂はく、如來の眞言は、一一の言に於て、皆具さに能く一切の義利を成就し、一一の名の中に、亦具さに一切の義利を成就し、一一の成立の相の中に、亦具さに能く一切の義利を成就す。且らく三昧耶の眞言を擧ぐれば、最初の阿字は本不生の義を以ての故に、即ち息災の田あり。本不生を以ての故に、一切の功德具足して缺けたることなければ、即ち増益の用あり。本不生を以ての故に、無量の過失殄滅して餘なければ、即ち降伏の用あり。更に一法として此の本生を出づる者なければ、即ち攝召の用あり。是の如く本不生の中には、所有の功なくして、即ち能く一切の諸事を成辦す。阿字の如く、餘の一一の字も亦是の如し、一一の字の如く、一一の名句及び成立の相も皆亦是の如し。是の故に當に知るべし、即ち此の眞言の中に一切功用を具足すと。已に眞言の通相を説き竟りぬ。

次に眞言の別相を明す、故に「増加の法句と本名と行と相應することあり」と云ふ。謂はく、凡そ眞言の事業を作さんには、當に此の眞言の中の本所立の名と、及び所爲の意

じけれども、三昧に淺深の異あり。能く神通を以て物を利し、其の願ふ所を皆成就することを得しむ。四大弟子を除くの外は、餘の聲聞の力の能はざる所なり。又其の眞言は、唯だ十二因縁の寂滅の理を説くのみ、故に「謂はく、三昧分異にして業生を淨除す」と云ふなり。

經の中に次に眞言の如實の相を説くが故に、「復次に秘密主、此の眞言の相は、一切諸佛の所作にも非ず、他をして作さしむるにもあらず、亦隨喜せず、何を以ての故に、是の諸法は法として是の如くなるを以ての故に、若しは諸の如來出現し、若しは諸の如來出でたまはざれども、諸法法爾として是の如く住す、謂はく諸の眞言と眞言とは法爾なるが故に」と云ふは、如來の身語意は畢竟平等なるを以ての故に、此の眞言の相・聲字みな常なり、常なるが故に流れず、變易あることなし、法爾として是の如し、造作の作す所に非ず、若し造成す可くば即ち是れ生法なり、若し生することあらば則ち破壊す可し、四相に遷流せられて無常無我なり、何ぞ名けて眞實語とすることを得んや。是の故に佛自ら作したまはず、他をして作さしめたまはず、設令能く作す人ありとも亦隨喜したまはず。是の故に此の眞言の相は、若しは佛、世に出興したまふ。

ふにも、若しは出世したまはざるにも、若しは已説、若しは未説、若しは現説、法は法位に住して性相常住なり。是の故に必定印と名く。衆聖道同なり、即ち此の大悲漫荼羅の一切の眞言は、一一の眞言の相みな法爾として是の如し、故に重ねて之を言ふ。

若し是の如くならば、是の諸の眞言の相は、畢竟寂滅にして人に授與せず、何が故にかある時には出興し、ある時には隱没する。故に經にまた所由を釋して云はく、「秘密主、正等覺を成する一切知者・一切見者、世に出興して、自ら此の法を以て種種の道を説き、種種の樂欲に隨ひて、乃至種種の諸趣の音聲を以て、而して加持を以て眞言道を説く」と。此の意は言はく、如來自證の法體は、佛の自ら作したまふにも非ず、餘の天・人の作す所にも非ず、法爾常住なり、而も加持神力を以て世に出興して、衆生を利益したまふ。今此の眞言門の秘密の身口意は、即ち是れ法佛平等の身口意なり、然れども亦加持力を以ての故に世に出現して、衆生を利益す。如來の無礙知見は、一切衆生の相續の中に在りて、法爾に成就して缺減あることなし。此の眞言の體相に於て實の如く覺らざるを以ての故に、名けて生死の中の人とす、若し能く自ら知り・自

ら見る時を、即ち一切知者・一切見者と名く。是の故に是の如く知見する時は、佛自ら造作したまふ所にもあらず、亦他の傳授する所にも非ず、佛、道場に坐して、是の如くの法を證し已りて、一切世界は本よりこのかた、常に是れ法界なりと了知すれば、即時に大悲心を生ず。云何が衆生、佛道を去ること甚だ近くして、自ら覺ること能はざるか。故に此の因縁を以て如來世に出興して、還つて是の如くの不思議法界を用て、種種の道を分作し、種種の乘を開示し、種種の樂欲の心機に隨ひて、種種の文句方言を以て自在に加持して、眞言道を説きたまふ。機感の因縁より生ずと雖も、而も實際を動かす。善巧方便を以て爲さざる所なしと雖も、然れども佛の所作にも非ず。普門を以て異説すと雖も、而もただ佛の知見を以て衆生に示悟したまへり。若し行者、此の眞言の十喻の中に於て、妄りに有爲生滅を見れば、更に心垢を増す、則ち如來の本意に非ず。

復次に世尊、未來世の衆生は鈍根なるを以ての故に、二諦に迷ひて、俗に即して而も眞なることを知らず。是の故に慇懃に事を指して言はく、「秘密主、云何が如來の眞言道なる、謂はく、此の書寫の文字を加持するなり」と。世間の文字・語言は實義な

るを以て、是の故に如來は即ち眞言の實義を以て之を加持したまふ。若し法性を出でて外に、別に世間の文字ありといはば、即ち是れ妄心の謬見なり。都て實體の求む可きなれども、而も佛、神力を以て之を加持したまふと云はば、是れ則ち顛倒に墮つ、眞言に非ず。

已に所加持の處を知りぬ、如來は何の法を以てか加持したまふ。故に佛、次に言はく、「秘密主、如來は無量百千俱胝那由多劫に、眞實諦語・四聖諦・四念處・四神足・十如來力・八波羅蜜・七菩提寶・四梵住・十八佛不共法を積集し、修行せり、秘密主、要を以て之を言はば、諸の如來の一切智智と、一切如來の自福智力と、自願智力と、一切法界加持力を以て、衆生に隨順して、其の種類の如く眞言教法を開示す」とは、謂はく、如來の無量阿僧祇劫に積集せる功德を以て、而して遍一切處の普門の加持を作したまふ。是の故に一一の言・名・成立の中に隨ひて、皆因陀羅宗の如く、一切の義利成就せざることなし。又此の一一の功德は即ち眞言の相に同じ、法性自爾にして、造作の成す所に非ず。今且らく阿字の一言に約して以て其の義を辨せば、行者自ら心を證する時の如きは、世出世間の因果本不生なり、故に苦・集・滅・道・なくして、一實諦のみあ

(二) 八倒 常樂我淨苦空無常無我なり。
 (三) 四如意足 欲神足動神足心神足觀神足なり。
 (四) 是處非處智等 佛の十力の第一をあげて他の九力を攝す。
 (五) 十八種法 十八不共法なり。十智度論第二十六、寶積經第四十六、俱舍論第二十七等に
 出づ。

(五) 唯蘊無我等 初劫に約して本不生の義を明す。

(六) 蘊の阿頼耶 等 第二劫に約して本不生の義を明す。
 (七) 極無自性心 等 第三劫に約して本不生の義を明す。

りと了知す。此の一實諦を見已りて、必定師子吼して、廣く衆生の爲に之を説きたまふ、是れを「積集修行眞實諦語」と名く。又(二)八倒の本不生を知るが故に、如來の念處を成す、(三)四如意足の本不生を知るが故に、法性の神通を成す、(四)是處非處智等の本不生を知るが故に、佛の自然智力を成し、六蔽の本不生を知るが故に、六度の彼岸に至る、七菩提分の本不生を知るが故に、七種の無師覺寶を成す、四梵住の本不生を知るが故に、無縁の慈悲喜捨を成し、(五)十八種の法の本不生を知るが故に、是の故に心量を出過して、一切衆生と共にせず、乃至種種の法門、當に自在に之を説くべし。

復次に此の經の初品の中の義の如きは、若し(五)唯蘊無我を了知し、乃至寂然界を證する時は、當に我人・衆生・壽者の本不生に約するが故に、種種の法門を明すべし。五喻を以て性空を觀察する時は、當に諸蘊の本不生に約するが故に、種種の法門を明すべし。(六)蘊の阿頼耶を觀察し、乃至心は前後際不可得なりと覺る時には、當に心の影像の本不生に約するが故に、種種の法門を明すべし。(七)極無自性心生する時は、當に淨菩提心の本不生に約するが故に、種種の法門を明すべし。乃至如來地には、當に大

悲胎藏漫荼羅の究竟不生の義に約して、種種の法門を明すべし。阿字の不生門の如くば、迦字の無作門等にも、皆廣く説くべし、一一の字の如きは、乃至一一の名。一一の成立にも、皆廣く説くべし。

復次に世尊は法に於て自在にして、或は一字を以て、菩提心等の種種の一法門を攝し、或は二字を以て、止觀等の種種の二法門を攝し、或は三字を以て、三空等の種種の三法門を攝し、或は四字を以て、念處等の種種の四法門を攝し、或は五字を以て、根力等の種種の五法門を攝し、或は六字を以て、六度等の種種の六法門を攝し、或は七字を以て、七菩提寶等の種種の七法門を攝し、或は八字を以て、八直道等の八法門を攝し、或は九字を以て、九定等の種種の九法門を攝し、或は十字を以て、十力等の種種の十法門を攝し、乃至無量の字を以て、無量の法門を攝す。諸の名句等も亦復是の如し。若し眞言の通相に就かば、行者が一の阿字門を持つ時の如きは、彼の性欲の機縁に隨ひて、或は四念處を悟り、或は四神通等を悟りて、各各不同なり、然れども一法門を解了する時に隨ひて、即ち諸餘の法門を具して、種種の法寶、求めざるに自ら至る。若し別相に就かば、四字を以て四念處門を攝したるが如し、若し法の如く修

行する時は、昔より未だ曾て正しく身受心法を觀せずと雖も、自然に念處門を悟りて、而して法界の諸の法門に入る。常途の名義は智度等に廣く説けるが如し。

經に一切智智等
力に四種の功
智を自福智と
願力なり法界
加持は已成の
智は已なり如
二行は現成の
以我功徳なり
故に經文の三
に當ゆる。三力加持は

復次に如來、種種の法門を遍く擧ぐ可からざるを以ての故に、また要を擧げて之を言ふ。初に一切智智と云ふは、即ち是れ惣じて十方三世の如來の一切の金剛智印を擧ぐ。此れを以て同共に加持すれば周からざる所なし。又一切如來も菩薩の道を行ひし時に集めし所の無邊の福聚と、發生する無盡の大願とを以て、薩婆若の中に至りぬれば、究竟して圓滿す。是の故にみな智の名を得。言ふ意は、是の如くの福願智力と、及び一切法界の本性の加持力とを以て、世間に隨順して、其の種類の如くに加持を作したまふ。是の故に一切衆生の種種の身語意に於て、皆眞言教法を開示す可し。

經に「秘密主、云何が眞言教法」と云ふは、即ち謂はく、阿字門等なり、是れ眞言の教相なり。相は體に異ならず、體は相に異ならず、相は造作の修成に非ず、人に示す可からずと雖も、而も能く解脱を離れずして、聲字を現作す。一一の聲字は即ち是れ法界に入る門なるが故に、眞言法教と名くることを得。至論せば眞言法教は一切の隨方諸趣の名言に遍すべし。但し如來出世の迹、天竺に始まるを以て 傳法の者、且

らく梵天に約して、一途を作して義を明すのみ。

經に云はく、「謂はく阿字門一切諸法不生の故に」とは、阿字は是れ一切法教の本なり、凡そ最初に口を開く音にみな阿の聲あり、若し阿の聲を離るれば、則ち一切の言説なし、故に衆聲の母とす。凡そ三界の語言はみな名に依る、名は字に依り、故に悉曇の阿字を衆字の母とす。當に知るべし、阿字門眞實の義も亦復是の如し、一切法義の中に遍せりと。所以は何んとならば、一切の法は衆縁より生ぜざることなきを以て、縁より生ずるものは悉くみな始あり本あり、今此の能生の縁を觀るに、亦また衆縁縁より生ず、展轉して縁に従ふ、誰れをかその本とせん。是の如く觀察する時は、則ち不生本際を知る、是れ萬法の本なり。猶ほ一切の語言を聞く時、即ち是れ阿の聲を聞くが如く、一切の法の生を見る時、即ち是れ不生本際を見る、若し不生本際を見る者は、即ち是れ實の如く自心を知る、實の如く自心を知るは即ち是れ一切智智なり、故に毗盧遮那唯だ此の一字を以て眞言としたまふ。而も世間の凡夫は諸法の本原を觀ざるが故に、妄りに生ありと見る、所以に生死の流に隨ひて自ら出づること能はず。彼の無智なる畫師の、自ら衆彩を運びて、畏る可き夜叉の形を作し、成し

二有作有作者
 論に因して作者
 業ありと謂ふ者
 果ありと謂ふ者
 其の本原に過る
 原因に其の作者
 原因に至る、結
 矛盾を無視する
 矛盾に陥るなり

已りて還つて自ら之を觀て、心に怖畏を生じて、頓に地に躡るるが如く、衆生も亦復
 是の如し。自ら諸法の根源を運びて、三界を畫作して、還つて自ら其の中に没して、
 自心熾然にして備さに諸苦を受く。如來有智の畫師は既に了知し已りて、即ち能く自
 在に大悲漫荼羅を成立す。是れに由りて言はば、謂はゆる甚深秘藏とは衆生自ら之を
 秘するのみ、佛に隱あるには非ず。

「迦字門は一切諸法離作業の故に」と云ふは、梵音の迦哩耶キヤリヤは是れ作業の義なり。
 諸の外道の作者等ありと計するが如く、諸部の論師も、二亦作あり作者あり、所用の
 作法あり、三事六合するが故に果報ありと説く。若し般若の方便に因りて、決定あり
 と謂はば、即ち無因に墮ちん。若し無因に墮つれば、一切の法即ち因果なからん。能
 生の法を因と名け、所生の法を果と名く、是の二法無なるが故に、作と及び作者と、
 所用の作法と、罪福の果報と、及び涅槃の道と、一切皆無なり。復次に作と作者と、
 相因待して生ず、若し定めて作法あらば、當に定めて作者あるべし、皆是れ外道の論
 議に異ならず。中論の觀作者品の中に廣く説けるが如し。今正しく作と作者等とを
 觀察するに、悉く乘縁より生じて、即ち本不生際に入る、本不生際とは佛ありとも佛

なくとも法爾として是の如し、誰れをか造作の首とせん。是の故に若し迦字を見
 るときは、則ち一切の諸法は皆是れ造作所成なりと知るをば、名けて自相とす。若し
 是れ作の法は畢竟無作なるを名けて眞實の義となすと知るべし。
 「法字門は一切諸法等虚空不可得の故に」とは、梵音の法ホウ字は是れ虚空の義なり。
 世間に虚空は是れ無生無作の法なりと共許す、若し一切の法本不生にして諸の作を離
 るれば、是れ畢竟して虚空の相の如し。今此の空相も亦復不可得なり。何を以ての故
 に。世間に無色の處を虚空の相と名くるが如きは、色は是れ作の法にして無常なり、
 若し色未だ生せず、未だ生ぜざれば則ち滅も無し、その時に虚空の相もなし。色に因
 るが故に無色の處なり、無色の處を空と名くればなり。中論の觀六種品の中に廣く説
 けり。此の中の義も亦是の如し、若し色本來不生ならば、何者をか名けて無色の處と
 せん、無色の處不可説なれば、則ち虚空の定相なし。復次に諸法は虚空の相の如し、
 是れを不誑相の涅槃とす。經に説けるが如し、五陰滅して更に餘の五陰を生せず、若
 し五陰本來不生ならば、今何の滅する所をか涅槃と名けんと。是の故に如虚空の相も
 亦不可得なり、是れ法字門眞實の義なり。

「俄字門は一切諸法一切不可得の故に」とは、梵には(1)俄多也と云ふ、是れを名けて行とす。行は去來進退不住の義なり。今阿字門より展轉して之を釋せば、諸法本不生なるを以ての故に無作なり、無作なるが故に則ち待對して説きて空とす可き所なし、空とは即ち是れ不行の處なり、不行の處すら尙ほ不可得なり、況や行處をや。中論の觀去來品に行止の義を明せり。相續を以ての故に行と名く。穀子より芽・莖・葉を生じ、及び無明は諸行等に緣たるが如し。斷を以ての故に止と名く。穀子滅するが故に芽・莖・葉滅して、無明滅するが故に諸行等も滅するが如しと。若し法已行ならば則ち無行なり、已行の故に未行も亦無行なり、未だ行の法有らざるが故に、行の時も亦無行なり、已行と未行とを離れざるが故に。是の如く等の種種の門を以て觀察するに、畢竟して無行なり。無行の故に則ち所止なし、無行無所止なるを以ての故に、則ち是れ諸趣に往來する者あることなく、亦涅槃に住する者もなし。復次に若し人、本處を助せずして、即ち是れ所詣なりといはば、是の人は無行無到なりと知るべし、故に一切行不可得と云なり。

「伽字門は一切諸法一合不可得の故に」とは、梵には(1)伽那と云ふ、是れ密合の義なり。

り。衆微相合して一の細塵を成し、諸蘊相合して一身を成す等の如し。中論の觀合品に、諸の論師の言はく、見と可見と見者との三事を以ての故に、所見あり、當に合ありと知るべし、聞と可聞と聞者と、乃至染と可染と染者と等の如く、諸の煩惱も亦然りと。答者の云はく、凡そ物の皆異なるを以ての故に合あり、而も今一切の法は異相不可得なり、是の故に合なしと彼れに廣く説けるが如し。字門を以て展轉相釋するが故に、且らく行の義を以て之を明さば、凡そ所行あるは、必ず行と可行と行者との三事相合することありと知るべし。今一切の法は本生の故に則ち所行なし、若し所行なくば、云何が行と可行と行者と合することを得んや。復次に若し諸法各各異相ならば、終に合の時なし。若し亦不生際に至りぬれば、則ち異相もなく亦合す可からず。是の故に一切の法は畢竟して合なし。

「遮字門は一切諸法一切遷變を離るるが故に」とは、梵には(1)遮度底と云ふ、即ち是れ遷變の義なり、又梵音の(2)遮喇耶は是れ諸行の義なり。もし遮字を見る時は、即ち諸行の遷變不住を知る。中論の觀行品に云はく、諸行をば五陰に名く、諸行より生ずるを以ての故に、是の五陰は皆虛妄にして定相あることなし。嬰兒の時の色より、乃

至老年の時の色までの中間、念念不住なるが如きは、決定の性を分別するに不可得なり。性とは決定の有に名く、變異す可からざること、眞金の不變なるが如し。今諸法は生すと雖も、自性に住せず、是の故に無性なりと知るべし。彼れに廣く説けるが如し。若し無性なるものは即ち是れ本初不生なり、本初不生なるは即ち是れ如來の身なり、常恒に安住して變易あることなし、故に離遷變と云ふ。復次に若し一切の法は必ず是れ和合所成ならば、則ち遷變あり。今諸法は無生無作にして、乃至所作なきが故に、則ち和合なし、和合なきが故に、則ち一切の遷變を離る。凡そ諸の字門は皆當に逆順に旋轉し、相釋して罣碍なからしむべし、今は且らく次第相承に約するのみ。

〔車字門一切諸法影像不可得〕とは、梵音の(二)車野(三)は是れ影の義なり。人の影像の皆自身に依るが如し。是の如く三界の萬法は唯だ是れ識心なり、因縁を以て變じて衆境に似たり。是の事は密嚴經に廣く説けるが如し。乃至瑜伽を修する者には種種の不思議の事あり、或は能く面たり十方の諸佛の普現色身を見るも、亦皆是れ心の影像なり。心本不生なるを以ての故に當に知るべし、影像も亦所生なし、所生なきが故に、乃至心遷變なきが故に、影像も亦遷變なしと。然る所以は影の自ら定性なければ、行止す

(1) 車野 Chaya

るに身に隨ふが如く、心の影も亦爾り。心動きて戲論を作すとも、一念として住する時なきを以ての故に、世間の萬用も亦復之が爲に流轉す。若し心の如實の相を了する時は、影も亦如實相なり、故に不可得なり。

〔惹字門は一切諸法生不可得の故に〕とは、梵には(二)啗哆也(三)と云ふ、是れ生の義なり。泥團と輪と繩と陶師と等の和合するが故に、瓶生することあり、縷と繩と機と杼と織師と等の和合するが故に、氈生することあり、持地と築と基と梁と椽と泥と草と人功と等の和合するが故に、舎生することあり、酪と酪器と鑽と人功と等の和合するが故に、酥生することあり、種子と地と水と火と風と虚空と時節と等の和合するが故に、芽生することありが如し。内法の因縁も亦是の如し、無明行等各各に生因としてまた生す。是の故に若し惹字門を見るときは、即ち一切の諸法は縁によらずして生することなしと知る。偈を説きて言へるが如し、衆の因縁生の法は是れ即ち自性なし、若し自性なくば云何が是の法あらんと。是の故に生不可得なり。外道の論師は、種種の邪因縁或は無因縁を以て一切の法を生すと説く。佛法の中の人も、亦般若の方便を失ふことあるが故に、因縁生滅の相に取着す、(三)中論に廣く破せるが如し。復次に阿

(1) 啗哆也 Jata

(三) 中論 因縁縁

字門は是れ諸法本性不生なり、惹字門も十喻を以て生を觀するに、縁によりて有なりと雖も、而も不可得なり。若し生畢竟不可得ならば、則ち無生際に異ならず。又十喻は是れ心の影像なり、法界を出でず、故に生も亦無生際を出でず。

〔社字門は一切諸法戰敵不可得の故に〕とは、梵には社シヤと云ふ、是れ戰敵の義なり。若し社シヤ字を見るときは、則ち一切の諸法皆戰敵ありと知る。世間の善と不善の法と、生死の流に逆ひ生死の流に順ふ法と、布施と慳貪と、持戒と破戒と、乃至智慧と無明と等の、更相たがひに待對して勝負無常なるが如き、乃至如來出世して、一切智力を以て魔軍の衆を破したまふも、亦戰と名く。然れども一切の法の中に我の義成らざるが故に、智慧と煩惱と竟に誰れに屬すとしてか、毘婆舍那ビバサナ能く煩惱を破ると言はん。若し明生する時、暗滅するが故に、名けて破と爲すと言はば、已生の故に破るとせんや、未生の故に破るや。已生ならば則ち暗なし、更に何の所破かあらん。未生ならば自ら体あることなし、又何ぞ能く破らんや。若し生する時を名けて半已生半未生とするが故にとならば、明暗畢竟して相及ばず。又一切の法は本不生にして、乃至影像もなきが故に、便ち同一相にして如を出でず、云何が佛界の如と魔界の如と戰はん

(1) 社シヤ 戰敵

や。故に佛、道場に坐せし時に、ただ諸法は無對なりと了知したまふ、而も世間に議して自ら戰勝の名を立つるのみ。

〔吒字門は一切諸法慢不可得の故に〕とは、梵音の吒タ迦囉カは是れ慢の義なり、彼の法は卑下なり、此の法は高勝なりと見るを謂ふ。三界六趣の種種に優劣不同なるが如く、所起の慢心も無量に差別なり、略説するに七種の相あり、毗曇の中に廣く明せるが如し。乃至三乘を求むる人にも、猶ほ上地下地の不平等の見ありと。今諸法は無生なり、乃至待對なしと觀するが故に、則ち阿耨多羅三藐三菩提は法に於て平等にして、高下あることなしと知る。是の故に如來を亦は一切金剛菩薩とも名け、亦是四果の聖人とも名け、亦是凡夫外道とも名け、亦是種種の惡趣の衆生とも名け、亦是五逆邪見の人とも名く。大悲漫荼羅は正しく此の義を表すなり。

〔陀字門は一切諸法長養不可得の故に〕とは、梵音の吒タ咤鉢那ハナは是れ長養の義なり。世間の種子を因と爲し、五大と時節とを縁として、漸次に滋長して果實を成すことを得るが如く、内法も亦爾り。業田の中に於て、識の種子を下し、無明に覆はれ、愛水に潤されて滋長することを得。稻芋經の中に廣く明せるが如し。今此の經の違世と順

(二) 七種の相
過慢と慢過慢と
我慢と増上慢と卑
慢と邪慢となり。

世との八心、相續し增長するにも、亦因縁あり、乃至淨菩提心も、五字門を以て縁として、大悲の根を生じ、佛の娑羅樹增長し、彌布して法界に滿つ。然れども一切の法は、即ち此の五字門の本不生と離言説と自性淨と無因縁と如虛空相とに由るが故に、長養不可得なり。復次に阿迦の字より以來、展轉相釋するに、乃至諸法畢竟平等にして、高下あることなし、高下なきを以ての故に、增長あることなしと知るべし。

「拏字門は一切諸法怨對不可得の故に」とは、梵音には(一)拏摩囉と云ふ、是れ怨對の義なり。世間の仇讎更相(二)報傷するが故に、名けて對とするが如し。又前に戰敵と云へるは彼此相加す、此の中の怨對は是れ仇を避くる義なり、梵音は各自不同なり。毗尼の中に佛説きたまはく、怨を以て怨に報ふれば、怨終に絶えず、唯だ怨なければ怨乃ち息むことあるのみと。又説きたまはく、女人は是れ梵行者の怨なりと。無量義經にも亦説きたまはく、生死の怨敵、自然に散壞して、無生忍半佛國の寶を證すと。是の故に行者拏字門を見る時、則ち一切の法は悉く怨對ありと知るをば、字相を了知すと名く。又諸法は本不生なり、乃至長養不可得なるを以ての故に、當に知るべし、怨對も亦復本來不生なり、乃至長養あることなし、是の故に如來は畢竟して怨對あるこ

(一) 拏摩囉 Da-mara

となしと。之を字門眞實の義と名く。

「茶字門は一切諸法執持不可得の故に」とは、梵音の(一)湯迦は是れ執持の義なり、茶字の上に點を安置するを以て、是の故に轉聲して湯となる、其の體は則ち同じ。(二)又藥哩訶と云ふは亦是れ此の別名なり、(三)經には鬼魅所着と云ひ、或は非人所持と云ふ、(四)智度には着衰と云ふ、皆是れ藥哩訶鬼の所作なり。人に着きて相捨離せざるを以ての故に、以て名とす。その日月五星等も亦終始相隨ふを以ての故に、梵語には藥哩訶と名く、翻じて九執とす、正しく一處に(五)相會せり。天竺の曆には正着時と名く、此れ執持の義なり、(六)陀羅とは同じからず。此の茶字門を見るときは、即ち一切衆生は無始よりこのかた、四魔のために着かれて、捨離すること能はずと知る、是れを字相と名く。今阿字等の種種の門を以て、展轉して一切の法を觀するに、皆不可得なるが故に、當に知るべし、一切の法は怨對あることなし、怨對本不生なるを以ての故に、終に平等法界を以て平等法界に執着せずと。故に一切諸法執持不可得と云ふ。

「多字門は一切諸法如不可得の故に」とは、梵には(七)哆他多と云ふ、是れ如如の義なり、語勢の中に兼ねて得の聲あり、如如を證得するは即ち是れ解脫の義なり。如は謂

(一) 湯迦 Dhank

(二) 藥哩訶 Gra

(三) 經 法華經第二及同第八

(四) 相會 諸星運轉して相續するを謂ふ。
(五) 陀羅 Dhara
(六) 陀羅尼(總持)の陀羅にて持又は執の義なり。

(七) 哆他多 Taha-

(二) 龍樹 智度論 第三十二。

(三) 中論 觀涅槃品。

(四) 薩他嚩 毘婆沙。

はく諸法の實相なり、種種の不如實見の戲論皆滅すれば、常に本性に如ひて破壊す可からず。若し多字門を見れば、即ち一切の諸法は皆是れ如如の相なりと知るをば字相と名く。然るに一類の外道ありて計すらく、如如の性あり、若し此れを知見するをば名けて解脱とすと。此の説を作すと雖も、只是れ我見の上に於て轉じて異名を作すのみ。(二)龍樹おもへらく、聲聞經の中に法住と言ふは、亦是れ諸法如如の義なり、所入未だ深からざるを以ての故に、滅度の想を生じて、涅槃を證すと謂へりと。然れども生死涅槃は是れ相待の法なり、若し生死は本際よりこのかた、常に自ら涅槃の相の如しと知りぬれば、また誰れに待するが故にか説きて涅槃とせん。是の故に一切の法は、畢竟じて實に非ず、虚に非ず、如に非ず、異に非ず。(三)中論に亦云はく、涅槃の實際と及び世間の際と、是の如くの二際は毫釐も別なしと。差別なきを以ての故に、一切の法は怨對なし、怨對なきが故に執持なし、執持なきが故に亦如如解脱もなし。

「他字門は一切諸法住處不可得の故に」とは、梵音の薩他嚩は是れ住處の義なり、亦是れ位の義なり。人の此の住處より某の處に昇上する其の所依の處所を説きて、名け

て、位とするが如し。諸の賢聖の地位も亦是の如し、諸の行道の人の心迹の所依・所止息の處に約するが故に、種種の名を説く。若し他字を見る時は、即ち一切の諸法は縁を待たずして成ることなしと知るが故に、當に知るべし、悉く所依住の處ありと、是れを字相と名く。然れども諸法は本來不生なり、乃至如如解脱も亦不可得なれば、則ち去もなく・來もなく・行もなく・住もなし、是の如くの寂滅の相の中に、當に何の次位かあるべき。復次に多字門に入る時は、諸法は皆空なりと了知するが故に、生死の中にも住せず、即ち此の如如も亦不可得なるが故に、涅槃の中にも住せず、その時に行處盡く息みて諸位皆盡き、一切處に遍して依なし、是れを不住の法を以て、如來の大住に住すと名く。

「娜字門は一切諸法施不可得の故に」とは、梵には檀那と云ふ、是れ捨施の義なり。若し娜字を見る時は、即ち一切の諸法は皆是れ捨つ可き相なりと知る。所以は何となれば、一切の法は離合すること縁にあるを以て、堅住することあることなし。若し中に於て執着して愛を生ずれば、必ず爲に焚かる、乃至十地の諸菩薩も自他所生の淨妙の功德に於て、未だ捨の彼岸に到らざるが故に、猶ほ不思議の退失あり、第

(一) 檀那 Dāna
(二) 不思議の退失
(三) 位に於て
(四) 此の退失
(五) 凡起すに非ざ
(六) 邪見の起すに非ざ
(七) 離の思議する所
(八) 非の思議する所
(九) 退失と名く

一安樂の處とは名けず。今諸法の不生を觀するが故に、施者と施處と及び所施の物と、皆悉く本來不生なり、乃至一切の法は住處なし、住處なきが故に即ち此の三事も亦住處なし、是の故に佛道場に坐したまふ時、すべて所得もなく、所捨もなし。虚空藏の中に於て蘊積する所なければども、而も普門より流出して遍く群生に施す。是れを檀の實相を見ると名け、亦檀波羅蜜を具足すと名く。又如來秘寶の藏は皆是れ法然なり、謂はゆる人に授く可からず、若し他に施す時は、還つて衆生の心室の中に就きて之を開出するのみ、是の故に經に一切諸法施不可得と云ふをば、名けて字門眞實の義となす。

「駄字門は一切諸法法界不可得の故に」とは、梵に(一)達摩駄都と云ふ、名けて法界とす、界は是れ體の義・分の義なり、佛の(二)舍利を亦如來の駄都と名く、言はく、是れ如來の身分なり。若し駄字門を見るときは、即ち一切の諸法悉く皆體ありと知る。謂はく、法界を以て體とす、所以は何にとなれば、若し諸法の實相を離るときは、則ち一切の法、體義成らざるが故なり。夫れ法界とは即ち是れ心界なり。心界本不生なるを以ての故に、當に知るべし、法界も亦本不生なりと、乃至心界無得無捨なるが故に、

(一) 達摩駄都
Dhammadāru
(二) 舍利 梵語 Cetiya の訛略なり、身體の義。

當に知るべし、法界も亦復無得無捨なりと、捨すら尙ほ自ら無なれば、法として捨つ可きことなし、況や得可けんや。若し法界是れ可得の相ならば、即ち是れ衆因縁より生ず、若し衆因縁より生ずるは、當に知るべし、自ら本體なし、何に況や諸法の體とならんやと。故に法界とは唯だ是れ自證の常心にして別の法なし。復次に如來の大施とは謂はゆる大悲漫荼羅なり、法界とは即ち是れ普門の實相なり、是の如くの實相は、加持神力を以ても人に示す可からず、是の故に法として得可きことなし。

「波字門は一切諸法第一義諦不可得の故に」とは、梵には(一)波羅摩他と云ふ、翻じて第一義とす、或は勝義と云ふ。(二)薩底也を此に翻じて諦とす、諦の義は娑字門に於て之を説くべし。今此の波字門は正しく第一義の相を明す。(三)龍樹云はく、第一義をば諸法の實相に名く、不破不壞の故に。復次に諸法の中に第一なるを名けて涅槃とす、阿毘曇に云へるが如し、云何が無上の法なる、謂はく智縁盡くるなり、智縁盡くるは即ち是れ涅槃なりと。若し波字を見れば、即ち一切の法は第一義を離れず、第一義は諸法の實相を離れずと知る、是れを字相とす。若し字門の眞實の義ならば、第一義も亦不可得なり、何を以ての故に、愛なく着なきが故に。智論に又云はく、衆生涅槃の

(一) 波羅摩他
Parāmartha
(二) 薩底也 Satya
(三) 龍樹 智度論
第三十一。